



TITLE:

中國古代の石庖丁形玉器と骨鏟形玉器

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 中國古代の石庖丁形玉器と骨鏟形玉器. 東方學報 1982, 54: 1-81

ISSUE DATE:

1982-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66616>

RIGHT:

中國古代の石庖丁形玉器と骨鏟形玉器

林 巳奈夫

一 前言	一頁		
二 薄く挽き切られ、或ひは刻みを入られた石庖丁形玉器の存在	三頁		
三 薄く挽き切られた骨鏟形玉器	七頁		
四 石庖丁形玉器の編年	一〇頁		
(1) 不對稱太短型	一〇頁		
(2) 不對稱太短型の原型の石庖丁	一八頁		
(3) 不對稱細長型	二七頁		
(4) 近似對稱細長型	二九頁		
(5) 不對稱孔細長型	三三頁		
(6) 近似短冊型	三五頁		
(7) 無孔型	三五頁		
(8) その他	三五頁		
五 薄く挽き切られ、或ひは刻みを入られた石庖丁形玉器の年代的位置づけ	三六頁		
		(1) 各型式への同定	三六頁
		(2) 弧形の削りこみの年代	三七頁
		六 骨鏟形玉器の編年	四六頁
		(1) 廣漢型	四七頁
		(2) 神木型	五一頁
		(3) 二里頭型	五三頁
		(4) 二里岡型	五六頁
		(5) 終末型	五八頁
		(6) 本體基部無境界型	五九頁
		(7) その他	六一頁
		七 薄く挽き切られた骨鏟形玉器の年代的位置づけ	六一頁
		八 夏王朝、殷王朝早期、中期においてこれらの玉器の演じた瑞玉としての役割	六三頁

一 前言

ここに石庖丁形玉器と呼んだのは、以前に筆者が「中國古代の祭玉・瑞玉」を書いた際に、『周禮』玉人の瑋邸射――

中國古代の石庖丁形玉器と骨鏟形玉器

璋で邸（基部）に射（斜めに殺がれた部分）のあるもの——に當てた圖46のごとき玉器を指し、骨鏃形玉器と呼んだのは、同じ論文で『周禮』玉人の牙璋——牙（齒）の飾りのある璋——に當てた圖51のごとき玉器を指す。それらの玉器の原型に關して、前者についてはペリオ、濱田等のそれを石器時代の石庖丁とする考へに賛し、後者についてはそれを骨鏃とする考へを提唱した³。これらの點については現在も同じ考へである。

昨年六月米國に旅行した際、フォッグ美術館、フリア美術館においてこの手の玉器多數を見る機會を得たのを機に、この二種類の玉器の年代分けについて認識を深めることができた。また以前の論文においては、古典に記される玉器の名稱が、現在我々の知ることができる玉器の中の、どのような型式のものに對應するものであるかの研究に多くの紙面を費し、それらの玉器の同時代における具體的な用法については、殆んど立ち入る餘裕を持つことができなかったのであるが、筆者は最近この點についても、器物の觀察に基いて興味深い事實を知ることができると至った。識者の意見をもとむべく、ここにそれを提示するのであるが、筆者の最近の考へでは、これらの種類の玉器が中國の社會、政治機構の中で重要な役割を演じた年代は、前引論文を書いた時に考へたのよりも遙かに古く、それらの玉器の原型となった石器、骨器の盛んに使用された時代と重複してゐる。ところが『周禮』に出てくる璋邸射、牙璋といった名稱は、總括的な名稱としての「璋」に限定する語を附加するといふ形態を持つてゐる點、それらの名稱が、『周禮』よりも遙かに年代的に遡り、それらの玉器が現役として政治、社會の中で役割を演じてゐた時代に使はれてゐたものであるかどうか、極めて疑はしい。一方當然のことながら、それらの玉器の現役時代における名稱を知る手だては今のところない。そこで『周禮』に使はれてゐる名稱を避け、敢へて新造の用語をもって指し示すことにしたのである。



圖1 二枚一組の石庖丁形玉器 戰國時代
輝縣琉璃閣76號墓出土 長約22cm

二 薄く挽き切られ、或ひは刻みを入れた石庖丁形玉器の存在

先に「中國古代の祭玉・瑞玉」を書いた時、瑞玉、即ち天子が諸侯に地位の印として與える象徴的な玉器といふやうなものが實際に使はれた證として郭寶鈞氏の意見を引いた。^①即ち

郭氏は輝縣琉璃閣七六號墓出土の一組の璋（本論文圖1）が、一枚の璋を二枚におろしたもので、その形と色澤紋理から、これを合せて見れば合ふか合はぬかすぐわかる。璋が瑞節として使はれたのは史實である、と記してゐるのである。^②この墓は伴出物から戰國初のものと考えられるとしたものである。

その時は氣付かなかったが、同様な例は他にもあったのである。卷頭圖版1に引くウインスロップ・コレクションの例である。これらは縁と黒縁の斑の玉で作られてをり、その圖錄の解説にマックス・レール氏は上の器について

この器の材質は下の器と殆んど同一と言つてよく、兩者は同じ玉塊から切り出されたに相違ない。上の器の孔がより大きい點を除き、兩者の形もまた似てゐる

と指摘してゐる。この二枚はいづれも片刃——以後片刃とは切出小刀のやうに片面のみに斜面をとる刃のつけ方、兩刃と

は鉞のやうに兩面に斜面をつける刃のつけ方を指す——に作られるが、刃裏、即ち平らな面を合せてみると、確かに玉理はよく合ふ。實物で合せてみて氣附いたことであるが、孔の位置もぴたりと合致し、面白いことに合せると兩刃の石庖丁形玉器が出来上るのである。これは一つの玉塊から切り出したところでなく、一枚の石庖丁形玉器を作つて、それを二枚におろした、といふ形をとつてゐるのである。合せて見た時、玉理に若干のずれが認められる。いふまでもないことであるが、玉材を切りわけけるには、薄い道具に硬い砂をつけて擦り、狭い溝を深めてゆくことによつて挽き切るのである。問題の一對の玉器の玉理のずれは、挽き切る際に失はれた少數ミリの厚さの玉材に對應する程度のもものと見られた。この例は、この式の玉器が先秦時代の契約書や割符——一枚の木の板の兩側に同文の契約書を書いて中央で二つに割るとか、竹筒に同文の通行證を何通か書いてこれを一通づつに割り、關所の通行證とする——と同じ機能を果たしたことを證する、極めて有力な證據と考へられるのである。

このウインスロップ蒐集品のやうな好適な例は今のところ他に見出せないが、一枚の石庖丁形玉器を二枚に挽き切った片ひらは例に乏しくない。管見に觸れた所では、例へば圖版2のフリア美術館の藏品である。圖の上に示した片刃の斜面のある面は光澤があるが、下に示したその反對側、刃裏の面が磨ガラス様である。現在の旅大市、四平山積石塚から戰時中に發掘された龍山期の玉材の切れ端の切り口は、丁度このやうな磨ガラス風のとや消しの状態である。この玉器はまた上及び左右の邊が、表側では面がとられてゐるのに對し、裏側では鋭く角張つてゐる。穿たれた孔についても同様のことが觀察される。刃裏の表面の状態、周縁や孔の口の狀態から判斷すると、この器は兩刃のものを二枚に挽き切った片ひらと見られる。

圖版2の例はそれでも刃の裏側は平らで、挽き切った後平らにならしたと思はれるのであるが、圖版3に示した同じくフリア美術館藏のものは切り放しで、上と下から挽き切つて來た切り目の喰ひ違ひがそのまま残つてゐる。淡褐綠色の斑

のある玉材で作られてゐるが、表が磨かれて光澤を持ち、上及び左右の縁は面をとられて角が圓味を持つのに對し、裏側の面は仕上げがなされず、稜角も角張ったままである點、前引の例と同様である。

圖版2のやうな例を見ると、或ひは惡徳古物商が入手した石廬丁形玉器を二枚におろし、金儲けをたくらんだと考へられないこともない。何しろ一枚の紙本の書畫を二枚におろすなどといふことをやってのける連中である。然し圖版3に引いたやうなものを見ると、二枚におろしたのは近頃のことではないといふことにならう。賣物ならば幾ら何でももう少しきれいに仕上げて誤魔化しておくはずと思はれるからである。¹⁰

このやうな一枚の石廬丁形玉器を二枚におろす作業が近・現代ではなく、確かに古代に行はれた證は圖版4測圖1（測圖は本文末にあり）の白鶴美術館の藏品に得られる。使はれてゐる玉は黒色であるが、極く薄くなった部分をみると黒飴色、半透明である。この器はこの玉質が後述の陝西神木縣出土と思はれる同美術館藏の骨鏹形玉器と同じで、同じ時に一括購入されてゐる。恐らく大體同じあたりから出たものと推測される。この玉器は兩刃の石廬丁形玉器を二枚におろした、片ひらであるが、切り目が一方に偏り、寫眞、測圖1に見るやうに幅の廣い方の端の刃の所にもとの刃の斜面の一部が切り残されてゐる。この失敗のせいかどうか、理由はわからないが、この器は擦り切りの行はれたのと反對の面の幅廣い側を磨りくばめ、第六章(6)節に記した本體基部無境界形の石鏹形玉器に近い形に改造されてゐる。そしてもとの石廬丁形玉器の表面は仕上げられ、光澤を持つてゐるのに對し、挽き切った側は切り放しで、磨ガラス様の面を残したままである。重要なことは、この玉器は寫眞にも見られるやうに、表裏ともに黃土中の石灰が沈着してこびりついてゐることである。このことは、この器が遙か昔、土中に埋った時には既に擦り切られてゐたことを示すものである。後に見るやうに、これと同時に購入された骨鏹形玉器にも同様なことが觀察され、ここに引いた例が弧證でないことが知られる。

石廬丁形玉器の中には圖42のやうに刃の鋒、幅の狭くなった端の近くに淺い割りこみのある類がある。この例は兩刃で

二枚におろした痕はない。この玉器の峰は圓味を持つのに對し、割りこみの部分の小口は平らで、兩側の廣い面と接する部分の稜角はカチツと角張つてゐる。このことからブリティッシュ・ミュージアムのローソン女史は、この式の玉器の作られたのと、割りこみの作られたのは時期を異にし、割りこみは後で加へられたもの、との意見である。¹¹この問題については後に検討を加へるが、ここでとり上げたいことは、この割りこみの加へられた類にも薄く殺がれたもののあることである。圖版5に引いたフリア美術館の藏品がそれである。灰綠色の玉であるが、上圖に示した例は薄く挽き切った際の磨ガラス様の面が仕上げの磨きを加へられずに残り、左寄りの部分は上から擦り切つてきて切り込みの方向が次第に狂ひ、反對の面に到達した所で止つてゐる。下圖はその裏側、原の玉器の表面であるが、右方に擦り切りの作業によって切り破られたあとが認められよう。それにしても貴重な玉器に對して随分荒っぽいことをしたものである。

圖版6はケルン東アジア美術館の藏品。灰綠色の玉で、これも刃の峰、幅の狭くなつた方の端近くに割りこみがあるが、これはまた前引のものとは方式を異にしてゐる。即ち、丁度鍵の切り込みのやうに、複雑な段が作られてゐることである。更に刃にも浅い切り缺きが作られてゐる。背の部分で厚さ三ミリ、刃の切り缺きのあるのと反對側、これと對應する邊で厚さ一・三ミリと極く薄く、上圖に示した面には中央近く、長軸方向に薄く挽き切った時の切り込みの喰ひ違ひによる段が残る。この器は兩面とも光澤が鈍く、擦り切った後に磨きの仕上げが加へられてゐない。表裏における兩刃の斜面の殘存状態からみて、三枚におろした中間の一枚かと思はれる。これなどは複雑な割り込みのある所からも、割符たるにふさはしい好適な例といへよう。

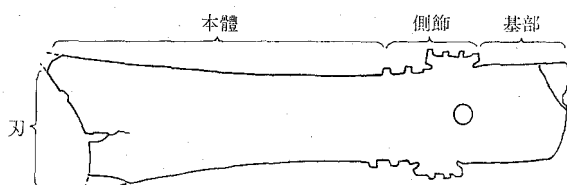


圖2 骨鏟形玉器各部名稱圖

三 薄く挽き切られた骨鏟形玉器

骨鏟形玉器にも石庖丁形玉器と同様、薄く挽き切られたものがある。圖3はフリア美術館の藏品で、明暗の灰緑色の斑の玉で作られるが、厚さ一〜二ミリの極く薄いものである。下に示した面の下側寄りに、上から擦り切って行った際の切口の喰ひ違ひの段が残り、仕上げられてゐない。その部分にそのまま残された擦り切りの溝は幅三分の一乃至二分の一ミリの狭いものである。擦り切られた磨ガラス様の面もそのままである。

圖版7、圖4、測圖2に引いた出光美術館藏のものも擦り切りで挽き切られた例の典型的なものである。褐色の斑のある灰オリューズ色の玉であるが、上圖の面は本體（以下骨鏟形玉器の各部名稱は假に圖2のごとく呼ぶことにする）の根本の方に單純な平行線が刻まれ、表面は磨かれて光澤をもつ。一方その反對の面は擦り切ったまま仕上げがなされず、磨ガラスのやうにつや消しで、上下から挽き切られた時の切り口の喰ひ違ひの段が残り、表側に刻まれてゐた平行線紋の裝飾もこの側には勿論ない。表面の平行線紋の終る所に僅かに尖った突起が出てゐる（圖4）のは、もともと他の例に見るやうな齒狀の突起のあったのが、薄く挽き切られた際に薄くなって缺け落ちてしまひ、このやうな痕跡だけを残したものと考へられる。

この玉器も挽き切られた結果、測圖2でもわかるやうに、極めて薄手なものになってゐるが、この薄さは厚味のある原の器を近代の慾張りの所有者が二枚乃至三枚におろしたと考へることを妨げる。このやうに持ち扱ふのも怖い程に薄くしてしまつては、折角の玉器も臺なしだからである。即

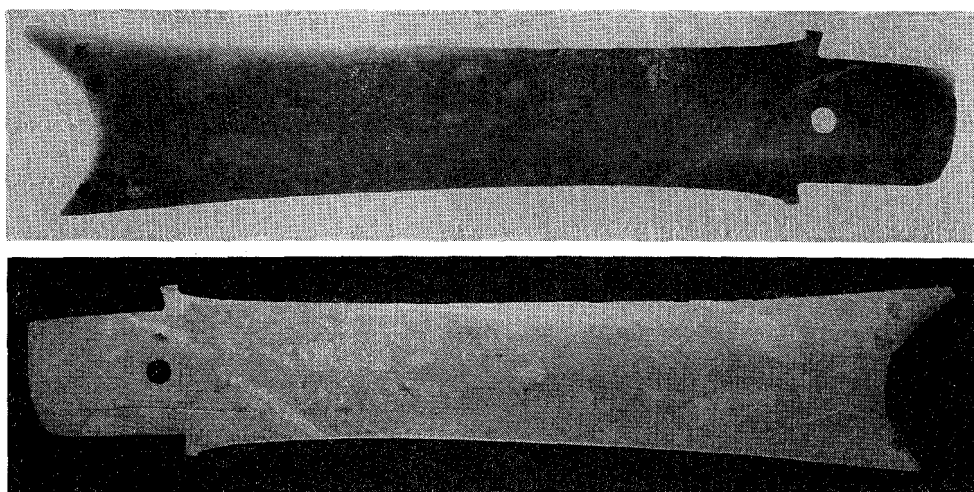


圖3 薄く挽き切られた骨鏃形玉器 二里頭型 長 36.6cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

ちこのやうな細工をしたのは近人ではありえない、といふことである。
 圖版8—10、測圖3—5、圖5に引く白鶴美術館の器も、薄く挽き切った證跡の明らかな顯著な例である。これらはいづれも黑色半透明な玉で、前引圖版4と一括購入されたもので、大體同じあたりの出土と思はれるものである。圖版8の寫眞、測圖3に見るやうに、表面は側飾の所

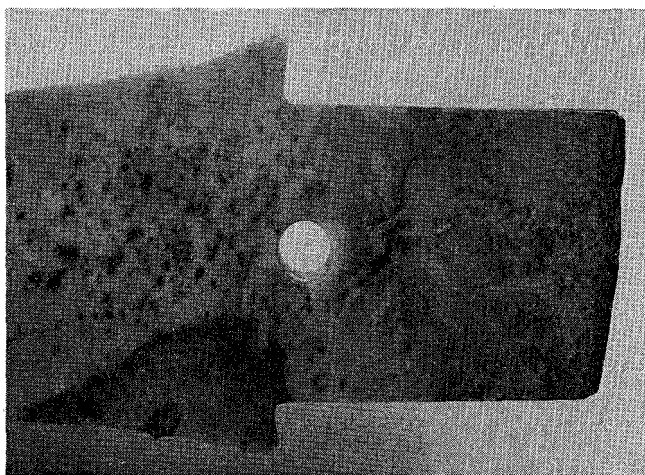


圖4 圖版7細部

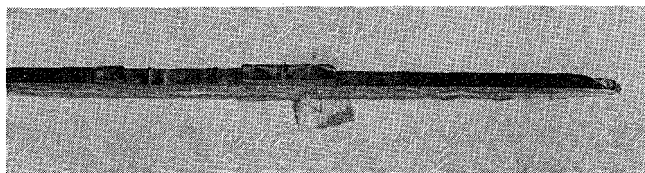


圖5 圖版9細部

が平行線の束を用ゐた幾何學紋で飾られ、全體に磨かれて光澤をもつ。然し裏側は紋様もなく、擦り切ったままで仕上げがなされず、磨ガラス様につや消しのままである。表側は基部から刃まで、長袖沿ひに中窪みに仕上げられてゐるが、裏側は薄く擦り切る際、その面に切する平面をもつて、兩縁から中高に擦り切られてゐる。刃の所は挽き切る際に缺けたと見え、下半が部分的に磨き整へられてゐる。また側飾の突起は他に例をみない形であるが、ここに本來圖版10のやうな齒狀の飾りがあつたのを、挽き切る際に傷めてしまったのでその部分を磨り整へ、このやうなおだやかな曲線で形造られた恰好になしたのはないかと思はれる。この部分の形については後に第七章で再び觸れることになる。同時に購入され、同質の玉で作られてゐる圖版4と同様、この器も表裏ともに黃土中の石灰が沈着し、裏側に特によく残つてゐる。薄く挽き切る作業が土に埋る前に行はれたことを證する好例である。

圖版9は側飾の齒狀の突起が残るが、やはり薄く挽き切られてゐる。即ち、上圖の表側には上部の側飾の齒に刻紋があり、刃は長袖方向にU字形に磨り窪められ、磨かれて中程度に光澤が出されてゐるのに對し、裏側は面が磨ガラス様であり、上下の縁から切り込まれた擦り切りの出合った所の線が長軸方向に残る。この例でも表の中窪みの面に合せて、これと切する平面をもつて擦り切ることが行はれてゐる。この器の側飾は本體との境に小ぶりの、基部との境に大ぶりの逆梯形の突起が出、その中間に二對の低い齒が刻まれるといふ形をとる。梯形の突起の小口は中間を磨り窪ませて低い凹字形の突出部が作り出されてゐる（圖5、測圖4）。この器もまた寫眞に見るやうに、表裏とも黃土中の石灰の沈着があり、特に挽き切られた側の面に顯著に残つてゐる。

圖版10、測圖5はまた側飾の形に相違があるが、これと同式のもののは後述の神本縣發見の遺物に見出される。圖版8、9が一面にもとの器の光澤のある表面を残してゐたのと異なり、この器は兩面とも磨ガラス様のつや消しである。——上の寫眞の刃の上端の小部分に光澤のある、原の器の表面と思はれる面が残るのであるが——。これは原器を三枚におろし

た中間の一枚とみる他ない。この例でも、両面に黄土中の石灰の沈着が認められ、この兩者とも加工されたのがずっと昔、土中に埋る前のことであることが證される。なほ上側の側飾の齒に當るものが下側の側飾に見當らない。この部分は擦り切りの際の不手際によって紙のやうに薄くなつてをり、もとあつた齒狀の突起は缺け落ちたのである。齒と齒の間の線が僅かに残つてゐることによつてさうと知られる。

この例のやうに、三枚におろしたのもあるとなると、前引圖版7の出光美術館のものやうな例が、三枚におろした外側の一枚である可能性が考へられよう。

他に實物は見てゐないのであるが、圖56に示したやうな厚さ一・二・五ミリほどの極く薄手のものがある。これも挽き切られた類ではないかと思はれる。この例では側飾は圖版10に近いが、大きい齒の間に微小な齒が作り出され、丁寧な細工である。

四 石庖丁形玉器の編年

右にとり上げたとき、薄く挽き切つて割符として使はれたと思はれる玉器は、それでは何時頃に作られたもので、何時の時代に挽き切られたものであらうか。この點を明かにするため、問題の型式の器の型式分類と編年を行ふ必要がある。まづ石庖丁形玉器から始める。

(1) 不對稱太短型

圖版1—6のごとく割符として使はれたことが知られる石庖丁形玉器は、いづれも刃を底邊とした、横長の不規則な梯

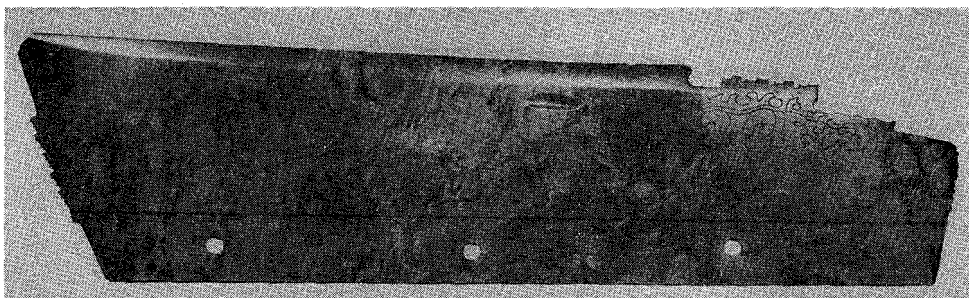


圖6 裝飾の刻まれた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 71.8cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

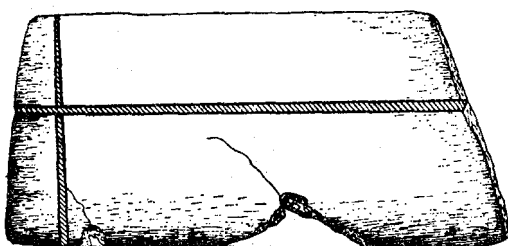
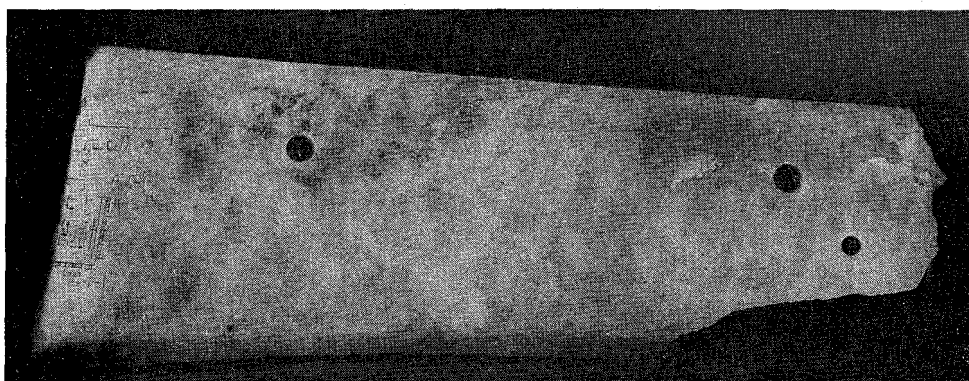


圖8 石庖丁形玉器半製品 不對稱太短型 日照兩城鎮出土 1/4

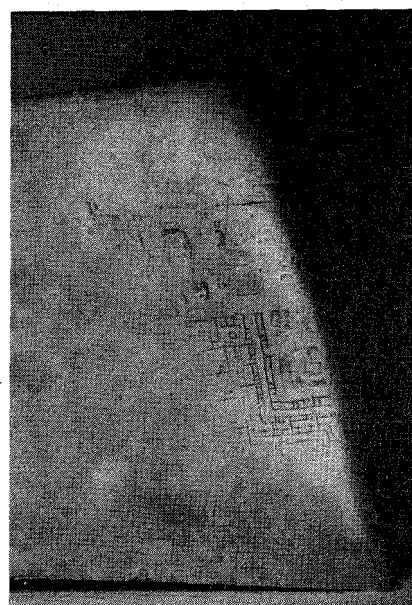


圖7 裝飾の刻まれた石庖丁形玉器 不對稱太短形 長 48.0cm Dr. Arthur M. Sackler Collection



圖9 石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 31.9cm

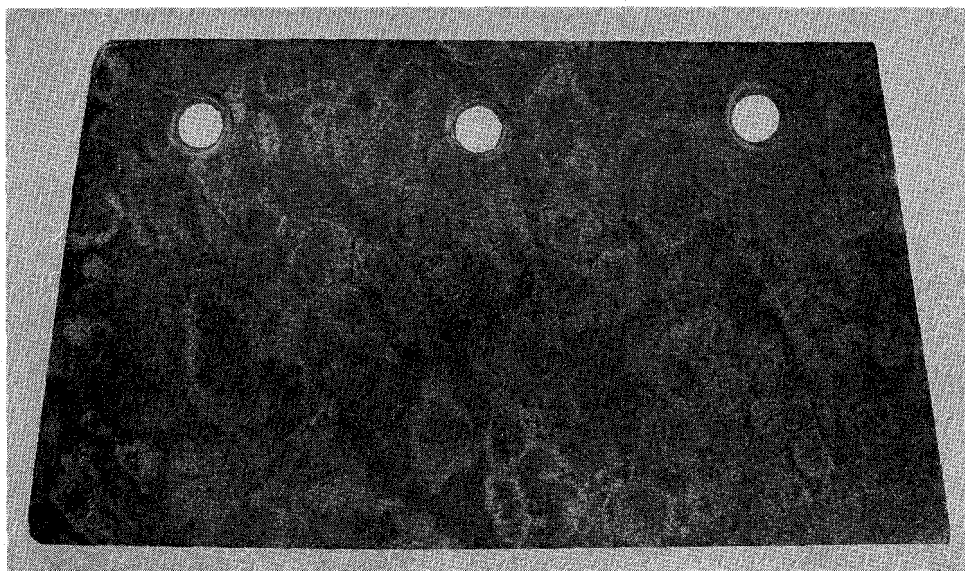


圖10 石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 22.5cm Courtesy of the Freer Gallery of Art,
Smithsonian Institution

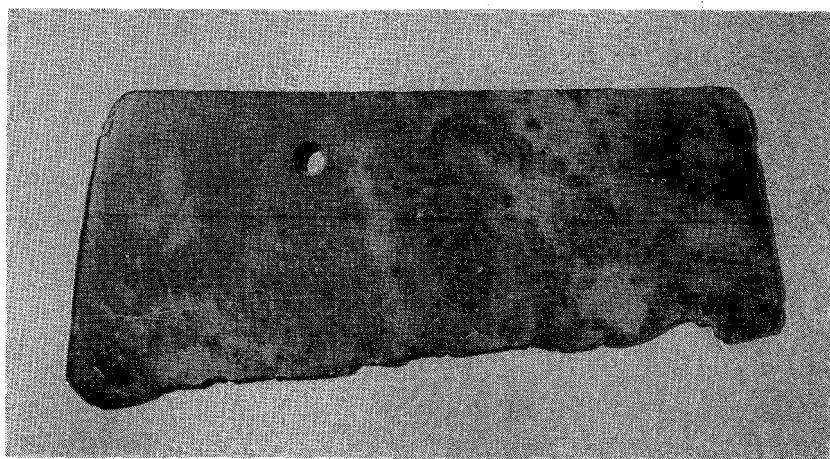


圖11 石庖丁形玉器 不對稱太短型 長約33cm Courtesy of the Trustees of the British Museum

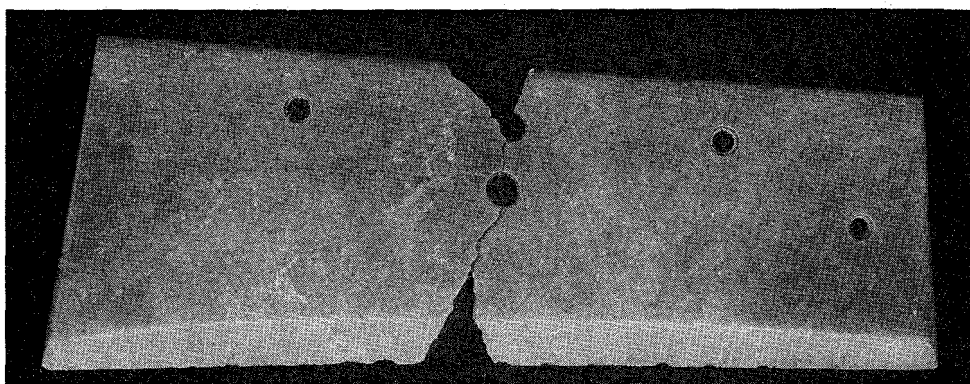


圖12 石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 36.9cm Field Museum of Natural History

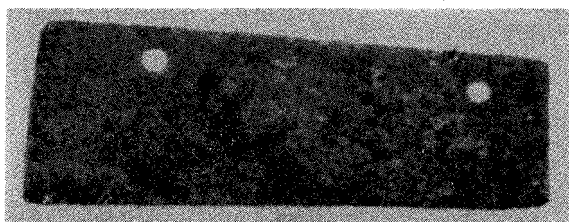


圖13 石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 14cm 陝西神木縣石峁發見

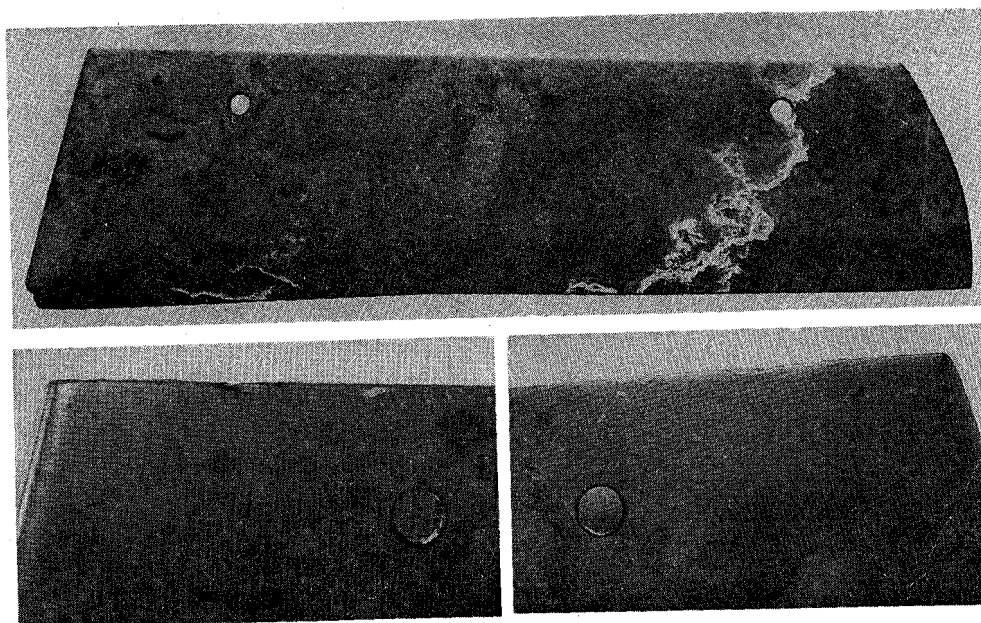


圖14 石庖丁型玉器 不對稱太短型 長 36.2cm 天理參考館

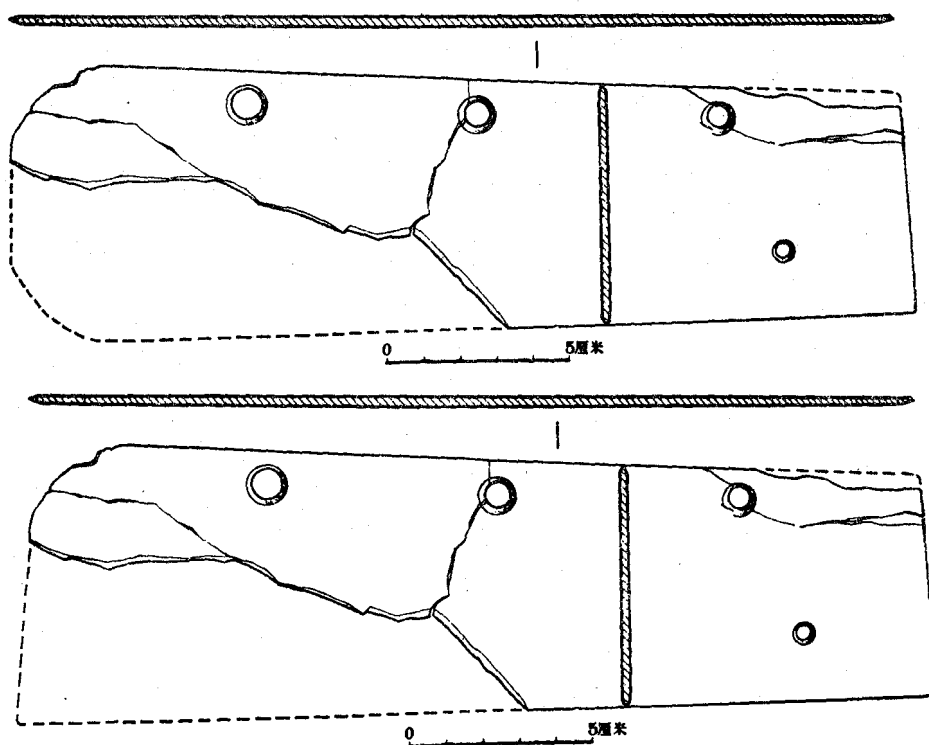


圖15 石庖丁形玉器の石製品 不對稱太短型 長 48.7cm 山東日照兩城鎮出土
上 報告書の復原 下 筆者の復原

形をなし、刃は少し内反りで峰は直線、兩側の二つの邊は幅の狭くなった方が反對側よりも刃に對して大きな角度を持つ、といふ特徴を有する。このやうな特徴をもった類で、年代のはっきり知られるのは圖6、8の典型龍山文化のものである。圖6はその刻紋により、圖8はその出土遺蹟によつてさう判定されるのである。即ち圖6は表裏同紋で、短かい方の側邊に凸線で側視形の人頭、刃ともう一方の側邊に刻線で側視形の人頭と同じく側視形の四足獸をつけるが、以前に記したやうに、これらの表現はいづれも典型龍山文化に屬する特徴をもつ。また圖6の前記裝飾部分の縁に刻まれた齒狀の裝飾もその内側の人頭及び四足獸としつくりと調和してをり、これらは同時に作られたとみて差支へないと思はれる。然し、裝飾は典型龍山文化のものとしても、この石庖丁形玉器そのものもそれと同一時期のものかどうかは別問題である。兩側邊の部分は石庖丁形玉器を作るのと同時にここに飾られたと考へても支障はないが、刃の齒狀の裝飾は、この石庖丁形玉器がいくら實用を離れた儀式的、象徴的なものとしても、刃の部分に刻まれてゐる點問題である。始めに石庖丁形玉器が作られ、後にこれがつけ加へられたとした方が理解し易い。この點については後にまたたちかへて論ずることになるので、今はこの指摘に留めておく。

圖7は側邊に目立たない駟飾をつけ、そこに圖6と近い、植物の卷鬚狀の冠羽のついた人面が刻まれてゐる（背沿ひの二つの孔の間にも人面形があるが寫眞では見えない）。この人面の部分の寫眞のみが先にドーレンヴェンド氏によつて發表されてゐる。この人面は頭の上から後に向つて出る卷鬚狀の冠羽が直線的である點、圖6のものと小異がある。圖7下圖、即ち上圖の裏側の紋様の部分圖の左下の部分に並んで四つの小さい突出物が刻まれてゐるが、その先端の形は先に筆者が良渚文化のものとしたフリア美術館藏の玉製腕環の兩眼つきの記號の翼狀の部分の先や同文化の逆梯形器の側邊にみる内反りの曲線^⑤を思ひ起させるものである。この文様が良渚文化と親しい文化の所産であることを思はせるものである。これについてはまた後に觸れることになる。

さて、この器は幅の狭くなった方が缺けてゐるが、缺けた側に中心軸上の孔が残り、ここが端に近い所であることが知られる。即ち、その孔の左上の孔は背に沿って二つ穿けられた孔の一つで、後にも見るやうにこの時期の背の側の孔は左右對稱に穿けられるのが通例である所から、缺失した部分は四・五センチであることが知られる。右端にも左と同様な刻紋があったと見え、卷鬚狀冠羽の端が残つてゐる。以上の觀察に基づいてこの石庖丁形玉器を想像復原すると、やや短かめであるが、圖6の器とよく似たものであったことが明らかになる。ここに刻まれた紋様は圖6と異なり、器が作られて後に別人によって刻まれたと考へるべき點は見出し難い。この紋様から推測される典型龍山文化乃至良渚文化の時期にこのやうな型式の石庖丁形玉器の作られたことを證するものとして貴重な資料である。

圖8の方は日照兩城鎮で出土した玉版で、一番長い邊が二六センチ、厚さ二・五ミリあるが、刃や孔はない。ほぼ梯形をなし、側邊の最長邊に對する角度の違ひ方は石庖丁形玉器に近似する。その半製品と見られよう。土地の住民の採集品であるが、この地から薄い玉器の半製品が固まって發見されたことがあるといふから、龍山文化のものとみて差支へなささうである。^⑩この器は圖6とは大分違ひ、長さに比して幅が廣い。

公私蒐集品中に圖6—8と近似したものを探してみるに、圖6に比すべきものは今のところ見出せない。それに對し、圖8と近いものとしては例へば圖9のごときものがある。上邊に近く三孔、横方向の中軸線上に第四の孔がある。左右の短邊にも刃がつけられてゐる。圖8を仕上げたら大體このやうなものになると考へられる。圖10のやうなものも圖9に近い形をもつ。刃が大體眞直である所、圖9に近い。横方向の中軸線上の孔を缺く。

これよりも少し横長の比率をもつものに圖11のごときものがある。ブリティッシュ・ミュージアムの藏品で、刃の所で長さ三二・五センチ、圖9よりもやや長手の比率をもつ。左右兩邊に兩面からの擦り切りの溝の喰ひ違ひの痕を残す點、技術的に原始的である。一孔である點異例であるが、これも大體同じ時期のものであらうか。^⑪

圖11よりもまた少々横長の比率をもったものに圖12のやうなものがある。長さ三六・九センチ、左右兩邊にも刃と同じ面がとられ、峰の厚さ四ミリ、刃の斜面に移行する所で厚さ六ミリある。峰沿ひに三孔、また短邊寄り、長軸線上に一孔がある點、後に引く長手のものと共通する方式であるが、中央邊にもう一つの孔がある點異例である。

圖13は陝西省北部、神木縣石峁發見のものである。後に第六章(2)節で引くやうに同地發見の玉器は出土遺蹟からは時期が決められない。この器は峰の厚さ一・五ミリと極めて薄手である。長さ一四センチと小ぶりであり、峰に沿って二孔があるだけであるが、長さとの比率は圖12に近い。

以上圖7—13は6と比べて上下の幅が廣い以外に、また左右の邊が刃の線に對して大きな角度を持つてゐる點にも特徴が認められる。

圖6ほどではないが、これらよりもやや長手のものに圖14、測圖6のやうな例がある。灰オリーブ色の基調に薄墨色の紋理の入った玉で長さ三六・二センチ。片刃で兩短邊も刃と同じ面で圓味をつけてゐる。それに對し、裏側は眞平らで、どの邊も面はとつてない。刃の斜面のある面は磨かれて光澤を有するが、裏側は磨ガラス様といふよりは磨かれてゐるが、表ほど光澤がない。前引圖12もかなり薄手であるが、この玉器も峰で厚さ約三ミリ、刃の斜面に移行する手前で約五ミリである。この器は第二章に引いたもののやうに、二枚に挽き切った面にその痕跡を明らかに残した類とは異なり、刃裏の側も眞平らで一應磨きがかけてゐる。然し始めからこのやうな片刃に作つたものと見るには問題がある。第一は表裏の磨きの程度に差があることである。第二は峰の稜角をみるに、表側は圓味をもつに對し、刃裏の側はカッチと角張つてゐることである。始めから片刃の石庖丁を作つたのであれば、このやうなことはあり得ないと思はれる。また二枚におろした形をとつた一對を作つた、その片割れといふことも一應考へられるが、さふ考へると表裏の磨きに差があることが説明し難い。前述のやうに圖版1はその例であるが、二枚とも表裏の光澤に差がない。かう考へると、やはりこれは一枚

の兩刃の石庖丁形玉器を二枚におろした片割れとみるべきであらう。その作業は圖版2—4などと異なり、特に丁寧に行はれたものと考へられる。なほそのやうな作業が近代に行はれたのではないことは、片方の孔の口の周圍が表裏とも鐵銹色に變質してゐる（圖14下）ことからうかがはれる。

石庖丁形玉器の中には次に引くやうに、もっと長手のものが多いのであるが、大體右に引いた位のものまでが龍山文化に屬すると考へられる。それは次の理由による。圖15は日照兩城鎮で發見され、典型龍山文化の獸面紋を線刻した片刃石斧と一緒に紹介された玉器である。この報告ではこれを玉鏹と考へて缺けた部分をそのやうな形に點線で想像復原してゐるが、長い一邊沿ひに穿たれた三つの孔は、今問題の石庖丁形玉器のものと見るにふさはしい位置にある。また一方の短邊と、もう一方の一部が残るだけの短邊も、この型式の玉器にふさはしい傾斜をもつてゐる。一つ離れて穿たれた小孔の位置が長軸方向の中心線上にない點異例であるが、この時期には未だ定式が確立されてゐなかつたことは、先に引いた僅かな例からもうかがはれる（圖11、12）。この例は出土地からみて龍山文化の遺物とみて差支へないと考へられ、またこの方が少し短かめのプロポーションであるが圖6の典型龍山式の刻紋のものと近い形をもつてゐることも出土地の證を裏づけるものとみられる。もし筆者の右の復原に誤りないとする、この程度の横長のものも龍山文化の頃に作られたといふことになるのである。

(2) 不對稱太短型の原型の石庖丁

前節に引いた龍山文化の石庖丁形玉器及びそれと型式が近似する玉器の原型となつた實用の石庖丁はあるであらうか。中國の石庖丁についての論文としては一九五五年の安志敏のものが¹⁹あり、一九六八年の石毛氏の「日本稻作の系譜——稻の收穫法——」²⁰にも中國の石庖丁の資料が拾はれてゐる。然しこれらは發表された時期における中國考古學の水準に規制

され、ここに問題のごとき特定型式の石庖丁の地域的、及び時代的歸屬を検索する上には參考としての使用にたえない。そこで新たに既刊の出版物中から中國の石庖丁の資料を拾ひ、今日までの研究の成果を利用して伴出物の時代を判定する作業を行った。地域別、時代別に分類した中國の石庖丁全般にわたる資料はそれだけでかなり興味深いものであるが、紙面の都合もあり、それはここに提示することができない。ここには關係のもののみを引用するに留める。一々斷はらないが、ここに引く以外の時期、地域のものは現在のところ知られないのである。

さて、圖6、7の典型龍山文化、良渚文化に屬する石庖丁に似たものといふと、河南省の最東南部、江蘇徐州に近い永城造律臺から圖17、(1)(2)のやうなものが出てゐる。河南龍山文化の遺物が伴出してゐる。蚌製であるが、横長で一方に向つて幅を減ずる點、また峰に近い所に孔があげられてゐる點、圖6、7に近い。鄭州洛達廟からは圖17、(3)のやうな横長の石庖丁が出てゐる。二里頭期より若干早い時期のものである。中央、上下縁から等距離のあたりにただ一つの孔を持つ點、圖6、7のごときものの原型とは認め難い。孔はいふまでもなく、石庖丁を保持して使用する上に必要な仕掛を施すためのもので、その位置や數は石庖丁を使用する方式に關係し、それは地域、時代によって異なる傳統に對應するからである²¹。河南省では後にも引くが圖29のごとき横に長い例が偃師二里頭から發見されてゐる。然し幅が全長にわたつて一定で、左右の短邊の刃の線に對する角度も殆んど同一である點、今問題の圖6、7とは大きな違ひがある。

山東省では圖21(1)―(10)のごときものが龍山文化頃に知られ、横長で二―三孔が峰に近い所にある點、圖6の玉器に近い。また破片である點が残念であるが、同圖(2)、(4)、(9)、(10)など、側邊の刃に對する角度が圖6に近似し、その内には(4)、(8)、(9)のごとく側邊に面をとつて刃のやうに作つたものもある點、圖6の玉器の原型にふさはしいやうに思はれる。然しこれらは完形のものでみると、(1)、(6)のごとく幅が左右で一定であり、幅が一方で狭くなつてゐる(3)、(8)のやうなものでも、短邊の刃に對する角度が九〇度乃至それよりも大である點に相違がある。

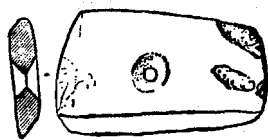


圖16, (1) 石庖丁 二里頭期 山西翼城感軍
出土 3/10

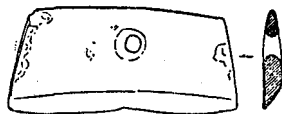


圖16, (2) 石庖丁 東下馮類型 山西夏縣東下馮
出土 2/5

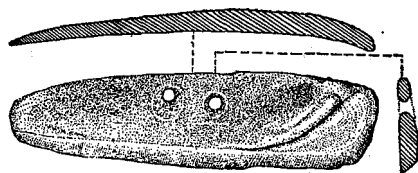


圖17, (1) 石庖丁形蚌製品 河南龍山期 河南
永城造律臺出土 2/3

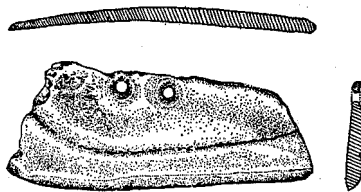


圖17, (2) 同

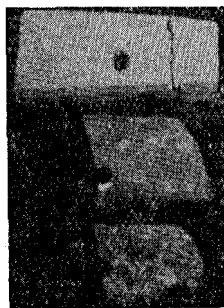


圖17, (3) 石庖丁 洛達廟
期 河南鄭州洛達廟
出土 上 長 10.5
cm



圖17, (4) 同 長 19.5cm

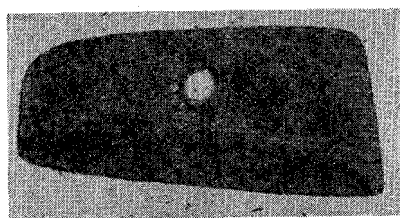


圖17, (5) 石庖丁 河南龍山期 河南滎陽河王
出土 長 9.7cm

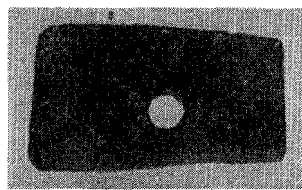


圖17, (6) 石庖丁 河南龍山期 河南偃師灰嘴
出土



圖17, (7) 石庖丁 龍山~洛達廟期 河南鄭州上
街出土 長 9.2cm

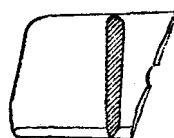


圖17, (8) 石庖丁 龍山晚期 河南湯陰白營出土
7/30

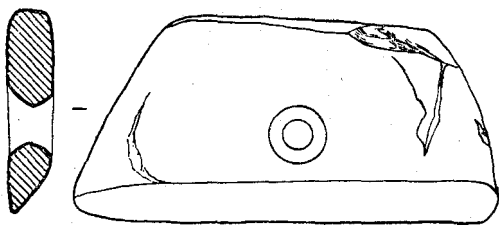


圖18, (1) 石庖丁 二里頭期 河南堰師二里頭出土 4/7

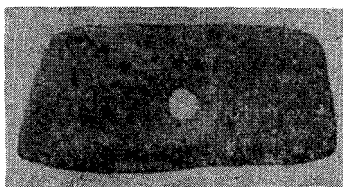


圖18, (2) 石庖丁 二里頭期 河南堰師二里頭出土

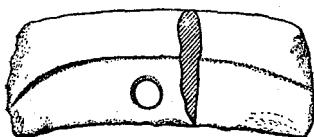


圖19, (1) 石庖丁形蚌製品 殷中期 鄭州南關外出土 2/5



圖19, (2) 石庖丁 殷中期 河南陝縣七里鋪出土 1/2



圖19, (3) 同 1/2



圖19, (4) 同 1/4



圖19, (5) 同 1/4

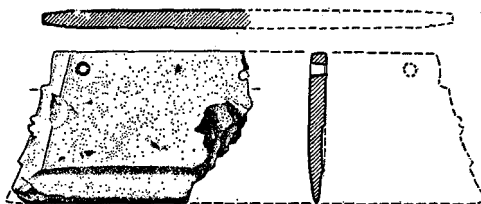


圖20, (1) 石庖丁 殷後期 河南安陽出土 殘長約 15cm



圖20, (2) 石庖丁 殷後期 河南新鄉潞王墳出土 長 11.7cm

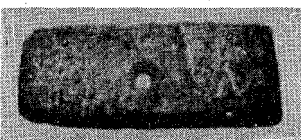


圖20, (3) 同 長 10.7cm

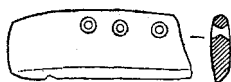


圖21, (1) 石庖丁 龍山期 山東日照東海峪出土 1/4

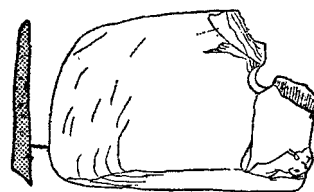


圖21, (2) 石庖丁 龍山期 山東日照兩城鎮出土 2/5



圖21, (3) 石庖丁 龍山期 山東日照兩城鎮出土 1/4

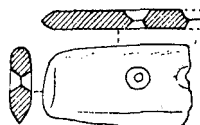


圖21, (4) 同



圖21, (5) 石庖丁 典型龍山期 山東諸城呈子出土 1/4

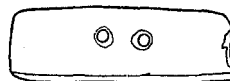


圖21, (6) 同

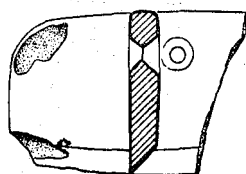


圖21, (7) 石庖丁 典型龍山期 山東曲阜東魏莊出土 7/20



圖21, (8) 石庖丁 典型龍山期 山東曲阜韓家鋪出土 長約16cm

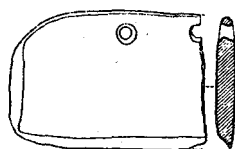


圖21, (9) 石庖丁 龍山期 山東泗水寺臺出土 1/3



圖21, (10) 石庖丁 龍山~殷中期 山東泗水尹家城出土 1/4



圖21, (1) 石庖丁 龍山期 山東日照東海峪出土
1/4

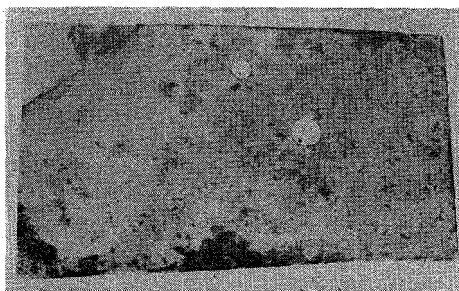


圖21, (2) 石庖丁 龍山期 山東五蓮丹土村出土 1/2

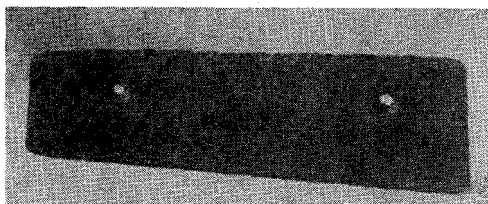


圖22, (1) 石庖丁 良渚文化 江蘇吳縣光福太湖出土

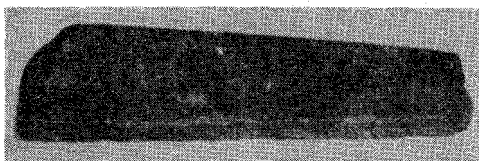


圖22, (2) 石庖丁 良渚文化 浙江吳興錢山漾出土

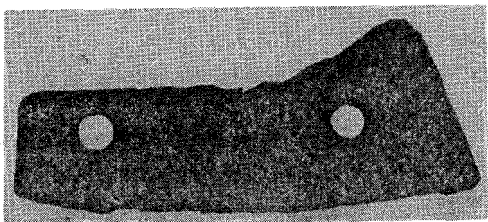


圖22, (3) 石庖丁 良渚文化 浙江杭州水田畝出土



圖22, (4) 石庖丁 良渚文化 浙江杭州老和山出土 約1/3

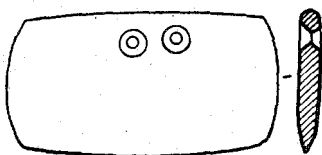


圖22, (5) 石庖丁 龍山早期 江蘇安邱峒峪出土 1/3

江蘇省をみると、ここには圖6、7と同じ型式の石器が見出される。圖22(1)、(2)がそれである。(1)は吳縣光福太湖出土で大型石刀と記される。寸法の記述はない。良渚文化のものである。長い方の側邊の刃に對する角度が短邊のものより大である點圖6と違ふが、幅が左右で異なり、峰に近い所に孔がある點、及び長さと幅の比率において圖6とよく似てゐる。圖22(2)は吳興錢

山濠の發見で龍山系と報告されてゐる。良渚文化頃と見て差支へなからう。これも寸法が不明であるが、形は(1)とよく似てゐる。孔の有無、位置は寫眞が悪いため知ることができない。この方は長い方の側邊、短かい方の側邊とも刃に對する角度が圖6、7と大體合致してゐる。かういった大型品が日用品であるのか、或ひは儀式的用法をもったもので實用品を大型化したもの、乃至はさういふ性格の玉器を石で模したものであるのかは、實物を見ないことには判定できない。他に圖22(3)は杭州水田畝下層の出土で良渚文化のものであるが、これも同類と見られようか。然し刃が外反り氣味である點に大きな違ひがある。圖17(2)に引いた永城造律臺の蚌製品に近い形である。

以上、現在手にしうる資料によつて考察すると、圖6、7の石庖丁形玉器に對應する石器が江蘇省南部、良渚文化の中に發見されたのである。先に圖7の玉器についてそこに刻された圖柄が良渚文化に見るのと近い特徴をもった曲線で構成され、それが器の製作と同時に加へられたものであるらしいことに注目した。この良渚の石庖丁形大型器の存在は右の觀察とよく對應してゐる。また圖6の玉器に彫られた圖柄が、先に考察した通り、山東の典型龍山文化に屬することに誤りないとする、この圖柄は江蘇省の良渚文化の石器に由來する玉器——この玉器も當然この文化に屬する——に彫られたといふことになる。先にこの玉器について述べた時、この紋様は、石庖丁形玉器があつてそれから細工されたのではないかと考へた。ここに明らかになつた圖6の玉器の製作地や彫刻の歸屬する文化との齟齬は、先の觀察とうまく合致することになるのである。

次に圖8及び長さに比して幅が廣い點でこれと共通性をもつ圖9—14の一連の玉器についてである。圖8は山東の日照で作られたものであることはほぼ疑ひないにもかかはらず、この式の短かめで幅廣い石庖丁の實用品は山東では今の所知られない。圖21(11)は日照東海峪の上層、即ち龍山文化に屬するもので、上下の幅が廣い點は似てゐるが、左右の側邊が刃に對して傾斜しない點、別物といふ感じである。同じ特徴をもつた石庖丁は江蘇省北部、安邱峒胡峪からも發見されてゐる。

る(圖22(5))。龍山早期と記されてゐる。

圖21(12)は山東の五蓮丹土村の出土品である。時代は「新石器時代」と記されるが伴出物等の記述はない。一孔乃至二孔の石鏟と共に掲載され、それらと同じ石理があつて同時の作と思はれるが、割れ方からかなり薄く殺いだもののごとくで、實用品ではなく圖8のやうな薄手の玉製品を石で模したものと見られ、やはり龍山文化頃のものと考えて差支えなからう。この石製の玉器模造品は幅が廣く、側邊の一方が刃に對してほぼ直角、反對の側邊が直角より僅かに小さい角度をなす點、また峰に近い所の他、横方向の中軸線上、一方に偏つて一孔がある點、圖9と近い。このやうなものが山東のこの石製品の原型になつたものと考へられる。

圖8の半製品、或ひは圖9—14のやうに、一方の側邊の傾斜が他方より目立って著るしい石庖丁は、圖22(4)の杭州老和山出土の良渚文化の遺物に見出される。刃の部分がひどく傷んでゐるが、その部分の長さは約一九センチあり、これも同圖(1)(2)と同様、普通の石庖丁に比べて大型である。これも(1)(2)についてと同様、日用品であるのか、それを模した儀仗用の品、或ひはそのやうな性質の玉器を石で模したものなのか、判定することができない。

以上、ここに古い段階に屬すると認めた圖6—15のごとき石庖丁形玉器に對應する形をもつた大型の石器が揃つて良渚文化の中に見出されたことは興味深い。このことは次の事實を顧慮した時に、更に興味深いであらう。即ち、山東に屬するのは、良渚文化出來の玉器に後から加へられた附加的な裝飾であること、及び良渚文化に屬する石器を、薄く殺いだ玉材で模したものと、その石製模造品であることである。

ここで奇妙な事實に氣附く。即ち、山東にも、江蘇、浙江にも實用の石庖丁は多く使はれてゐるのに、そこに屬する玉製品や大型石製品はそれらとは別の型式のものであることである。そしてまた圖6—15のごとき古い型式をもつた石庖丁形玉器の特徴の總てを兼ね具へてはゐないが、その特徴の顯著なものを具へた日用品としての石庖丁は、今日までに公表

されてゐる資料でみる限り、右とは違って山西、河南に見出されることも奇妙な事實である。この後者の材料を次に示しておく。なほ右に指摘した事實を解釋するためには、現在の資料の状況ではあまりにも多くの想像を混へる必要がある。それについてはまた將來好適な資料が出て來た時に改めて論ずることにした。

圖16(1)は山西翼城感軍出土で二里頭期平行のものである。幅が一方に向つて狭くなり、狭い方の邊が刃に對して直角に近く、廣い方の邊が刃に對して直角より小さな角をなす點、圖8—12に近いが、孔がほぼ中央にあり、一個である點に大きな違ひがある。

圖17(5)―(8)は河南龍山文化、龍山文化晩期頃のもの、(5)の滎陽河王出土のものは孔の位置も含めて、問題の玉器の特徴を大體に具へており、これを細長く引伸し、或ひは上下の幅を廣くして孔の數を増せば問題の玉器の形が出來上る、と言へよう。然し刃が外反りである點に重大な相違がある。同圖(6)(7)も外の輪廓の點では(5)と大體合致してゐるが、孔の位置が刃に近い方に寄つてゐる點に大きな違ひがある。(8)もこれらと同様な石庖丁の破片とみられよう。

圖18(1)は偃師二里頭の出土品で二里頭期に屬するが、その中の何期かはわからない。これは圖17(5)と近く、龍山期に使はれたのと同じ形のものがこの期にも使はれ續けたことが知られる。この器も孔の位置が刃に寄つた所にある點、やはり問題の玉器と相違がある。

右に示した山西、河南の文化中心地域の例は、左右で上下の幅が異なつてをり、短かい側邊が刃に對して直角に近い角度、長い側邊が直角よりも小さい角度を持つてゐる點、前引の古い型式の石庖丁形玉器に最も特徴的である點において共通性を持つてをり、一應これを左右に、或ひは上下に引伸せば問題の玉器の形が生れると言ふことができるのである。然しこれも孔の位置が刃に寄つた所にあること、及びただ一孔しかないことに於てその原型たるの資格を失つてしまふ。何故かといへば、日用の石庖丁の中には二孔をもつ型式のものが別に作られてをり、河南省の龍山文化にも見出されるの

であるが、一孔と二孔乃至二個以上の孔を持ったものとは、これを保持するための装置、従つてその使用法に相違があったことを示し、一孔を二孔乃至それ以上の数の孔にしたら問題の玉器が生れる、と簡単に言ふことが許されないからである。

(3) 不對稱細長型

石庖丁形玉器で多いのは圖9や14のやうな形を更に横長にした形のものである。石庖丁が片手で持ち扱ふに適した小型の石器である以上、圖9、14のごときものよりも、原型から更に遠ざかったものは、一應型式學的にそれよりも時期の降るものと見るのが妥當である。

峰に沿つてあけられた孔の数は二個、四個と色々である。これらの孔が實用の石庖丁と同様、保持するための紐或ひはその他の補助的な仕掛をとりつけたために實際に使はれたものか、或ひは實用を離れて體裁を整へるために穿けられたものかは、必ずしも總ての例について決めることができない。然し後述のやうに、峰の側にかぶせる革のやうなものを綴ちつけるために使はれたと推測されるものもあり、實用的な意味をもったものがあることは事實である。長短にかかはらず、圖8、11のやうな短かめの類にあつたやうな、長軸方向の中心線上に穿けられた孔は、あるものもないものもある。

次にその例を引く。他の型式の玉器にも認められることであるが、原の玉材の形による制約、或ひは缺けた部分の磨りなほし等によつて、イレギュラーな形をもつものも少なくない。この型式の器は例數に乏しくないので、ここにはその類は成るべく避け、典型的な形をもつたものを選んで示す。

圖23は圖14のごときものを更に横に長くした形をもつ例。刃は殆んど内反りになつてゐないが、峰は眞直、短かい側邊

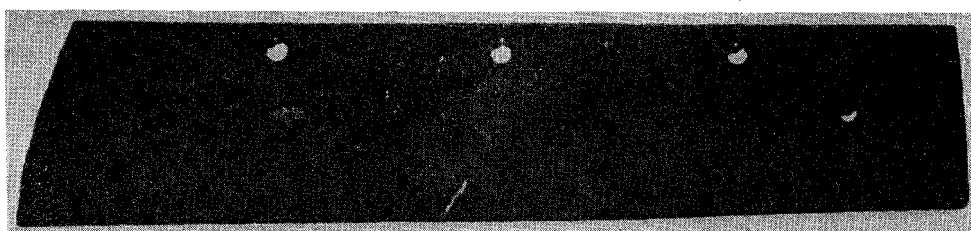


圖23 石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 43.2cm

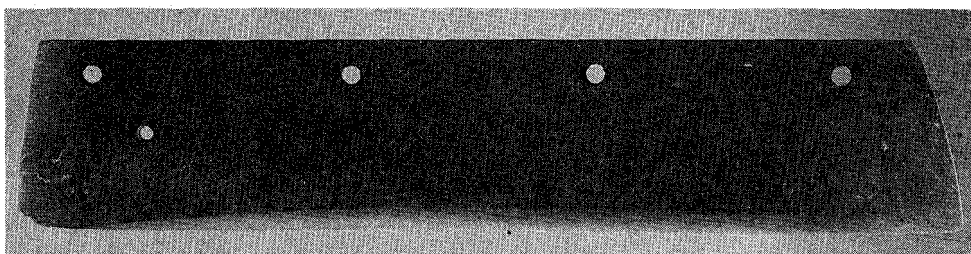


圖24 石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 38.7cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop



圖25 石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 30.8cm

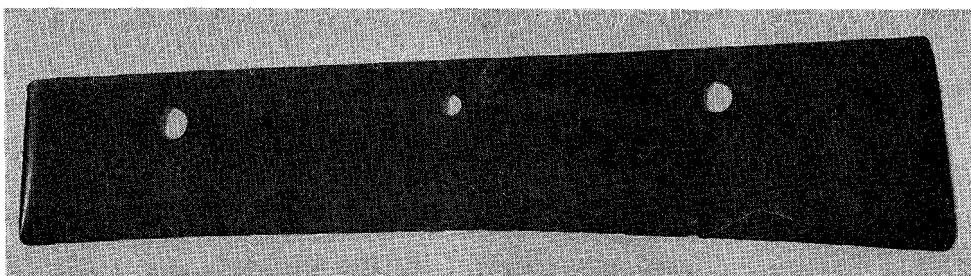


圖26 石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 43cm Fitzwilliam Museum

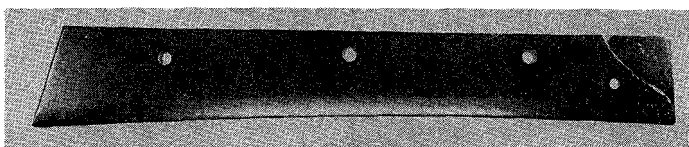


圖27 石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 51.4cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

は刃に對して直角に近い角度、反對の邊はそれよりも小さい角度をなす、といった特徴はそのまま保持されてゐる。圖24はこれよりも更に横長の度合ひが大となったもの。峰沿ひの孔は四個あけられてゐる。圖25は24よりももっと細身で、左右で上下の幅の差が大きめの類。峰沿ひの孔は二個である。圖26は大體似た比率をもつが、孔のあけ方が異なつてゐる。即ち横方向の中心線上の孔はなく、峰沿ひに三孔があつて中央の孔は小さい。圖27は幅に比して長さがもっと長いもの。峰沿ひの孔は三個である。この程度の比率をもつたものには他に峰沿ひに四孔のあるもの、峰沿ひに五孔があつて中央の三孔が兩端のものよりやや大きいものなどもある。

以上圖23—27に引いたものは前節に引いた類よりは幅に比して長さの長くなつた型式で、中には圖27のごとくかなり極端に細長いものもある。然しいづれも峰は眞直、刃は若干内反りで、上下の幅に左右で差があり、側邊の刃に對する角度に左右で違ひがあるなど、前節の類の特徴を存したものである。孔のあけ方にはここに引いたごとく變化があり、長さと幅の比率と孔の數やあけ方に特に關係は認められない。

この型式の器の年代であるが、前節の型式のものが大體良渚文化、典型龍山文化に對應し、次節のものは後述のやうに二里頭期——その中のどの期かまでは決められない——といふことが知られる。さうするとこの不對稱細長型は大凡その中間の時期以外にその入る場所がないことになる。

(4) 近似對稱細長型

(1)、(3)節に引いた類は、いづれも一見してわかる程度に左右で上下の幅が違ひ、側邊の刃に對する角度に相違があつて刃は内反りになつてゐるのであるが、ここに分類した類は一見左右對稱な形をもつた細長い梯形とみえる形に仕上げられてをり、この點に前二者と明瞭な區別が認められる。然しこの類も仔細にみると左右の側邊の刃に對する角度に僅かな違

ひがあり、刃も心持ち内反りになってゐて、前二者の傳統を辛うじて残してゐると言へるのである。

圖版11に引いたのは優師二里頭遺蹟の附近から他の玉器類と共に偶然發見されたもので、長さ六五・二センチもある大型品である。この器は右に記した特徴を具へた例である。科學的發掘でないのが残念であるが、出土地からみて大まかに二里頭期のものであることについてはほぼ疑ひなさうである。兩端近くを三本の平行線の束で劃した斜格子紋で飾る。また側邊に齒紋を切り出してゐる點も珍らしい。

圖版13はサックラー・コレクションに屬するものである。實物を見る機會は未だえないが、長さ七三・七センチで圖版11と近い形をもち、平行線の裝飾を加へる所もよく似てゐる。刃の線は左寄りが僅かに内反りになり、右端に近い所は少し外反りとなつてゐる。刃と側邊が一段低く磨られてゐる所に違ひがある。この器の側邊には圖版11のものとは違つた型式の齒が刻まれてゐる。この齒は次のやうに規定されよう。即ち、まづ圓弧狀の凹みを三つ作り、その夫々に一對の斜めの切り込みを作り、それによつて切り残された逆梯形の外側の邊に、上側に片寄せて淺い窪みを作つたもの、である。このやうな齒は今の所他に知られない。然し、これの構成部分である逆梯形の形が後引の骨鏟形玉器にみるもの、即ち外側の邊を磨り窪めた梯形の側飾、例へば圖59と近いことが注意される。この形の側飾は後述のやうに二里頭期に特徴的なものである。この圖版13の玉器にみる形は典型的なものではないが、この側飾の暗示する時期が圖版11の器の出土地から推測される時期と合致してゐることに注意しておく必要がある。

齒紋はないが、ここに見るのと同じ三本の平行線の束で構成された斜格子紋を飾る石庖丁形玉器はブリティッシュ・ミュージアムとフリア美術館にある。前者（圖28）は近似對稱形であるがずっと短かい。表裏ほぼ同紋で、表裏とも四周が一段と低く磨られてゐる。孔が小ぶりで周縁に近い所に穿けられてゐる所も圖版11と違つてゐる。フリア美術館の例は紋様は一面だけである。²⁸この例も表裏とも側縁と刃の線に沿つて一段と薄く磨られてゐる。この例では裏に玉材を挽き切つ



圖28 石庖丁形玉器 近似對稱細長型 長約36.5cm Courtesy of the Trustees of the British Museum

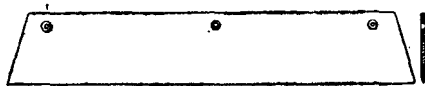
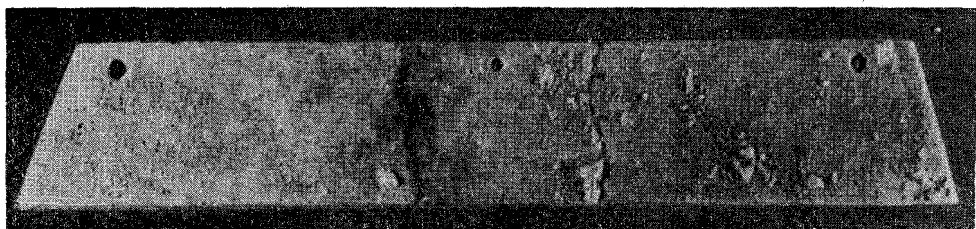


圖29 石庖丁形玉器 近似對稱細長型 偃師二里頭出土 長 52.3cm 下圖 1/10



圖30 石庖丁形玉器 近似對稱細長型 長 42.2cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

た際の切り口の喰ひ違ひの段が残る。

なほ玉製ではないが、圖20(1)のやうな石製品が殷虚から發見されてゐる。側邊に齒を持つ點、圖版11と近く、また側邊と刃のある邊を薄く磨つてゐる點、前引のフリーア美術館の例と共通してゐる。ただ惜しいことにこの遺物の出土層位、伴出物等の記録は發表されてゐない。

圖29は圖28のやうに小ぶりの孔が峰に近接して穿けられた類であるが素紋である。灰褐で石に近い質、と記される。偃師二里頭の宮殿遺蹟の東約五〇〇メートルのところで他

の玉器と共に發見された。これも偶然的の發見であるが、同出の玉戈²⁷の型式をみると、青銅戈の型式との比較から二里頭期のものと判斷される。この石庖丁形玉器も大體同じ時期とみて差支へなからう。この器も一見横長の梯形と見えるが、上下の幅は一方が九・六、一方が一〇・〇センチと僅かに違ひ、側邊の刃に對する角度にも若干の違ひがあつて、刃も心持ち内反りである。簡素な作りであるが、型式の上では圖版13と同類とみてよい。

圖版13、圖29と同じ特徴をもった石庖丁形玉器は舊來のコレクションの中にも見出される。例へば圖30のごときはそれである。この器も刃は左寄りの部分ではんの心持ち内反りになつてゐる。この器には横方向の中心線上の孔がある。

この節に引いた近似對稱細長型の例數は、現在知られる資料では前節の不對稱細長型と比べて少ない。然し大體二里頭文化に屬することが知られることは貴重である。この型式は、左右における上下の幅の差がないか、または注意して見ないとわからない位に僅少であり、兩側邊の刃に對する角度の差も目立たず、刃の内反りの程度もほんの心持ち程度であるのは、不對稱細長型の癖のある特徴が時代の變化乃至は異なつた好尚をもつた製作者の出現によつて磨滅乃至は稀釋されたものと解される。この點から型式學的に後れるとみるのが大方の考古學者の判斷と思はれる。

このやうな型式學の方からする判斷には傍證を引くことができる。それは日用品である石庖丁の型式變化の趨勢である。第(2)節で不對稱太短型の原型を考察した際、石庖丁で孔の位置は問題の玉器と相違するが、これと輪廓の特徴の類似するものが山西、河南にあることを引いた。その形のもののは前引のやうに龍山文化から二里頭文化まで見出されるのである。

この形はその後には續かない。一方、それと近いが、刃の上下の幅が左右で變らない類が二里頭文化から出てくる。圖16(2)がそれである。山西夏縣東下馮の出土で、東下馮類型、即ち河南の二里頭文化に對應する時期のものである。偃師二里頭出土の圖18(2)も同じ特徴をもつ。これも第何期かは不明であるが、二里頭期のものである。圖19(1)は鄭州南關外の中層に屬する例であるが、大體二里岡下層(殷中期)かそれより少し早い時期のものとされる。これも上下の幅が左右で變ら

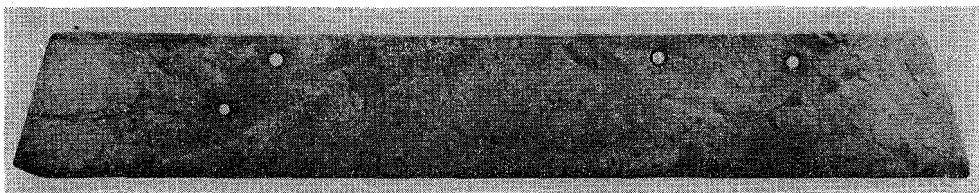


圖31 石庖丁形玉器 不對稱孔細長型 長 43.3cm

ない型式である。圖19(2)―(5)は陝縣七里鋪の殷中期に屬するもの。側邊の刃に對する角度は様々であるが、上下の幅が左右で變らない點は共通してゐる。圖20(2)、(3)は新鄉潞王墳下層の例。二里岡上層即ち殷後期の早い時期に相當する。これらも同じ特徴をもつ。

右に引いた例から、二里頭期に始まり、殷中期から後期へと、梯形に近い形の石庖丁では上下の幅が左右で變らない類が作られたことが知られたと考へる。このことを顧慮すると、二里頭期への歸屬の知られる近似對稱型の石庖丁形玉器の形が生れたのについては、それに先立つ不對稱形の型式の磨滅、様式化以外に、右に引いたやうな石庖丁の形を好んだ者のその製作への關與といふことが大いに關係してゐたであらうことが推測されるのである。

(5) 不對稱孔細長型

不對稱孔といふのは、峰沿ひに穿けられた孔が左右の中心線に對して對稱に穿けられてゐない、または三個以上の場合、中心線に對しては對稱でなくても、等間隔に穿けられてゐない、といふ意味である。この場合、横方向の中心線沿ひ、一方の端近くにあげられた一個の孔は對稱不對稱の考慮外であることはいふまでもない。例へば圖31。細長く、上下の幅が左右で變らず、刃はほんの心持ち内反りで、兩側邊の刃に對する角度が僅かに違ふ點、前節のものと共通するが、ただ峰沿ひの孔は右の二個が寄り、左の一個が飛び離れてゐる。前節までに見てきた型式の器では、峰沿ひの孔がこのやうに不對稱なものはない。この玉器の原型となつた型式の石庖丁においては、峰沿ひの孔は保持するための仕掛を峰に裝着するためのものとしての機能を持ち、そのためには孔が石庖丁に對して對稱である

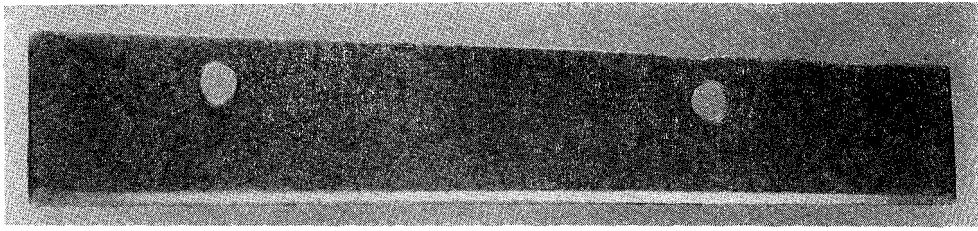


圖32 石庖丁形玉器 近似短冊型 長 40.5cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

必要があったため、それを原型とした玉製品でも、孔の数が二つ以上になった時も含めて對稱的な位置が選ばれたものと考へられる。それがこの節でとり上げた類では崩れてゐるのである。この點、この型式の玉器としては、型式學的に樣式化、退化の程度の進んだものと判定される。

圖版14は孔のあけ方が同様な特徴をもつ類。これも刃はほんの心持ち内反りになってゐる。片刃で厚さ三ミリばかりの極く薄手の作りである。圖版15も同様な特徴をもった例。少々幅が廣い。この器も刃が心持ち内反りになってゐる。これも厚さ三ミリばかりの薄手の作りである。他にこれと同式の器は王立オンタリオ博物館にもある。

この最後の例も含めて、この型式の器はいずれも孔が一つ置きに表からと裏からと交互にあけられてゐる。このやうな孔のあけ方も、他の型式の器に絶無ではないが、ざっと見た所見かけない方式である。

この型式の器を通覽するに、圖31は前節の型式に近く、まだ良いのであるが、他はいずれも兩側邊の刃の線に對する角度が直角に近くなって全體が短冊形に近附いてゐる所、肩が圓く作られてゐる所など、形にピリツとした所がない。薄手な作りの上に極めて均一の厚さに、眞平らに仕上げられ、技術的には優れてゐるにかかはらず、この點に形態において樣式化が進んでゐることが感得される。圖版14、15は孔が不必要と思はれる程大ぶりである點にも樣式化が感ぜられよう。實年代については、前節のものと異なり、學術發掘品が知られないこともあつて決め難い。殷後期から西周前期頃といふことにならうか。

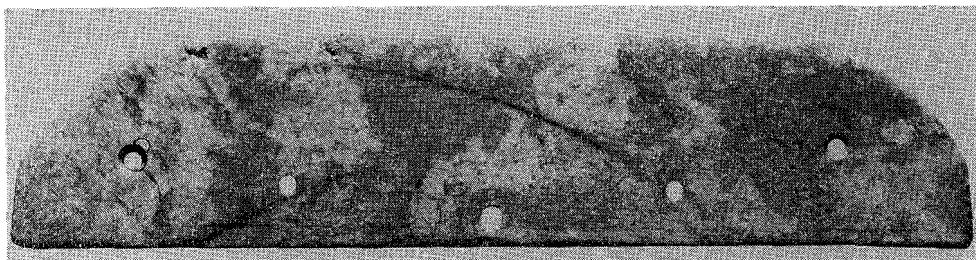


圖33 石庖丁形玉器 長約32.2cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

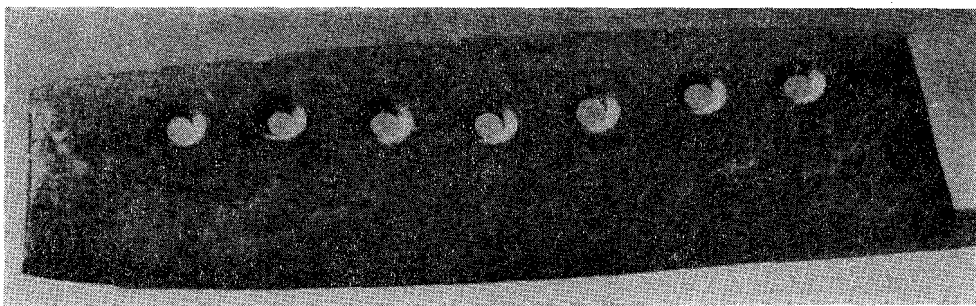


圖34 石庖丁 青蓮崗文化崧澤類型 江蘇南京北陰陽營出土 長 22cm 南京博物院

(6) 近似短冊型

圖32がその例。灰緑と錆色の斑の石で作られてゐる。右方に向ってやや幅を減じ、刃はほんの僅か内反りになってゐる。右の短邊が刃に對して直角より少し小さい角度をなすが、全體にただの長方形の石材といった感じで、前節の器よりも更に様式化の進んだものである。孔は前節の圖版14、15と同様、不必要と思はれる程大きく、不對稱の位置に穿けられてゐる。このやうなものが型式學的にみて前節に示したやうなものの次に來るものと想定される。然しその實年代については今の所、前節のものに次ぐ時代といふ位のことしか言へない。

(7) 無孔型

現在知られるのは最初に引いた圖1が年代の確かな稀な例であるが、これも型式分類に加へておく必要があらう。

(8) その他

他に不規則な形のもの、例の一つしかない型式のものも若干あ

るが、圖33は引用しておいてもよいものである。孔の列が刃に向って弧狀に張り出してゐる點、圖34に引いたやうな南京北陰陽營出土の石刀を思ひ起させる。この器の表面には寫眞に見るやうに、玉材を切り出した時の弧狀の擦り痕が残る。この痕は良渚文化の璧などによく見るものである。²⁷北陰陽營は良渚文化に先行する崧澤類型と大體平行する時期と考へられてゐる。²⁸これは圖33の玉器が圖34の北陰陽營の石器を原形とすると考へる上に好都合な事實である。

五 薄く挽き切られ、或ひは刻みを入られた石庖丁形玉器の年代的位置づけ

(1) 各型式への同定

次に前章に記した編年に、第二章で引いたとき薄く挽き切られ、或ひは刻みを入られた類をあてはめてみよう。先づ圖版1に引いた一對揃った例。刃が内反りにならず、長い側邊の刃に對する角度が大きく、²⁹肩が圓い點、また孔が極めて大きく、不對稱に配置され、交互に表と裏から穿けられてゐる、といふ特徴は、不對稱孔細長型に屬する。上下の幅が左右同一でなく、一方から他方に向って幾分狹まつてゐる點は、この型とは外れてゐるのであるが。圖版1のやうな割符的に二枚一揃ひに作られた石庖丁形玉器が殷後期—西周前期頃に作られ、使用されたことが知られた。この型は圖30のやうな過渡的なものを除くと、いづれも極めて薄手に作られてゐる。恐らく圖版1のやうな用法のため、二枚揃ひに作られたものと見られよう。

圖版2も一見すると孔が不對稱の配置で、兩側邊の刃に對する角度が直角に近い所から、不對稱孔細長型とも見られるが、峰沿ひの孔に注目するとちゃんと對稱に穿たれてをり、肩も角張り、刃も内反りになってゐる所から、やはり不對稱

太短型の内の細長くなった部類とすべきであらう。圖版3は孔が繭形である點特異であるが、これも孔の位置、器の全形からやはり不對稱太短型の同じ位置に分類すべきである。龍山期の終り頃のもの、が薄く挽き切られてゐることがこれで明らかとなった。

挽き切られたのは何時か。玉器は古物が使はれることがある。典型龍山文化の玉器が殷虛五號墓から出土してゐることは先に筆者が指摘したごとくである。圖版2、3の玉器も作られたのは典型龍山文化乃至良渚文化であるが、傳世し、或ひは地中から發掘され、ずっと後世になって薄く殺がれて瑞玉として使はれたといふことも考へうる。然し日照兩城鎮からは圖8のやうな玉板の他、厚さ三ミリの石斧形の玉刀も發見されてをり、また同地では別に、同様に薄く殺いだ玉片も發見されてゐることから考へ、圖版2、3のやうな石庖丁形玉器を薄く挽き切ることは當時の技術で十分可能だったことは知っておかねばならない。この不對稱太短型が挽き切られた時期については後にまた論ぜられる。

圖版4は挽き切られた後に長い方の側邊の近くを磨って本體基部無境界型の骨鏟型玉器に改造されてゐるが、その原型は十分うかがはれる。即ち不對稱細長型である。圖42、圖版5、6は上下の幅の狭くなった方の峰に削りこみを入れたり、それを更に薄く挽き切ったり、或ひは峰と刃に刻みを入れたものである。これらの加工の加へられたもの、器も不對稱細長型に屬する。即ち大體典型龍山より後から二里頭期の或る時期までのものである。これらの加工の加へられたのは何時であらうか。

(2) 弧形の削りこみの年代

全部の種類について時期を明かにすることは難かしいが、弧形の削りこみについてはその時期をかなり絞ることができる。弧形の削りこみをつけた器に所謂柄形器がある。筆者が周禮の大圭に當てたものである。この型式の器は二里

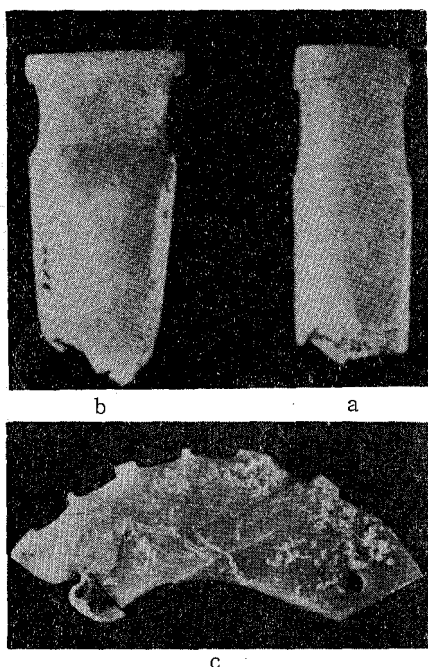


圖37 大圭 (a, b), 璜(c) 殷中期 河南鄭州銘功路西側 2 號墓出土 a 殘長6.6cm
b 殘長7cm c 外弧弦長11cm

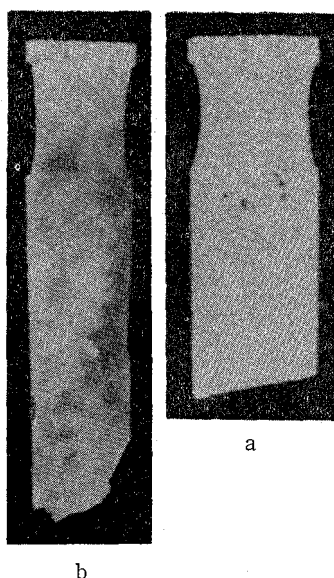


圖36 大圭 殷中期 湖北黃陂盤龍城樓4 號墓(a), 樓 5 號墓(b)出土

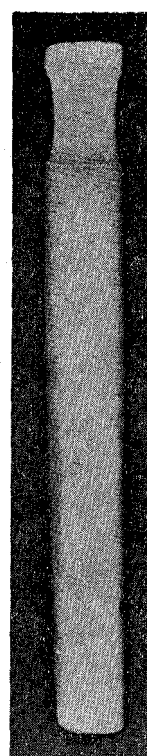


圖35 大圭 二里頭三期 河南偃師二里頭出土 長約17cm

頭期に始まり、西周の中・後期に及ぶ遺物が知られてゐる。この型式の器の柄頭近くに設けられた割りこみについて通覽するに、圖35は偃師二里頭、宮殿址の北五五〇メートルにある二里頭三期層に開口した竪穴、K3の出土。特徴的な形をもった青銅戈、爵も一緒に出てゐる。割りこみの曲線に注目するに、軽く内反りで一番深く切り込んだ點が中央あたりに來るが、上下で均一な曲りではなく、柄端の方に近づくにつれて僅かづつ曲りが強まるといふ特徴が見られる。他に偃師二里頭出土の大圭はもう一例知られるが、寫眞の切り抜きが良くないので引かない。

圖36は黃陂盤龍城の殷中期の墓の出土品であるが、35の削りの曲線が控え目であつたのに對し、それと同様な特徴を持ちながらやや大膽に表現されてゐる。圖37は鄭州銘功路西側の同じ時期の2號墓の出土品である。aでは削りの曲線の一番深く入った部分が上端に偏り、bの右側では下端に位置し、圖35、36では一端で心持ち強くなつてゐた曲りの部分が強調されて一端に強く偏り、力強くはあるがデリカシーに缺けた形になつてゐる。同墓出土の璜形の玉

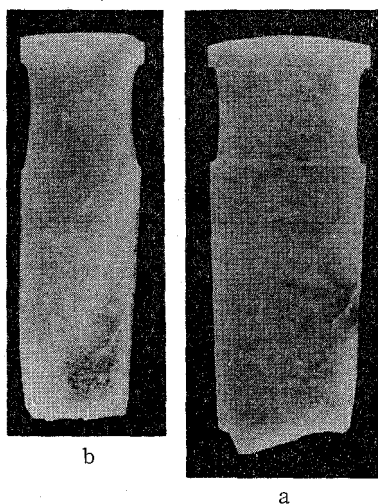


圖39 大圭 殷後期 河南安陽侯家莊
1003號墓出土 a 長約7.7cm
b 長約7cm

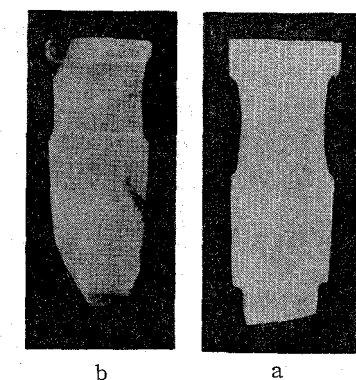
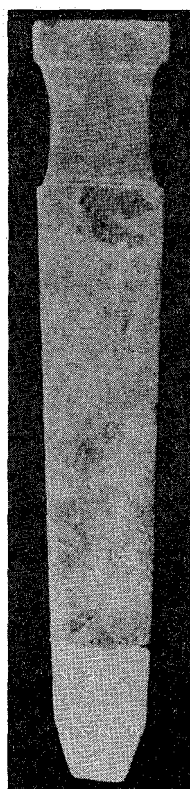


圖38 大圭 殷後期 河南安陽侯家
莊1001號墓出土 a 長約5.3
cm b 長約5cm c 長約
14.3cm

(圖37c)の外側、小さな尖りに隔てられた平たい八字形の曲線も同じ特徴をもっている。

殷後期では例へば安陽侯家莊一〇〇一號墓、一〇〇三號墓の出土品がある。伴出物からみて殷後期一〜二期頃のものである。圖38は一〇〇一號墓の出土品。全體に削りこみが深く、削りの兩端が始めから深く落ち込むといふ特徴が見られる。一方、削りこみの曲線を見るに、圖38aなどは圖36aのものに近いやうにも見えるが、よく見ると一端から他端に向って、曲り方に微妙な變化が缺如してゐる。圖38b、cとなると、削りくみはただ中窪みといふ以外に特色がない、としかいひ様がない。圖39は一〇〇三號墓の出土品であるが、aについても右と同様のことが言へる。bの方は黃陂盤龍城の圖36aとよく似てゐる。或ひは殷中期のものの殘存ではなからうか。他に例へば安陽大司空村の出土品に圖40のごときものがある。aは一八四號墓の出土でⅡ式の爵、觚が伴出、bは二九號墓の出土でⅣ式の爵、觚が伴出してゐる。前者は殷後期の中の早

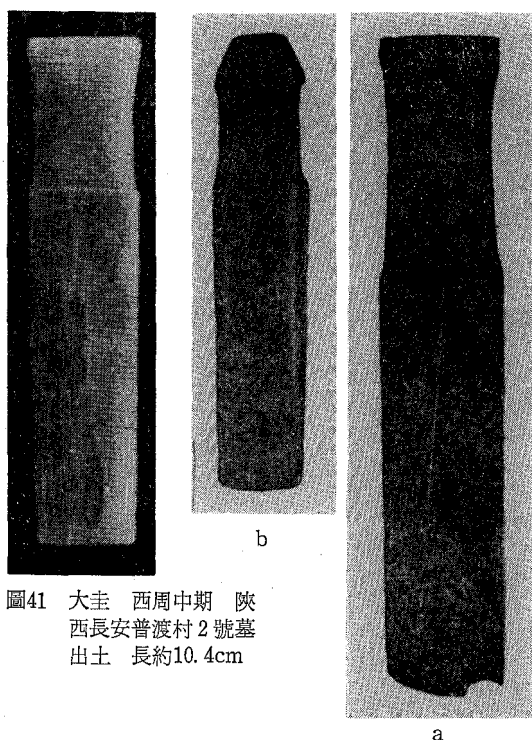


圖40 大圭 殷後期 河南安陽大司空村184號墓(a), 29號墓
(b)出土 約原寸

圖41 大圭 西周中期 陝西長安普渡村2號墓出土 長約10.4cm

くみは西周中・後期の動物紋を刻した大圭にも幾つか例がある。

大圭の割りこみの形を時代順に秩序づけると以上のごとくであるが、問題の圖42、圖版5のやうな石庖丁形玉器の割りこみがどれに近いかは改めて指摘することもあるまい。圖35のものである。圖版5の器の割りこみは圖42よりもやや曲りが強いとはいへ、殷中期のものやうに武骨なものとは遠く、デリカシーを保ってゐて、やはり二里頭三期に時代の一點が知られる類に屬する。

同じ割りこみをつけた例は圖43、44がある。割りこみの形は圖42、圖版5と全く同一である。ただ曲りの強まる側が圖42、圖版5では端末の側にあったのが、これらでは反對向になつてゐる點に相違があるのであるが。圖43の方は厚さ二ミリで裏は平面である。表裏とも同じ光澤に磨かれてゐて、圖42、圖版5のやうに二枚におろして挽き切った面を仕上げず

い時期、後者はその末期と判定されるが、いずれも極く浅い割りこみで、特徴のない緩い曲線を畫いてゐる。殷後期の大圭の割りこみはお座なりになり、僅かに中窪みに形造るといふ以外、何らかの特徴的なくせのある曲線は用ゐられなくなったと言へよう。

大圭の割りこみは西周に入つて益々控え目な目立たない曲線を畫くやうになつて行つたと思はれる。

圖41は長安普渡村2號墓の出土品である。西周中期の青銅器を伴出してゐる。このやうな控え目な割り

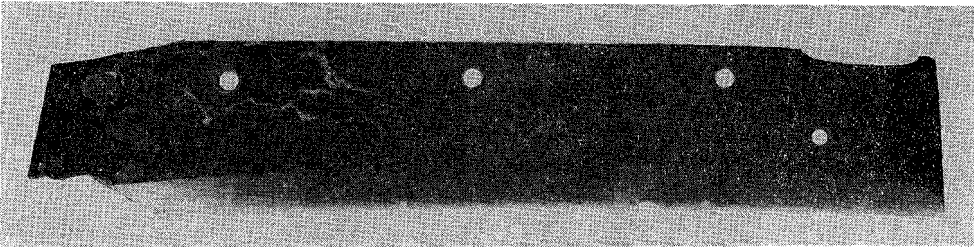
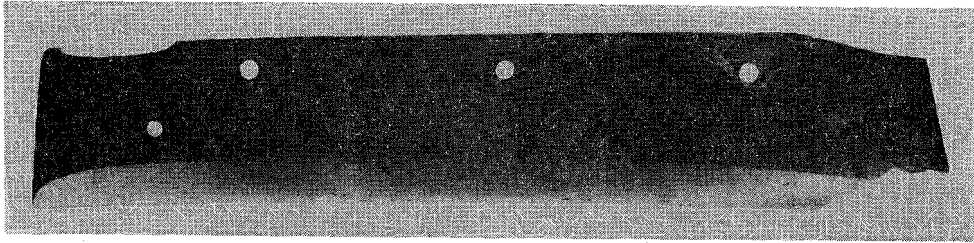


圖42 割りこみをつけた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 49.6cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

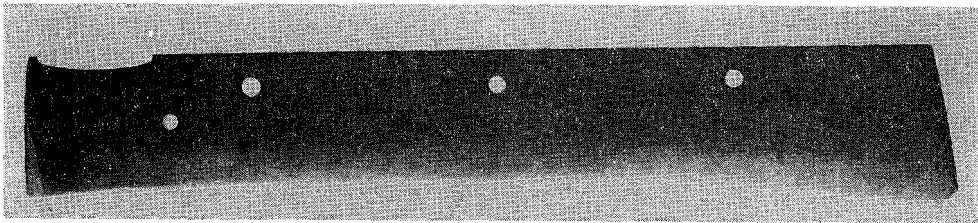


圖43 割りこみをつけた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 52.6cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

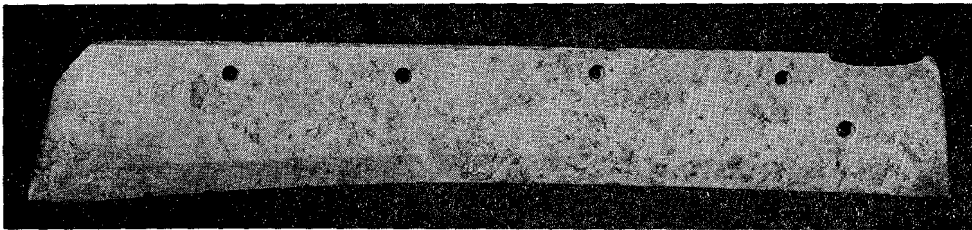


圖44 割りこみをつけた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 59.5cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

に放置したものとは相違がある。圖44の方は、兩刃で厚さ八ミリあり、挽き切られたものではない。

これらの割りこみは、そのつけられた石庖丁形玉器の全體の形が整へられてから後に加工されたものであらうことは容易に想像されるが、この二つの工程は同一工房において引つづいて行はれたものか、或ひは石庖丁形玉器が完成された後、別の時、別の工人によって後から行はれたもの

であらうか。石庖丁形玉器の峰が十分仕上げられず、擦り切りの痕を残してゐるに對して、この割りこみの小口が器の兩面に對して直角、整正に仕上げられてゐることについて、ローソン女史に割りこみと原の器の製作は時期的に違いがあるといふ見解のあることは、先に引いた所である。問題の器を観察してみると、この割りこみは石庖丁形玉器の峰の端を少し残した所から始まつてゐるが、峰の端の切り残された部分は程よく圓味がつけられ、長い割りの凹の曲線に對して、それを裏返したとも言へる短かい凸の曲線を畫き、兩者は美しい對照をなしてゐる。また割りこみそのものの大きさも、器全體と程よい釣合が保たれてゐる。これらの點からみて、どうも出來合ひの石庖丁形玉器に、その製作者とは別の、時代を異にする工人が後から細工を加へたものとも見えない。また型式學的に考へて、この割りこみのある石庖丁形玉器は典型龍山、良渚文化より後、二里頭文化の或る時期よりも前にしか入る所がないことは、先に考察した通りである。一方、割りこみもその曲線の特徴からみて二里頭三期に年代の一點を有し、二里岡には降らないものであることも今しがたの考察で明かにした所である。即ち器の型式と割りこみは、大雑把な年代において重複した部分をもつ。そこで、兩者の細工は同時代において連續して行はれた、と考へてみるとどういふことにならうか。

その場合、峰の粗い作りと割りの部分の整正な仕上げの相違はどう解釋するか。それについてはかう考へることができ。現代において中國の東北で使用される梯形二孔の石庖丁形の鐵製品は、二孔を使って峰の部分に覆ふ革をとめ、併せてこの二つの孔に革紐を通して使用の際の保持に便にしてゐる。^⑨古代の二孔の石庖丁にも、同様峰の部分に革などで覆つて手への當りを和らげる工夫がなされたとすれば、それを象徴的、儀式的なものとして大型化した二孔乃至それ以上の孔をもつた石庖丁形玉器にもその風が受けつがれたことは大いに考へうることである。例へば圖版11の偃師二里頭出土品のやうな長さ六五・二センチもあるやうな例で、側邊に齒を刻み出し、細い平行線で幾何學紋をつけた最上等の部類でも、峰の部分だけは仕上げがなされてゐない。^⑩この部分が石庖丁からの傳統で、何かによって覆はれてしまふために、仕上げ

の必要が認められなかったものに相違ない。問題の割りこみのある類でも、割りこみを加へた部分はむき出して目にふれるのに對し、峰の部分は何かで覆はれることが想定されたので、仕上げの必要が認められず、粗作りのままに残されたと考へれば、この二つの部分の作りの精粗について十分解釋がつくのである。

然しさう考へても問題の割りこみのある器について解釋のつかないことが残る。それは峰沿ひの孔の位置である。峰沿ひの孔が、峰を覆ふ革乃至そのやうな役目をもつ材料をとりつける役割を持ったことが確かとすると、それらは峰の全長の内、峰に覆せる材質で覆はれる部分、即ち割りこみを除いた部分に對して對稱的な位置に穿けられて然るべきであるのに、實際の遺物では總て割り込みの部分をも含めた、全長に對して對稱的な位置に穿けられてゐるのである。さうすると、問題の石庖丁形玉器は先づ第一段階として、割りこみが加へられることを豫想することなしに成形され、後に別人の手によって割りこみが追加されたのだ、と考へざるをえないことになるのである。

第二章で加工の加へられた玉器を引用した際には觸れなかったが、峰の割りこみと同じ位置に淺いL字形の切り欠きを作った石庖丁形玉器が幾つか知られてゐる。圖45—47のごときものである。この式の峰に切欠きをもつ例も、峰沿ひの孔は後引の圖48を除き、總て切り欠きと關係なく、峰の全長に對して對稱的な位置に穿けられてゐて、この點先に論じた弧形の割りこみのあるものと事情が全く共通してゐる。この圖45—47のやうな方式の切り欠きについては、今のところそれそのものから年代を判定する手掛りを得ることができないが、既製の石庖丁形玉器に追加加工されてゐること、その位置と規模において前引の割りこみと共通してゐる。恐らく相近い時期に、大體同じやうな目的のために加へられたものと考へられる。

以上の考察によつて、石庖丁形玉器の峰につけられた弧狀の割りこみ、それにL字形の切り欠きも、もとの器の製作と時を異にし、別人の手によつて追加加工されたものであることが明かにされたと考へる。

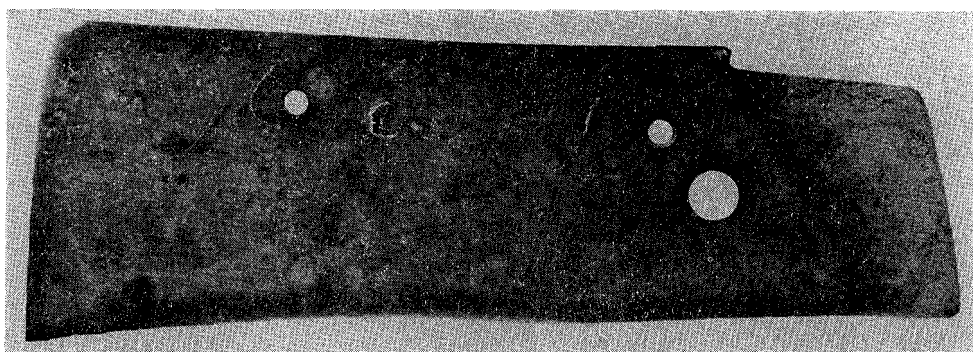


圖45 切り欠きをつけた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 25.3cm

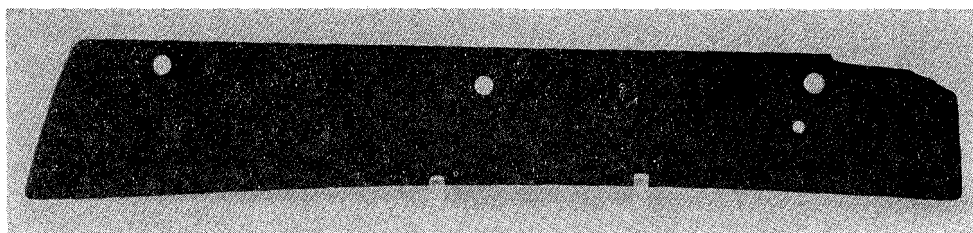


圖46 切り欠きをつけた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 48.5cm Musée Guimet

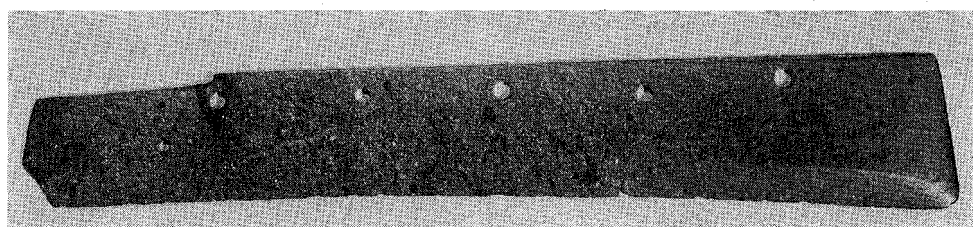


圖47 切り欠きをつけた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長約38.4cm Courtesy of the Trustees of the British Museum

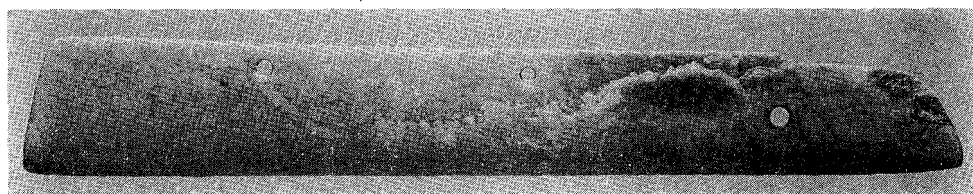


圖48 切り欠きをつけた石庖丁形玉器 長 34.2cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequerst-Grenville L. Winthrop

なほ切り缺きのある石庖丁形玉器には圖48のやうな例がある。この例では峰沿ひの孔は全長から切り缺きのある部分を除いた長さに對してほぼ對稱的に穿たれてゐる。この例では明かにこのL字形切り缺きが始めから作られてゐたのである。この器をみるに、刃の内反りが全くなく——切り缺きに對應する邊ではむしろ外反り氣味である——、上下の幅の廣い側の側邊の上の角に圓味がつけられてゐる。これらの特徴は不對稱孔細長型を思ひ起させる。この器は恐らく圖45—47の型式が存在したのよりも後の時代に、切り缺きの加へられたこの形を眞似、しかも峰を覆ふ材質をとめるための峰沿ひの孔の位置を合理的に改善して作ったものと考へられる。

次に弧形の削りこみについて考察したついでに、同じ型式の削り込みのある特殊な玉器を一つ引いておきたい。後に記す骨鏟形玉器の年代判定の手がかりとして役立つからである。圖版16がそれである。全體が灰綠色で黒の斑のある玉から切り出され、先に近い所、下向に石斧狀の刃が出てゐたのが一度折れ、修正されてゐる。先端上部、Aの所に二つの弧狀の削りのついた裝飾があり、よく見るとそれを構成する二つの曲線が、今問題の石庖丁形玉器の削りと同性質のものなのである。同じ曲線はまた下に出た斧の刃のすぐ後、Bの部分にも典型的な形で見出されよう、このユニークな玉器が同じ時期に作られたものであることが知られる。

またこの器でもう一つ注目には價するのは後部、柄に當る所に作り出された。凹形の削り型のついた突出部である。この特徴的な削り型はまた圖49、50のごとき神像の基底部にも見出される。先に等者が典型龍山文化に屬するものであることを指摘した類である。⁽⁴⁾これらが二里頭三期に實年代の一點を有する特徴的な削りこみと年代的に平行する部分をもつものであることが證される。

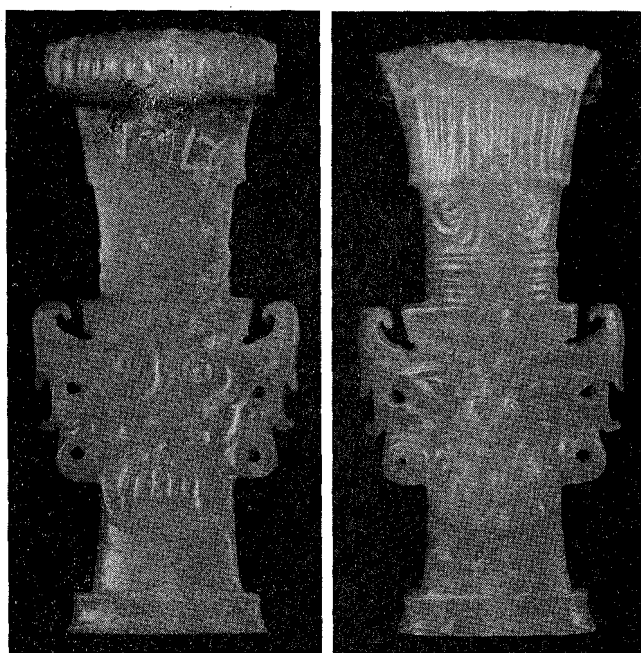


圖49 鬼神形玉製飾板 典型龍山期 National Museum of American Art, Smithsonian Institution



圖50 同 National Museum, of American Art, Smithsonian Institution

六 骨鏟形玉器の編年

石甌丁形玉器には日用品の石甌丁ほか、年代判定に係りのある客観的な證據が少なくないのに對し、骨鏟形玉器の方にはそれが乏しい。然し若干の手掛りがないではないので、その型式分類と編年の大筋ぐらゐは示すことができる。以下の通りである。

(1) 廣漢型

まづ側飾が手のこんだ類。その一つの型は廣漢型である。一九二九年、四川省中部、廣漢縣の中興鄉（現在の中興公社）で農民が偶然玉器類を發見した。ここに問題の石鏢形玉器の他、玉斧、玉琮、玉腕輪、石製の大型璧があった。⁴³ 圖51は發見當時の報告の寫眞、圖52は現在四川省博物館に残されたものの寫眞である。この玉器は灰緑の基調に白っぽい筋の入った玉質である。一九三三年、一九六三年、一九六四年にその附近の發掘が行はれたが、玉器は發見されてゐず、玉器の出た遺蹟の性質は不明のままである。従つて、この遺蹟から發見された土器の年代を馮氏は西周後期—春秋前期のものと判定してゐるが、これらの土器の年代判定が大體合つてゐるとしても、それを玉器に援用するのには問題がある。年代の問題についてはまた後に觸れるとして、先づこれらの器の型式の特徴を記す。本體は後に(3)、(4)節に引く類ほど長はなく、本體の側縁の反りは控え目で(3)、(4)節のもののやうなダイナミックな美しい曲線は畫かない。目立つた特徴は側節に見られる。即ち本體の根本には全體が低い7字形をなした突起がつく。その後方、基部寄りは大體直線的に削られ、そこに二つづつ並んだ突起が二對切り出され、次に基部との境に大ぶりの、とげとげと齒の出た飾りがつく。この飾りは外向に齒がつく以外、器の長軸方向にも齒が切り出されてゐる所に特徴がある。圖52によく見えるやうに、兩側の側飾をつなぐ形で平行線が刻まれてゐる。圖51、52と共通した特徴をもった器は公私黃集品中に間々見出される。例へば圖53は本體はかなり短かいが、右に記した特徴を大凡兼ね具へたものである。褐綠色と褐色の斑に白っぽい色の筋が入ると記され、玉質の點でも廣漢のものと共通してゐる。

この廣漢型の器の年代であるが、最初に記したごとくこれを出土する遺蹟の出土品で判定するのが難かしいとなると、別の方法を考へる他ない。筆者は圖版12に引いた偃師二里頭出土の骨鏢形玉器が手掛りになると考へる。この玉器は前引

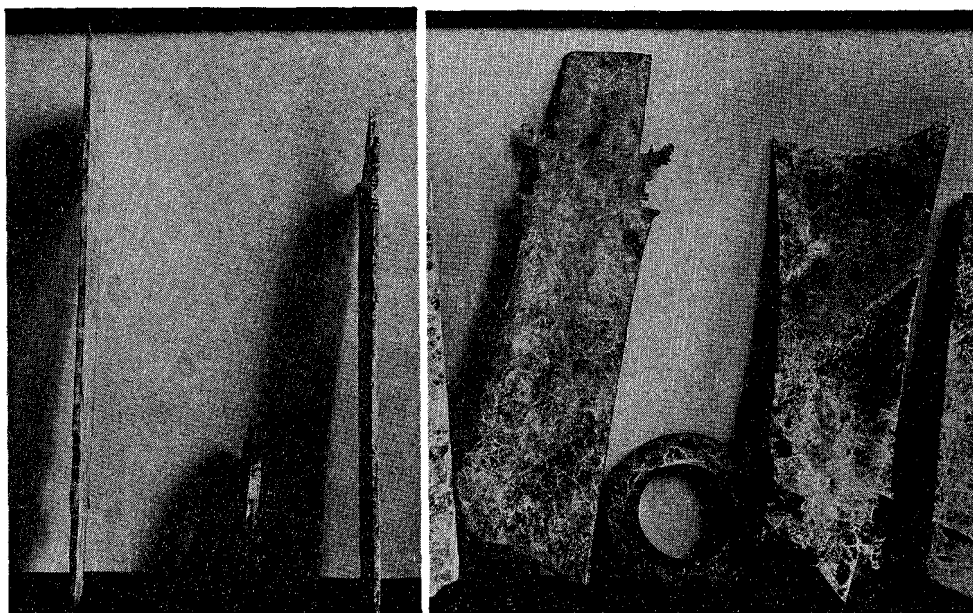


圖51 骨鏃形玉器 廣漢型 四川廣漢中興鄉出土

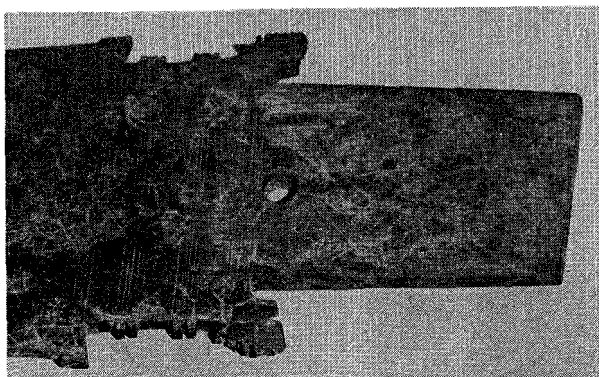
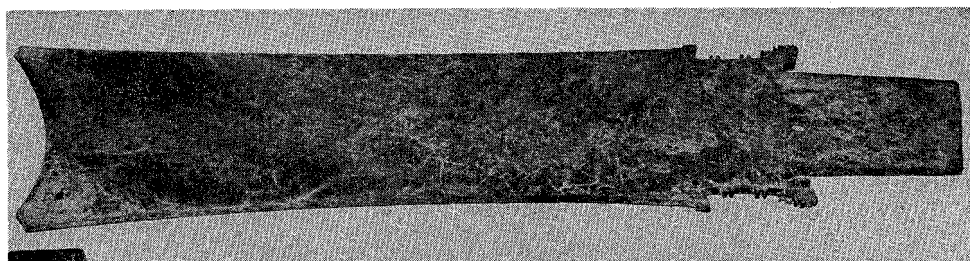


圖52 同 四川博物館藏

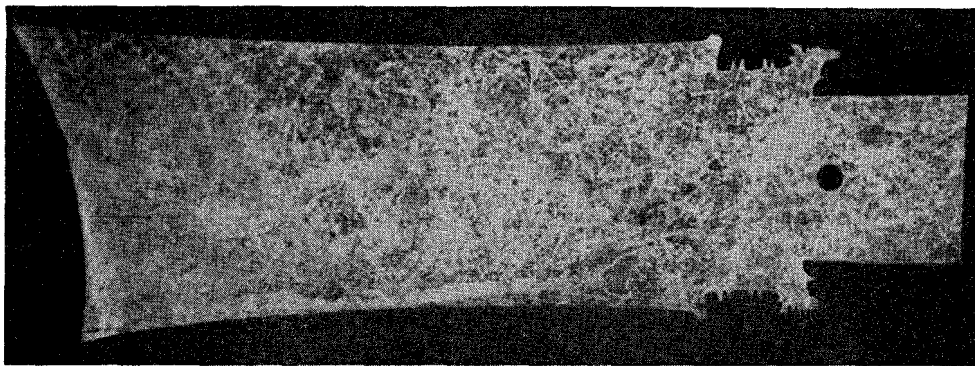


圖53 骨鏟形玉器 廣漢型 長 39.3cm



圖54 刀形玉器 長 25.7cm Dr. Arthur M. Sackler Collection

の圖版11の石庖丁形玉器と一緒に偶然發見された、長さ四八・一センチの大型品である。前記のやうに出土層位から時期を決めることはできないが、出土遺蹟から大凡二里頭期と考へて差支へなからう。この器は次の點でユニークである。即ち、側飾の基部寄りにある大きな突起は長軸と直角の方向だけでなく、長軸と同方向にも刻みを入れて齒を作り出してゐる點、また側飾の相對する側の突起を複数の平行線で結んでゐる點で圖51、52と同様である。然し側飾に入れられた刻みや、それらを結ぶ平行線が長軸と直交する方向に加へられてゐて、圖51、52でそれらが長軸と斜交する方向に加へられてゐてダイナミックな印象を與へるのに對し、ひどく硬直化した感じを與へることである。圖51、52など、廣漢出土のものでは、本體の兩側の線が異なったカーヴを畫き、本體と基部の中心線が同一直線上にないのに比べ、この器では本體の兩側の線が同じカーヴを畫き、本體と基部の中心線が一直線になつてゐることも、硬直化の印象を強めるものである。これに類する器は今のところ他に知られてゐないが、この器についてはかう考へられよ

う。即ち、この偃師發見の器の側飾にみる、二方向から刻みを加へたやうな突起は、中原發見の遺物にこれ以前の時期にも、これ以後にも傳統のないものである。一方、よく似たものは廣漢型の器に多くの例が見出される。とすると、偃師のものは中原の工人が廣漢のもの乃至それと近い型式のものから模作したもの、としか考へ様がない。この器の器側の線、本體と基部の中心線について先に指摘した點も、模作した手本についての觀察の不足、乃至は異文化の品物に對する審美的な不同意に由る換骨脫胎として解釋されよう。異民族の武器を殷人が自分等の表現型式で模作した例は、先に筆者が平行線紋板狀青銅斧とそれを模した大理石製の儀仗的な斧について指摘した所である。⁴⁵ ケースは違ふが參考とするに足ると考へる。

なほ圖版12の器が廣漢型の骨鏟型玉器を模作したものであることは右に記した通りとしても、模作の時期が二里頭期頃かどうかについては問題が残らう。それについては圖53に引く玉刀が參考となる。

この玉刀はサックラー・コレクションに屬し、長さ二五・七センチあり、殷中期以後に例の知られる、柄を別にすげて使ふ大型の刀の系統の形を持つてゐる。この型式の刀は先に筆者が示したやうに、⁴⁶ 刀身と莖の上縁に注目すると、兩者の境目で僅かに折れ目がある所に特徴があり、殷中期から後期へと次第に切先が反り上り、切先の部分が次第に幅を増してゆく。圖54の玉刀はその大きさ、莖と刀身の境の折れ目の特徴から、その刀身及び莖の部分が、この型式の青銅刀を模したものであることは疑ひない。然し切先が反り上らず、切先から刀身へとなだらかに移行してゐて、殷中期のものよりも更に細身の作りであることは、これの原型となつた青銅刀が、殷中期よりも時代的に遡ることを示してゐる。二里頭期のこの型式の青銅刀は未だ知られてゐない。然し現在知られる一番古い青銅刀でみるに、二里頭發見の小刀の⁴⁷ 刀身は細長い三角形の頂點を少し斜めに切り落したやうな形をもち、この玉刀と伸通つた特徴をもつてゐる。

この玉刀の峰に刻み出された裝飾は、(1)切先に近い方に一段と高く突出した部分の脇に刀身の長軸方向に刻みを入れて

る點、及び(2)小さい突出の頂部に更に刻みを入れる技法において、前引の圖版12の骨鏟形玉器と共通點をもつ。(1)の特徴は廣漢型、次に記す神木型にも見出されるが、(2)の方はそれらに缺如してゐる。この圖54にみる齒狀の飾りも、刻みが圖版12ほど深くない點において、兩者は全く同一とは言へないのであるが、現在知られる資料の中から一番近いものを探せば、やはり圖版12のものだといふことである。

以上、圖版12の骨鏟形玉器に飾られた齒狀の飾りは、近似したものが二里頭期頃の青銅刀を模した玉刀に見出されることが知られた。このことにより、圖版12の器は最初に推測したやうに、大體二里頭期のものと見て間違ひないことが傍證された。

以上の考へに誤りないとする、廣漢型の骨鏟型玉器の年代が知られたことになる。即ちその年代は圖54とほぼ同時代を年代の一點として持ち、それよりも若干遡る年代も含みうる、といふことである。四川省の異文化の器物を中原の工人が模作するからには、それが例へば四川省のどこかで掘り出された珍らしい古物であった、といふやうなことは先づ考へられない。それがそれを作った人間にとっては政治的ないし宗教的に重要な意味を持ったものであり、それを模作することが同じ分野において重要な意味をもったからであることについては、疑ひの餘地がないからである。

(2) 神木型

廣漢型と近いが、側飾の齒がもう少し單純な形をもったものに陝西省北部、神木縣石峁出土のものがある。圖55はそれである。この遺蹟には龍山文化遺蹟があり、土坑墓も副葬の土器から同文化に屬することが知られるが、骨鏟形玉器、石庖丁形玉器、玉斧等の玉器は板石を使った箱式棺から出土し、この方は土器の副葬が稀で、龍山文化に屬するか否か、未だ確かめられてゐない。

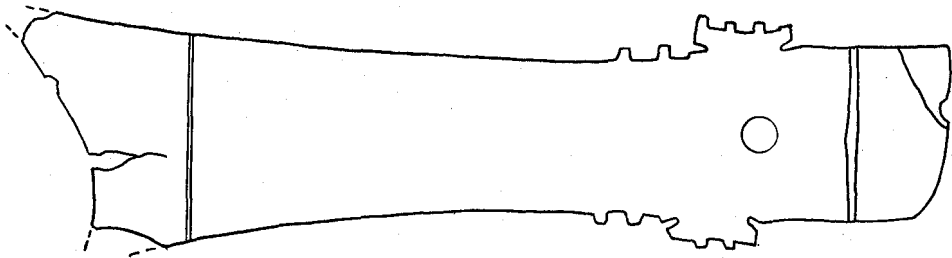


圖55 骨鏟形玉器 神木型 陝西神木石峁出土 1/2

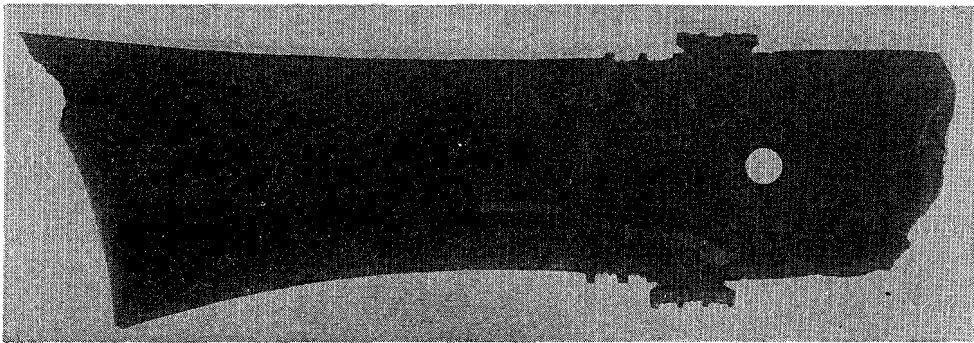


圖56 骨鏟形玉器 神木型 長 26.9cm

この神木發見の玉器は黑色の玉で作られてゐる所に特色があるが、形の點では次の特徴が認められる。即ち、本體は(3)、(4)節のものほど細長くなく、その側縁の曲りが非常に控え目である點、廣漢型と似てゐるが、外端の刃に近い部分で幅を増してゐる點に違ひがある。本體のもとの方には廣漢型のやうな短かい7字型の突出がなく、コ字形の齒が二つ切り出されてゐる。その後方に外方に向つて齒の出した大きな側飾がある點は廣漢型と共通するが、その形に相違がある。即ち廣漢型ではこの側飾に長軸と同方向の齒が刻み出されてゐたが、この神木型では長軸方向に兩側から刻み目が一つづつ入れられ、全體が舳と櫓の上った和船のやうな形に形造られてゐる。この側飾のつく部分とその後方の基部の幅が、本體の根本の部分より廣いのも特徴的である。これと全く同じ特徴をもつた器としては、最初の方に引いた圖版10の白鶴美術館の例がある。玉質の點からみても、この神木型に屬するものであることは疑ひない。

圖55の神木のものと同じした器に圖56、測圖8のごときものがある。この器は本體のもとの部分よりも基部の幅が

廣くなつてゐる點、兩脇に刻みを入れて船形に形造られた側飾の形、刃の部分がかなり擴がつた本體の形等において圖55と近いが、側飾の四角張った齒狀の突起の間に、細かい弧狀の刻みを入れて小さい尖りを作り出してゐる點に相違がある。全體のバランス、側飾の基本的な型式において共通してゐるから、圖55の神木型のヴァリエーションで作りの丁寧なものと見て差支へないのではないかと考へる。測圖8に見るやうに極めて薄手の作りであるが、實物を見てゐないので本來厚かつたものを薄く殺いだものかどうかは不明である。刃の部分が傷んでゐるが、これと同じ型式の器はウィンスロップの蒐集品にもある⁽⁴⁾。

神木型の年代については、以下の節に記す遺物と關係づけて考察する必要があるので、ここでは記さず、第七章で論ずることにする。

(3) 二里頭型

圖57は基部に比して本體が相當長く、兩者の接するあたりで兩者の幅は殆んど變らない。本體の兩側の曲線は、上が眞直に近く、下が幾分曲りの強い點、今まで見てきた型式と變りない。上下縁とも側飾近くで僅かながら外に向つて反る。この器で特徴的なのは側飾の基部に接する所の突起である。その突出部の先端の形は先に引いた圖版16の玉斧のAの部分に見たのと全く同じである。この特徴的な突起によつてこの圖57の玉器も大體圖版16と同じ時期のものとなる。この器は側飾の部分に、束にした二本の平行線を使った二つの×と平行線が刻されてゐる。これも二里頭期と思はれる石庖丁形玉器（圖版11、圖28）に見た所で、右の年代判定を裏づけるものである。

なほ圖版16、圖57にある問題の突出部の先端の形は非常に特徴的であるが、その形は圖58のごとき器の側飾と比較することによつてその成り立ちを理解することができよう。この器は本體の先端が圭形に削れなほされ、妙な形になつてゐる

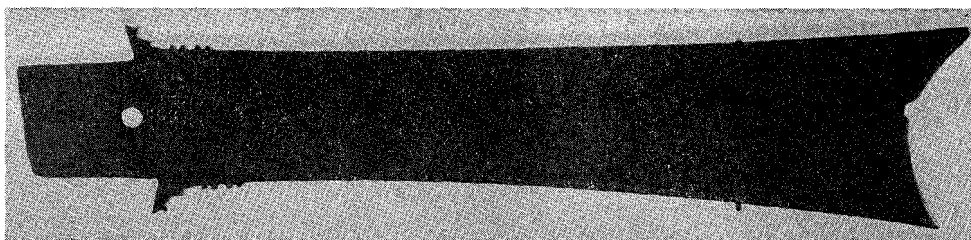


圖57 骨鏹形玉器 二里頭型 長 41cm Musée Guimet

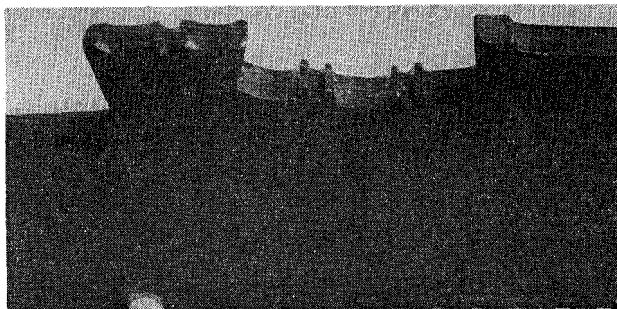
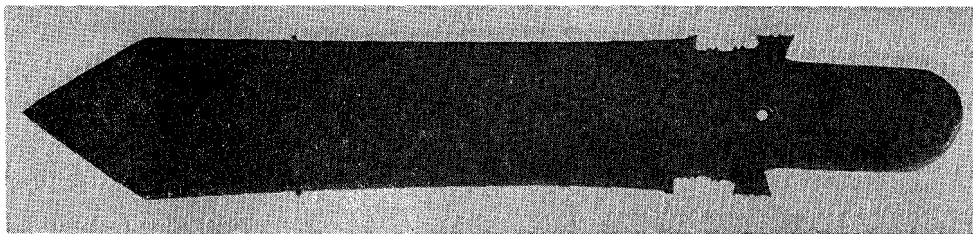


圖58 骨鏹形玉器 二里頭型 長 40.2cm Musée Guimet

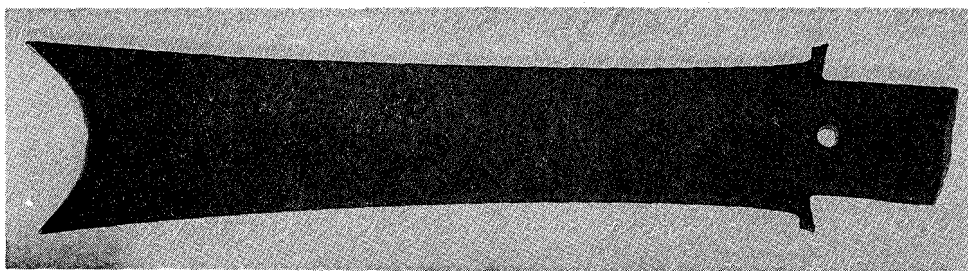


圖59 骨鏹形玉器 二里頭型 長 43.6cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

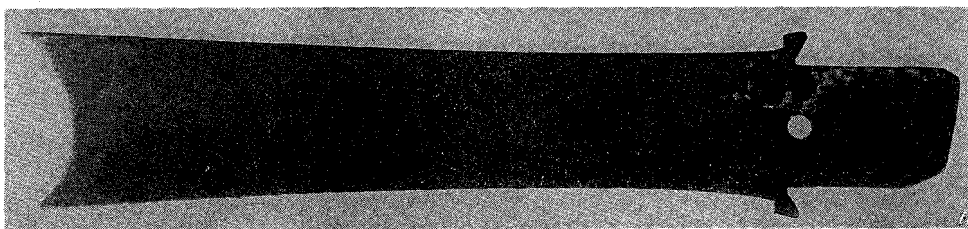


圖60 同 長 36.6cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution

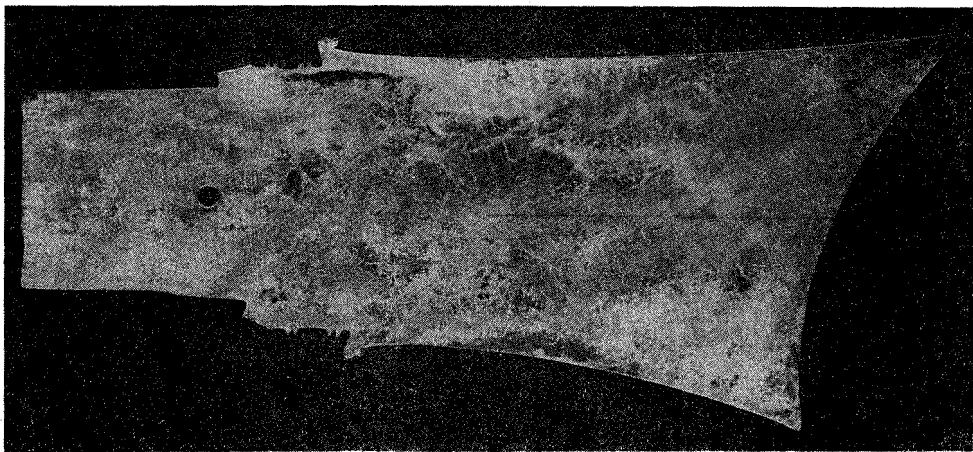


圖61 骨鏟形玉器 二里頭型 長 30.8cm The Minneapolis Institute of Arts Bequest-Alfred F. Pillsbury

が、本來は骨鏟形玉器であつたことはいふまでもない。この先端部を除いて他の部分は原形のままである。さてこの圖57の逆梯形の突起の外側の小口には、中間を鞍狀に磨り窪ませた裝飾が二單位作り出されてゐるが、圖版16、圖57ではこれが半分にされて獨立に使はれてゐると見ればよいのである。即ち圖版16、圖58の突起は、逆梯形の突起の同類なのである。

圖58は側飾の突起が圖57のやうに横方向への尖りを出さず、逆梯形そのものである。この突起は外向の小口が僅かに擦り窪められてゐる。本體の形は圖57と全く同じと言ってよい。圖59もよく似た器である。逆梯形の突起の外向の小口は、この例では擦り窪められてゐない。これらと特徴の共通する器は他にも例が幾つかあるが⁽⁴⁰⁾(圖60)、すべて圖56と同じ時期と見られる。

圖61も圖59と同じ小型の逆梯形の突起を持つ例である。本體は異例に幅廣く、短かい。然し各邊ともおとなしい曲線を使って形造られ、全體に靜かな調和が保たれてゐる。この器は惜しいことに基部に接する所にあつたはずの突起が兩方とも折れて失はれてゐる。折れ口からみて、本體に接する所にあるものよりも大ぶりのものだったはずである。

以上の器は小型の逆梯形の側飾をもつて二里頭期頃と判斷される類である。(1)節で廣漢型を手本に、中原の工人が作りなれない骨鏟形玉器を模造した例を引いた。圖57—61はその側飾、それらを形造る隙のない線、嚴正な全體の

鈞合等によって、それらが中原出来といふことを確信せしめるものであるが、さうすると中原の工人は早急に異文化の骨鏟形玉器を自らの美意識に合致したものに作り變へたことが知られるのである。

(4) 二里岡型

圖59、60と側飾の形がよく似た圖62のやうな器がある。前者との相違は本體の形に認められる。即ち、圖62では刃から根本の方に向って幅を減じてゆくが、五分ノ三程行った邊から再び幅が廣くなり始め、側飾の近くでぐっとカーヴが強くなり氣味な點である。圖63は右の例より本體が短かく、刃に近い部分の擴がりは控え目であるが、刃から根本の方に向って幅を減じ、半分を少し過ぎた所から再び幅を増してゆく本體の側縁の曲り加減は、圖62と同じ特徴を持つ。側飾の逆梯形の突起は原型から外れ、梯形であつた部分は著るしく低くなつてゐる。圖64にも62圖と同じ形の側飾がある。本體の側縁の中だるみの曲線はかなり大げさになつてゐる。

圖62—64からは、本體の兩側の線の曲りが強くなつてゆくと共に、逆梯形の側飾の原形からの變形の度が進行してゐる現象が觀察される。この點から、これらは先に二里頭型と呼んだものより型式學的に降るものと考へられる。

圖65は鄭州二里岡發見の器である。本體が長く、その外端、刃に近い部分の幅が目立って廣くなつてゐる點、圖64と似てゐるが、本體の形をみると、側飾附近での幅の増加が圖62などよりも輕微である。この點、二里頭型とここに引いた圖62—64のごとき型との過渡的な型と言へる。圖65の側飾は大きな突起が内外に一對づつ附いた盛大なものであるが、寫眞が小さいため細部はわからない。一つ一つの突起の形は圖版9、圖5、58のやうな高い逆梯形よりも、圖版10、圖56のやうな和船形の方に近いやうである。

この節に引いた器の實年代であるが、二里頭型よりも後れることは確かとはいへ、それが二里頭の晚い時期か、或ひは

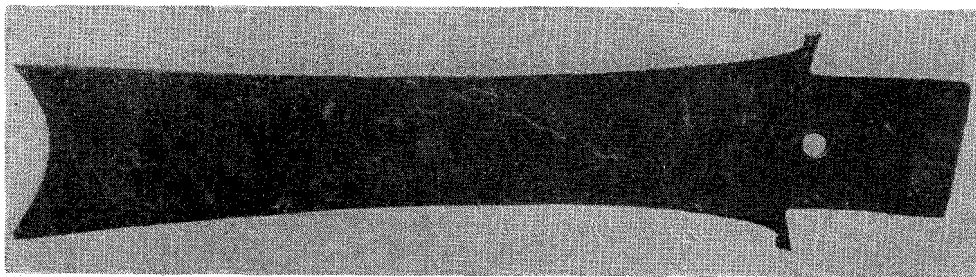


圖62 骨鏟形玉器 二里岡型 長 35.5cm Sonnenschein Collection, The Art Institute of Chicago

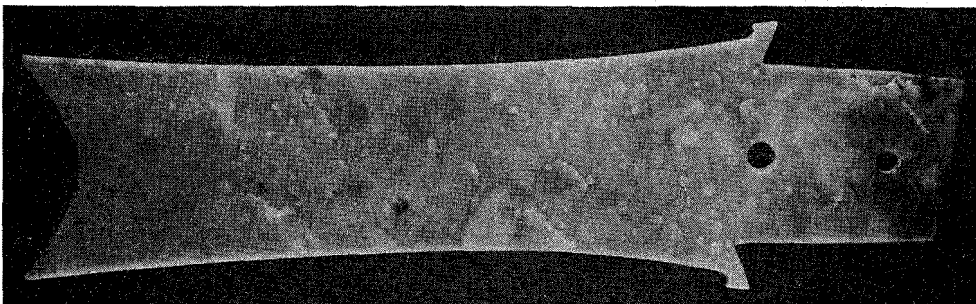


圖63 骨鏟形玉器 二里岡型 長 28cm

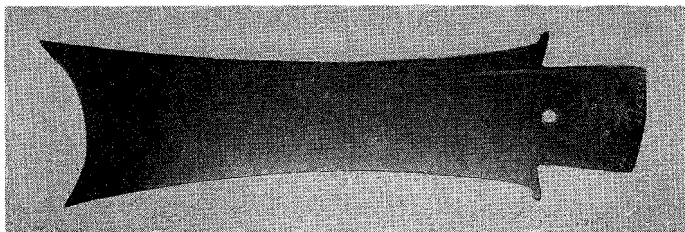


圖64 骨鏟形玉器 二里岡型 長 38.0cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop

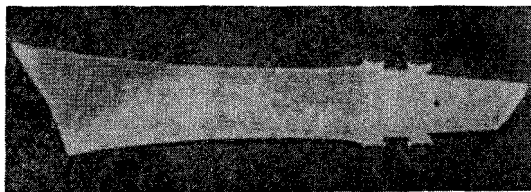


圖65 骨鏟形玉器 二里頭～二里岡型 河南鄭州二里岡出土 長 66cm

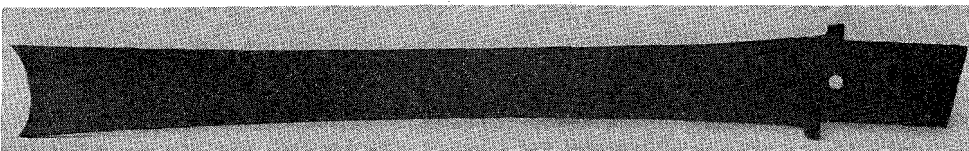


圖66 骨鏟形玉器 終末型 長 53.5cm Museum für Ostasiatische Kunst

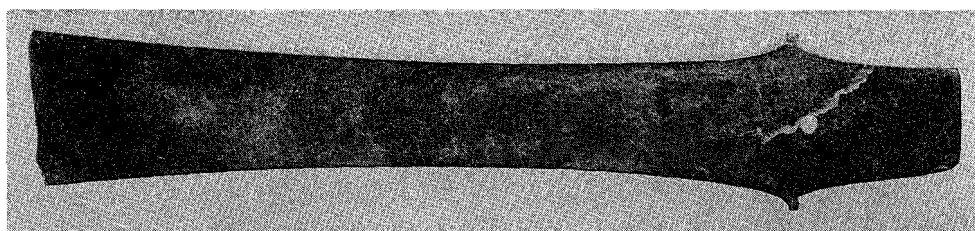


圖67 骨鏟型玉器 終末型 長 39.3cm Sonnenshein Collection, The Art Institute of Chicago

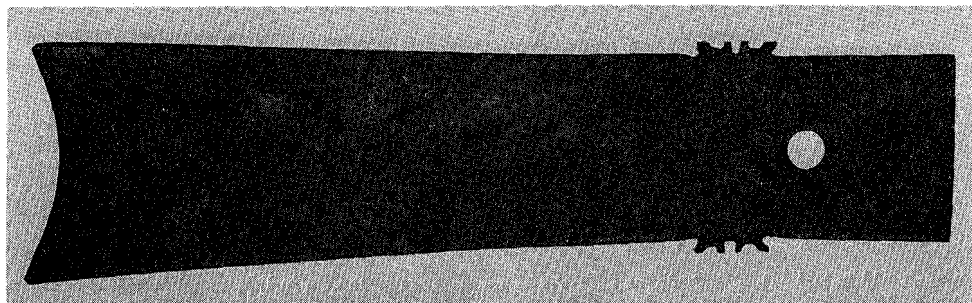


圖68 骨鏟型玉器 終末型 長 26.7cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution



圖69 骨鏟形玉器 終末型 山西侯馬牛村出土

殷中期か、或ひは更に降って殷後期にもかかるか、今の所判定する資料がない。側飾の型式が二里頭型につづく點から、この型式の年代は二里頭く殷中期頃とでもしておけば、當らずといへども遠からず、といふ所と思はれる。型式名としては、この型式への過渡的なものとみられる圖65の器が二里岡から出てゐる所から、假に二里岡型と名づけておく。

(5) 終末型

二里岡型につづく型式といふものは、現在知られる遺物の中からは殆んど見出すことができない。

前節に提示した二里岡型と側飾の形が共通するが、本體が著るしく細長くなつた圖66のやうなものがある。細長く引伸されてはゐるが、本體の側縁の畫く曲線は二里岡型の特徴を持ってをり、やはり二里岡型に分類すべきものと思はれる。これ

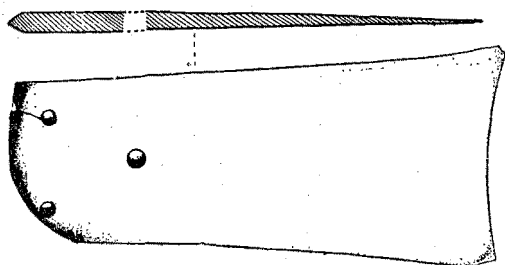


圖70 骨鏟形玉器 本體基部無境界型 四川廣漢
高駟公社出土 1/4



圖71 骨鏟形玉器 本體基部無境界型 長 21.7cm
Fitzwilliam Museum



圖72 骨鏟形玉器 本體基部無
境界型 陝西扶風上康村
2號墓出土 長 10.7cm

と似て細長いものに圖67のやうなものがある。本體と基部が側飾に接する部分で急に飛び出してゐて、いかにも圖66のごときものの隋落した形態といふ印象を與へる。殷後期頃にでも配されようか。

また圖68のやうに、本體と基部の幅に變化がなく、本體の側縁に殆んど曲りのないものがある。これも二里岡型の著るしく様式化したものと見られる。側飾は殷—西周の玉器によく使はれる型式のものが應用されてゐる。この側飾からみると、この器は西周も前期より少し降るものと考へられる。

圖69は山西省侯馬市、牛村古城の盟誓遺蹟の出土品。春秋後期のものである。同出の圭や璋と同様、本體の部分は一定の幅をもった板狀に作られてゐる。これがこの型式の玉器で現在知られる最も晚い例である。遺品は知られてゐないが、

西周以降もこの式の玉器の傳統が絶えてゐなかつたことが知られる。

(6) 本體基部無境界型

末擴がりの本體の端が凹狀の曲線を畫いた刃になつてゐる點は今まで見て來たものと變らないが、基部との境に段とか、突出した側飾のない、ノッペラした形の玉器がある。この方が骨鏟の原型をより良く留めた型式なのであるが、件數が少ないので最後にまとめて引いておく。

圖70は廣漢縣高駢公社で偶然發見された例。幅の割に長さが短かく、一方の側縁は殆んど眞直で反對の側縁は僅かに内彎してゐる點、同地發見の廣漢型と共通した特徴を持つ。玉矛、玉斧、松石象嵌の青銅飾と一緒に發見されてゐる。玉斧の側面の齒狀の飾りは小ぶりで間隔が廣い點、二里頭で圖35に引いた柄形器と同出した環狀斧⑤のものと特徴を共にしてゐる。先に廣漢型の年代を二里頭期頃と考へた。圖70が同出の玉斧と大體同じ時代のものとする、その側縁の曲線が廣漢型と特徴が共通してゐることも、ほぼ同時代であるから、といふことで説明がつくことになる。

圖71は側縁がかなり内彎してゐて、一方の彎曲が他方より強調されてゐる點、二里岡型と合致してゐる。同じ時分のものと見られる。

圖版17、測圖9は出光美術館の所藏品。側縁の線に殆んど曲りがない點、今まで見て來たものと相違があるが、長大である點、圖66、67と共通する。基部の割りこみの中にある齒は間隔が大で角張ってゐる點、圖版10の神木型のものを思ひ起させる。大體同じ頃のものとしておく。測圖9に見るやうにこの器は一面が平ら、一面が凸であり、平らな面は磨ガラス風で光澤がない。この點からみてこの器は第二章で引いた例と同様、二枚におろされたものとみられる。そして薄く殺がれたのが土中に埋まる前であつたことは、孔の基部寄りの所と、先端の刃の近くに石灰の沈着が僅かに認められ、その周邊に石灰を落したあとの残ることによって證せられる。

なほ割りこみの中に齒のある、これとよく似た例は他に一例知られる。⑥

圖72となると全く幾何學的な形に簡略化されてゐる。扶風上康村二號墓の發見で、伴出の青銅器は西周中期のものである。⑦この玉器も同じ頃のものと見られよう。こ

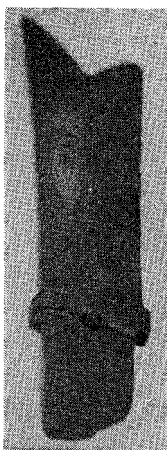


圖73 骨鏹形玉器 福建漳浦眉力出土

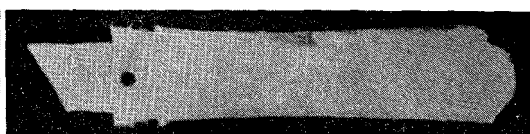


圖74 骨鏹形玉器 廣東省出土 廣東省博物館

の例はこの型式の器で今日知られる一番早い時期のものである。

(7) その他

その他、地域が遠く離れるが、福建省南部、漳浦眉力から圖73のやうな、側飾が入念に作られた石製品が出てゐる。曇石山上層類型に屬し、年代は西周頃とされてゐる。⁶⁶ 型式は廣漢型、神木型と平行するものである。今の所この器に當てられた年代の當否を判斷する材料を持合さない。廣東省出土のこの型式の器の石製品も陳列品中で見たことがある(圖74)。これの年代についても後考にまきたい。

七 薄く挽き切られた骨鏟形玉器の年代的位置づけ

第二章で引いた、薄く挽き切られた骨鏟形玉器の中に廣漢型のものはない。⁶⁷ 同章で引いた圖版10が神木型であることは先に神木型の節で記した通りである。この神木型の年代についてはその節で記さなかった。その問題については今のところ直接的な證據が見出されないため、狀況によって大凡のところを考へる他ないのである。神木型の本體の形が大體廣漢型に近いことは先に記した所である。四川盆地の廣漢と陝西省最北部の神木とは直線距離で千キロ餘りも離れてゐるにもかかわらず、兩地の骨鏟型玉器が本體の形においてよく似てゐることはどう考へるべきであらうか。側飾の形や、基部の幅の本體の幅に對する比率において兩者に相違があることは、例へばこれらが河南省で作られて兩地に配分された、といふやうな解釋を排除する。一方、前章(3)節に記した二里頭期頃に文化中心地域で作られたと考へられる骨鏟型玉器も、本體の形の特徴——上の側縁は殆んど直線に近く、下の側縁はやや彎曲する——は、全體にかなり細長くなったものがある

とはいへ、廣漢型や神木型にも通じ、また前章(4)節に引いたごとく、神木型と近いらしい船型の側飾は二里頭型と二里岡型の過渡的な形態を持った骨鏟型玉器につけられてゐる等、神木型と文化中心地域の二里頭型も没交渉であったとは考へ難いのである。研究の急速な發達により近頃では仰韶文化に始まり、龍山文化から二里頭期に至るまで、北は內蒙古南部から南は四川盆地をも含めた揚子江流域まで、平行した文化發展がたどられることが認識されるに至つてゐる。このことを顧慮すれば、玉器の形態においてこの程度の近似性があることは、地理的な懸隔にもかかはらず、當然あつて然るべきことであると考へられよう。このやうに考へることによつて、神木型の年代も大體二里頭期頃といふことが推定されるのである。

次に白鶴美術館藏の圖版9の器であるが、この器は側飾が逆梯形をなす點、圖版10の神木型とは異なつてゐる。これと同様に、小口を磨り窪めた逆梯形の側飾は、先に引いた圖58に見られる。圖版9の方は逆梯形の突出が大小一對で組になつてゐるのに對し、圖58の方は本體寄りの方の突出が小型の簡略化されたものになつてゐるといふ違ひがあるのであるが、兩器とも本體の先端の部分が失はれてゐるが、その兩側の控え目な曲線はよく似てゐる。先に圖58の器を二里頭型の一類と考へた。圖版9の白鶴美術館の例も、同じ時期のものと考へて差支へなからう。

次に同じ白鶴美術館の圖版8であるが、この器の本體の側縁の曲線は他のものと少し異なり、先に二里頭から二里岡への過渡期のものと考へた圖65とよく似てゐる。この圖版8の器の側飾について、先にこのやうな形は他に例がなく、恐らく薄く挽き切る作業によつて齒狀の突起が傷んだので磨りなほしたのではないかと考へた。ここでこの磨りなほされた側飾をもう一度よく見てみると、上側のもの、本體寄りの内反りの曲線は、先に見た圖版5、圖42—44の、あの二里頭型の削りこみの曲線の一部であることに氣付く。ここを磨りなほす作業は、この玉器を薄く挽き切る作業に引き續いて行はれたと考へられるが、それを行ったのは二里頭期頃の文化中心地域の工人だったのである。

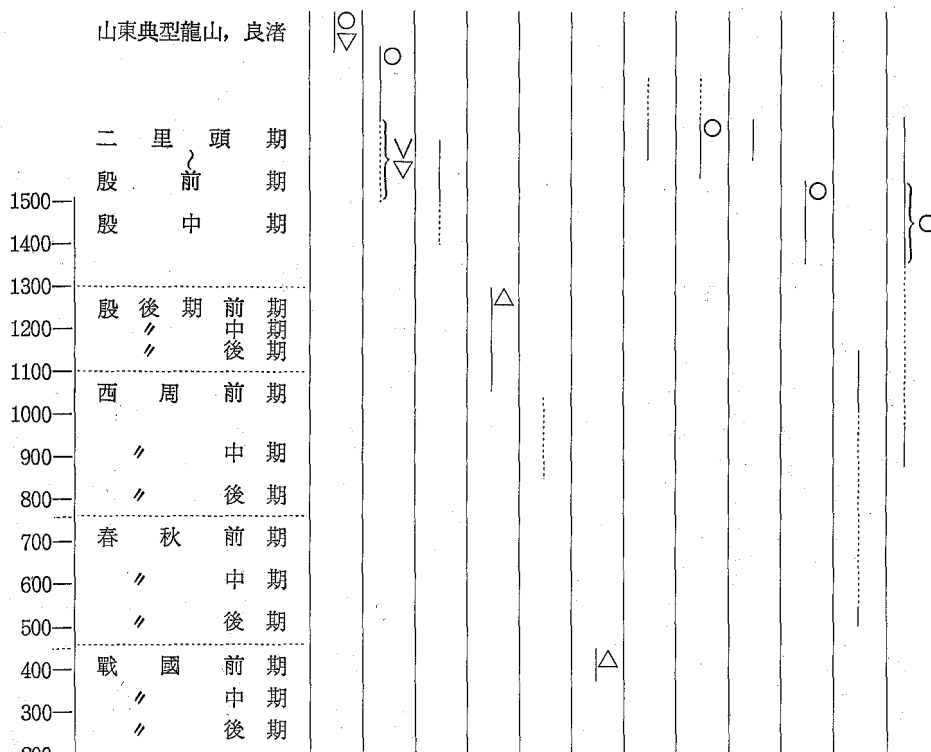
次に薄く挽き切られた骨鏟型玉器として最初に引いた圖3であるが、これが本體の形、側飾の特徴からみて二里頭型に屬することは改めて説明するまでもなからう。⁵³一方圖版7の方は本體の側縁のかなり目立つた内彎の具合から二里岡型の段階に分類される。この器は本體の基部寄りの所、平行線紋が加へられた部分の側縁にほんの僅かな尖りが出てをり、これが薄く挽き切られた時に擦り切り作業によって殆んど失はれてしまった齒狀の突起の殘存と考へられることは先に記した所である。この部分に齒狀の飾りがあるものといふと、神木型が思ひ起される。然し基部が神木型ほど幅廣くない。或ひはその型のヴァリエーションと見られようか。

本體の形の特徴、側飾の突出部の形において二里岡型と認められ、しかも二・三ミリ程度と極めて薄く、挽き切った時の切り口の喰ひ違ひの痕が残ってゐるものは、前引の他に幾つか例があるが、一々引かない。⁵⁴他に圖版17に引いた本體基部無境界型も前記のやうに神木型の一類と考へられるものである。

八 夏王朝、殷王朝早期、中期においてこれらの玉器の演じた瑞玉としての役割

以上、七章にわたって薄く挽き切られた石庖丁形玉器と骨鏟形玉器の存在、その年代的位置づけについて明らかにして來た。それを表の形で示すと表1のごとくになる。⁵⁵表の形にするとよくわかるやうに、石庖丁形玉器を薄く二枚に挽き切ることが典型龍山文化、良渚文化から二里頭期に行はれ、骨鏟形玉器については同じことが二里頭期から殷中期に當る遺物についても見出される。また表一には表はされてゐないが、この種の玉器は河南省北部、山西省南部といった、中國文化の中心地域ではない所で作られ始めたものが、二里頭期になって文化中心地域でこれに倣って作られ始めてゐることも忘れてはならない。そして石庖丁形玉器については、既製の一枚の玉器を二枚に挽き切るのではなく、始めから一枚の玉材

石 庖 丁 形 玉 器						骨 鏹 形 玉 器					
不對稱太短型	不對稱細長型	近似對稱細長型	不對稱孔細長型	近似短冊型	無孔型	廣漢型	神木型	二里頭型	二里岡型	終末型	本體基部無境界型



(B.C.)

表 1

- — 薄く挽き切られたものあり
- △ — 二枚一組
- ▽ — 二枚一組の片割れあり
- ∇ — 割り込みをつける

から薄手のもの一組を切り出した型式が、殷後期から西周前期頃に作られ、途中の例はないが、恐らくその傳統を引くと思はれるものが戰國前期の墓から一例知られてゐる。一方骨鏟形玉器では石庖丁形玉器のやうに始めから二枚一組のものが作られた證據は今のところ知られず、殷後期から西周前期頃の遺品は非常に少數となる。それでもこの型式の器の傳統も細々と續いたと思はれ、春秋後期にその後裔が一例知られてゐる、といふわけである。

ここに明かにされた事態はどう解釋すべきであらうか。骨鏟形玉器にしても、石庖丁形玉器にしても、農具を原型とするものであるから、本來は農耕、收穫儀禮に使はれたものであったに相違ない。然し我々の見る遺物は既に耕起や收穫の作業には使ふことができないものに變化してしまつてゐる。骨鏟形玉器の刃はあまりにも薄く研がれてをり、側飾は極めてデリケートである。また石庖丁形玉器も收穫に使ふにはあまりにも大きすぎる。石庖丁形玉器には、實用の石庖丁には不必要な長軸中心線上の一孔が加へられるものがあり、手に持った時にとり落さないために手を通す紐をつけるためのものと解せられ、同じ性質の孔は骨鏟形玉器にも穿けられてゐる。これらの玉器は實際に作業を行ふための道具から、儀仗的に携帯するためのものに變つてゐるのである。それでは何のために携帯されたか。このやうな立派に作られた上等品であるから、例へば携帯者が農民であることを示すためのものなどであるはずはなく、農耕儀禮——後世の耜田のやうな——の主役であることを示すものであった、と考へるのが自然である。このやうな大型の玉器を作るには大きな玉材を使ひ、多くの勞働力と優れた技術をもつた工人を必要としたことはいふまでもない。かういふものを作らせることができたのは、原初的な村落共同體といったものを遙かに超えた、大きな——どの程度の規模であるかについては今推測し難いが——組織をバックにした者であつたに相違ない。假にこれを地域首長と呼んでおかう。

石庖丁形玉器、骨鏟形玉器はこれら地域首長の權威の象徴であつたと考へられるが、厚さ數ミリの堂々たる玉器を、無残にも二枚に挽き切つて薄っぺらにしてしまひ、切り口はそのまま放置するといふやうな亂暴をやつたのは誰か。答へは

遺物そのものに極めて明瞭に象徵されてゐる。その玉器の持主を臣屬させ、首長としての權威の半分をとり上げた者である。玉器は簡單には半分に切れない。臣屬させるについては實際に行はれたのは次のやうなことであったと思はれる。即ち玉器の持主であつた地域首長は力づくで屈服させられ、大事な權威の象徵である玉器はとり上げられる。屈服させた者は玉器を工人に渡して挽き切らせた上、半分は自分の所に保留し、半分はもとの所有者に返す。その際ただ返すのではなく、地域首長としての權威を自分の手から改めて授與する、といふ形で返してやった——それももとのままの完全な形をもつてでなく、相當部分を自分の手許に留保した上で——といふことである。遙か後世、漢頃になつて割符的なものとして諸侯に定期的に王の許に持つて來させ、王の手許にあるものと符合させ、行ひに誤ちがなければ返してやる、と傳へられてゐる瑞玉の起原は、かういふことであつたに相違ない。

表一にみるやうに、半分に挽き切られた地域首長の瑞玉は典型龍山から殷中期迄に年代づけられる。この形での征服統屬活動がこの時期に行はれたことが知られる。⁶²

二里頭期には、不對象細長型の石庖丁形玉器に弧形の削りが入れてゐる。先に證したやうにこの削りこみを入れたのは、玉器の作者とは別の人間であり、それは二里頭期の文化中心地域の者である。前記の玉器を二枚におろした話からの類推で、二里頭期の文化中心地域の人達による地域首長の征服の結果、首長の持つてゐた石庖丁形玉器が取り上げられ、征服者の目印としてこの細工が加へられたと考へられる。この削りこみを加へた石庖丁形玉器が、今度はまた二枚に挽き切られてゐる。別に新たな征服者の出現を推測せしめる事實である。

石庖丁形玉器も骨鏟形玉器も二里頭期から殷中期に文化中心地域で模倣され始める。殷後期頃になると既製の石庖丁形玉器を二枚に挽き切るのではなく、始めから一つの玉材から二枚一組のものが切り出された例も知られる。地域首長から權威の象徵の玉器を取り上げて二枚に挽き切るといふやり口が過去のものとなり、王は始めから自分の所で二枚一組の玉器

を作っておいて、その一方を授與し、一方を手許におくといふ便宜的な形に變化して來た、と解釋されよう。このやうな形での權威の象徴の授與が、いつ頃まで實際に機能してゐたか、遺物の方から確かめるだけの材料が今の所ない。然し、西周時代の青銅器銘文中の地域首長任命の記事の中に、玉器授與が缺如してゐることは確かである。その頃にはこれが重要性を全く失つてゐたことは疑ひない。然し何等かの全く形式化した形でもこの傳統が長い年月の間存続してゐたらしいことは、無孔型の石庖丁形玉器一對が戰國墓から發見されたことから想定してよいのではなからうか。

さて、右の概括においては、問題の象徴的玉器を挽き切った者の朝代の所屬が未だ入れてない。不對稱形細長型の石庖丁形玉器の一端に刳りこみを入れたのが二里頭文化の人であつたことは先に記した所であるが、二里頭文化がどの王朝に屬するかについては諸説がある。

二里頭文化は一、二期に分けられてゐるが⁽⁶⁾

(1) 一―四期を夏とする説⁽⁶⁾

(2) 二里頭文化とそれに先立つ河南龍山文化を夏とする説⁽⁶⁾

(3) 河南龍山文化、二里頭一、二期を夏、三、四期を殷とする説⁽⁶⁾

(4) 二里頭一、二期を夏、三、四期を殷とする説⁽⁶⁾

(5) 殷は二里頭四期からとする説⁽⁶⁾

(6) 二里頭全期を殷の早い時期とする説⁽⁶⁾

が擧げられる。その内(1)説で鄒衡氏が二里頭期を夏とし、鄭州の殷遺蹟を殷とするに當つては、殷の湯王が夏を滅ぼして最初の都とした亳が鄭州である、とする鄒氏の地理考證が大きなポイントとなつてゐるのである。⁽⁷⁾然しその考證に對しては有力な反論があつて從ひ難い。⁽¹⁾また(3)説で河南龍山文化が夏に入るといふのについては、その文化の晩期に當る臨汝煤

山第一期のカーボン・デイトーピングの年代が文獻に残る夏の年代の範囲内に入る、といふことが根據となつてゐるのであるが、^②そもそも半傳説的な夏の總年を、同じく概數としてしか知られない殷の總年に足すことによつて算出された夏の年代に、全く別な方法によつて測定された遺蹟の年代を當てはめ、その所屬朝代を決めようといふのは、凡そ科學的な方法の觀念を缺く考へ方といふ他ない。

筆者はこの問題について次のやうに考へる。即ち、偃師二里頭遺蹟が西亳、即ち殷の湯王が夏を滅ぼして最初に都した所だとする考證は妥當と考へる。さうすると、二里頭の一―四期の内の後の方が殷に入ることには確かである。二里頭期については二期と三期の間あたりに土器の型式において斷絶があり、三、四期のものは二里岡のものにながつてゆくと思われる。^③王朝の交替がどの程度の早さで遺物の型式に反影されるものかについては現在のところ十分に確かめられるには至つてゐない。然し例へば殷、周の青銅器についていへば、朝代の變化をその形態から判定することは例外的な場合の他は大體可能である。このことから類推して、二里頭遺蹟において夏と殷の交替があつたことが確かとすれば、その交替は二期と三期の間頃とみる他ないと考へる。

以上、現在のところでは二里頭の二期と三期頃に夏と殷の王朝の交替があつたと考へるのが妥當な考へ方であることが明かとなった。先にこの章の始めの方で、石庖丁型玉器を薄く二枚に挽き切ることが典型龍山文化、良渚文化から二里頭期に行はれた、と概括したが、ここに朝代の名を使って、そのやうなことが先夏から夏代に行はれた、といふことが出来ることになったわけである。また不對稱型石庖丁の峰の一端に弧形の削りこみを加へたものがあり、それが二里頭期に行はれたものであることは先に記した通りであるが、この細工は夏か殷かいつ行はれたものであらうか。これについては、削りこみを加へたものが、更に薄く二枚に挽き切られてゐる例が参考にならう。このやうなものについてはかう考へる他ないのであらうか。即ちこの二枚に挽き切る細工は、二里頭期の半ばに夏を殪して天下をとつた殷王朝の仕業であり、

またその一つ前の段階で、不對稱細長型の石庖丁形玉器をとり上げて割りこみを加へたのは夏王朝の仕業である、との考へ方に誤りがなければ、何等二次的な加工の加へられてゐない石庖丁形玉器を地域首長からとり上げ、それに割り込みを加へた者の中には、夏王朝に屬する者があつたことが知られることになる。

骨鏟形玉器を薄く挽き切ることは、先にも記したやうに二里頭期から殷中期に多く行はれてゐる。この二里頭期と言つた中には夏も入れてよいであらう。石庖丁形玉器だけは夏において薄く挽き切られ、骨鏟形玉器の方にはそれが行はれなかった、と考へることも困難と思はれるからである。

從來、夏については王朝についての傳説、そこに出てくる地名によつて實在が想像されてゐたのが、二里頭文化發見以後、この文化の土器その他の遺物の分布の擴がり、カーボン・デイトイングによる年代の測定によつてその存在が現實的なものになってきてゐることは言ふまでもない。然し今までの所二里頭期の遺物や宮殿址が、夏に屬するのか殷の早期に屬するののかについては前引のやうに諸説があり、更に夏といふ國が、何等かの規模の統一的な行政組織として存在したことを證するものは從來全く知られてゐなかつたのである。筆者はこの石庖丁形玉器、石鏟形玉器の研究によつて、始めてこれらの玉器を媒介として行はれた夏及び殷の早い時期における地域首長統制のからくりを明かにすることに成功したと考へる。

ここにとり上げた玉器に關聯して、夏王朝について注目すべきことが他にもある。それは夏王朝の勢力の及んだ範圍に關してである。第四章(2)節に記したやうに、石庖丁形玉器の原型となつた實用の石庖丁は、河南、山西等の夏の傳説及び二里頭文化の分布の重複する地域⁷⁵に見出されず、揚子江下流、山東等にあり、従つてそれらを原型とする玉器を權威の象徴として所持してゐた地域首長も、この方面の者であつたと考へられる。これらの地域は從來二里頭文化乃至その系統の文化が缺如し、夏の領域とは考へられてゐなかつた地域である。⁷⁶然るに玉器の證によつてこの地域が夏の勢力下に入つて

ゐることが推論されるのである。

また骨鏹型玉器も現在知られる出土地が四川中部の廣漢、陝西北部の神木とかけ離れた地域であることにも注目する必要がある。廣漢型には薄く挽き切られた例が知られないが、神木型にはそれがある。鄒衡氏は神木のあたりも光社文化、即ち大體殷文化平行の山西省の地方文化の分布地に入れてゐる。⁷⁷然し文化の系統の同一と政治勢力の及んだ範圍とは一應別問題である。この種の玉器の出土によって、夏から殷中期の時代に、これらの王朝の支配がこのやうな邊境にも及んでゐたことが證されるのである。

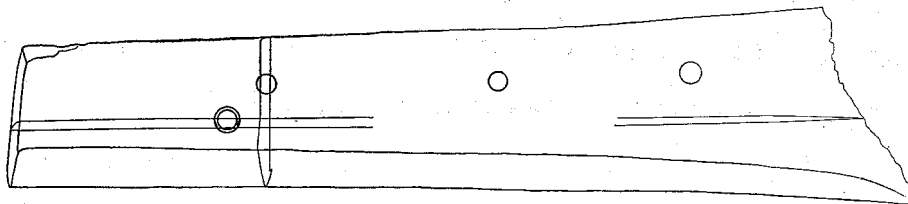
揚子江下流域では玉器の製作は青蓮崗文化の末に始まり、良渚文化に盛んになる。璜や腕輪などの裝身具、逆梯形器やD字形器など器物にとりつける飾りの他、玉斧、璧、琮などの後世の所謂瑞玉の類も作られ、琮には人面形が刻まれる。⁷⁸璧は徑二・一センチ餘の大きなものも出てをり、琮は高さ一八・五センチのものが知られ、⁷⁹玉材を切り出す技術は既に高度なものとなつてゐる。

これと對應して山東省でも山東典型龍山文化に玉器製作の技術が發達し、觚その他の裝身具類の他、厚さ三ミリ弱といつた薄手の實用の玉製利器も作られる。⁸⁰また良渚文化では人面等の圖柄は線刻ないしはせいぜい淺い半肉彫りに刻まれるのに對し、山東では地を平らに磨り窪め、人面や猛禽形などを細い凸線で彫り殘すといふやうな技法が使はれる——このやうな手間のかかる技法は殷にも西周にも、これ以後長く使はれることなくなるものである。手の込んだ青銅彝器の未だ知られないこの時期、多大な勞力と最高の技術が玉器の製作に注ぎ込まれたものと見受けられる。この勞働力と技術者をかかへてゐたのは、當然地域首長であつたに相違ないが、この玉器製作技術の高い水準があつたからこそ、玉器が瑞玉として政治の世界で活躍することが可能になつたのである。例へば既製の石庖丁形玉器を更に二枚に挽き切るといふやうなことは、我々にとっては困難な作業と思はれるが、當時の技術者にとっては造作もないことだったのである。

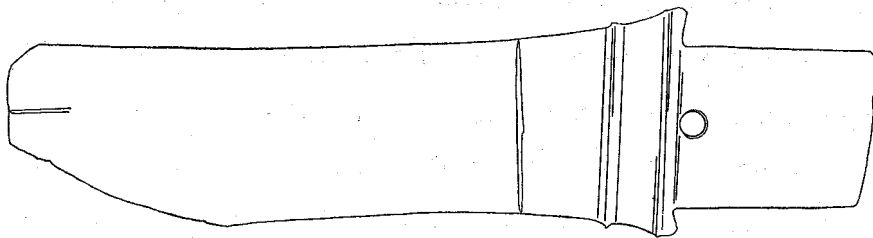
さきに筆者はフリア美術館蔵の玉製腕輪を紹介し、その一側には山東の大汶口文化の甕に刻まれてゐた圓と角の出た三日月の記號が、その對ひの側には浙江省の河姆渡文化の所謂蝶形器に由來する逆梯形器形の記號（時期は良渚文化）が刻まれてゐたことを解説し、これが兩地の、これらの記號を旗印とする者を兼併した首長の持物だったのではないかと考へた^②。また同じくフリア美術館蔵の玉璧には盾形に鳥の棲った形の記號があるが、別に筆者が證したやうにこれも良渚文化に屬し、その記號の中に山東の大汶口文化の甕の記號に見出される所謂五峰形や、同じ所に見出される圓と角の出た三日月形の要素のヴァリエーションをその構成要素として含んでをり、この方は山東と揚子江下流の兩地の記號の合體と解されるのである^③。さきに一五頁、二四頁に圖6の石庖丁形玉器について、そこに人頭や四足獸形を彫り、齒狀の裝飾を刻み出した山東典型龍山文化の人間は、この原の器を良渚文化から入手したと考へたのであるが、これも平和的手段によって入手したのではなく、良渚文化に屬する地域首長を征服し、その首長の持物であつたこの權威の象徴たる石庖丁形玉器をとり上げ、新たに自らの神の像を刻ませた、といふやうに解することもできる。この例の方は少々不確かとしても、龍山文化の晩い段階において、山東と揚子江下流域といった廣い地域にまたがって、文化の傳統を異にする者の間で、地域首長の兼併、統一が進行してゐたことは、記號を刻んだ玉器によって知られるのである。

右に記したやうな、龍山文化の晩い時期における、何等かの歴史的な事件の記録の媒體としての玉器の使用の傳統を頭におけば、夏王朝が地域首長の服屬過程で、後世に言はれる瑞玉の形で玉器を使用したのもその傳統の延長線上にあることとして理解されるのである。

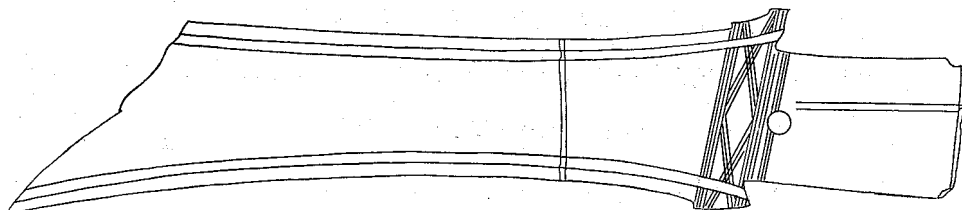
ここにとり上げて論じたやうな型式の玉器は殷後期になると遺品が急に稀少となつてゆくやうである。二里頭期に始まる青銅容器鑄造は、殷後期になると器種、紋様の種類とも急速に増加し、分量も劃期的に多くなる。西周時代の銘文によつて、王から臣下に對する祭政の權の分與が青銅器の鑄造によつて記念されてゐることが知られる。これは恐らく殷後期



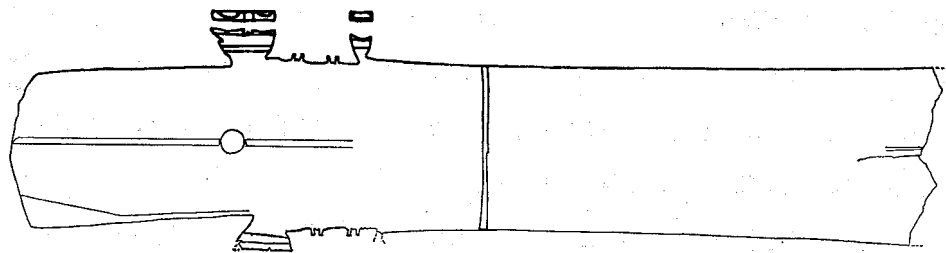
測圖1 石庖丁形玉器 白鶴美術館 (圖版4參照) 2/5



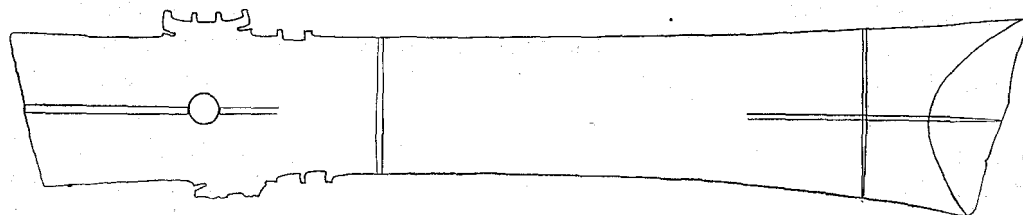
測圖2 骨鏟形玉器 出光美術館 (圖版7, 圖4參照) 2/5



測圖3 骨鏟形玉器 白鶴美術館 (圖版8參照) 2/5

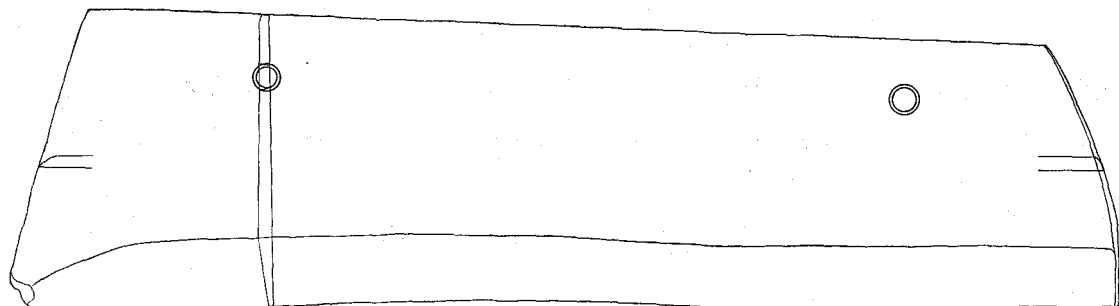


測圖4 骨鏟形玉器 白鶴美術館 (圖版9, 圖5參照) 2/5

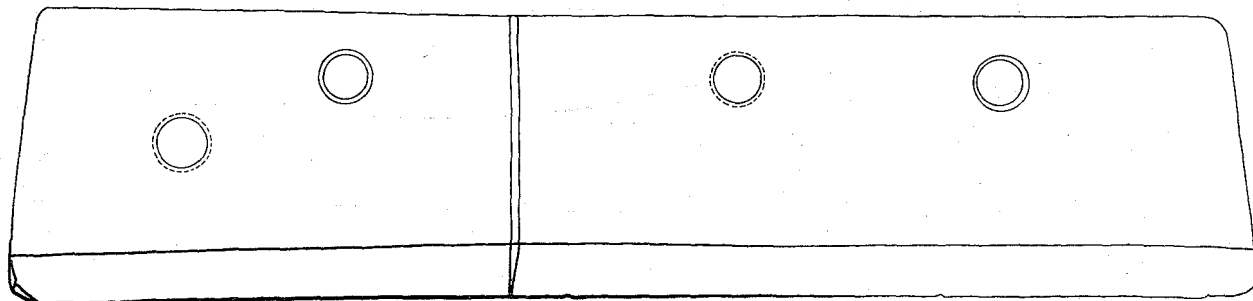


測圖5 骨鏟形玉器 白鶴美術館（圖版10参照）

2/5



測圖6 石庖丁形玉器 天理参考館（圖14参照） 2/5



測圖7 石庖丁形玉器 東京國立博物館（圖版15参照） 2/5

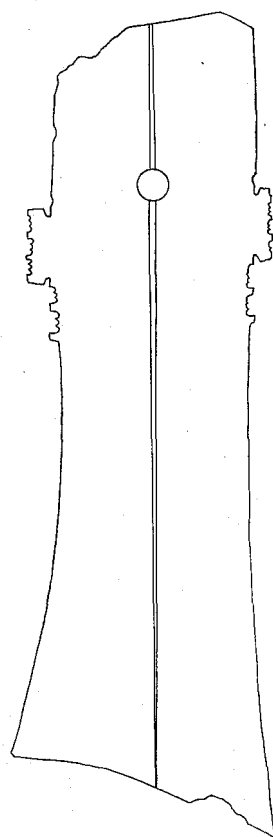


図8 甬鏡形玉器 (圖56参照) 2/5

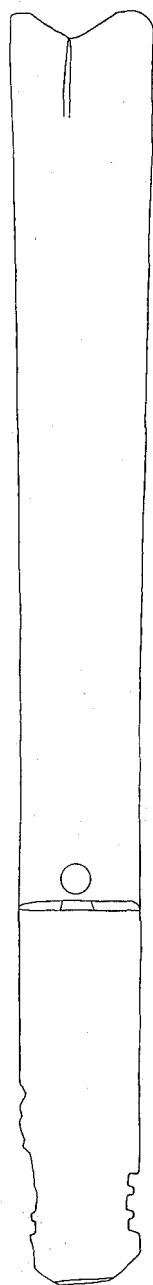


図9 甬鏡形玉器 王光養堂藏 (圖版17参照) 2/5

の青銅容器の發達と共に始まったことと考へられる。それと同時に、それを玉器をもってする風は急速に衰退に向った、といふのが、極く大づかみの形勢ではないかと考へられるが、その邊についてはまた別の機會に論ずることにしたい。

注

- (1) 林一九六九、二六九—二七二頁
- (2) 同右、二六三—二六九頁
- (3) 同右、二七二頁、二六八—二六九頁
- (4) 同右、二四九頁
- (5) 郭一九四八、四〇頁
- (6) 今の目からみると、伴出の青銅壺は紋様から判斷して前四世紀前半としないならぬ。
- (7) 寫眞は合せた時の表側ばかりが寫つてゐるので、それ程よく合ふとは見えない。それでも大まかな特徴では合致してゐることが知られよう。
- (8) 『周禮』小宰の傳別、鄂君啓節(殷、羅一九五八)等参照。
- (9) 發掘者の一人、澄田正一氏の御好意で檢分の機會をえた。
- (10) なほこの石庖丁形玉器の孔は甬形をしてゐる所が特異であるが、このやうな孔は神木縣出土の同形玉器に例がある(戴一九七七、圖二、3)
- (11) 一九八〇年六月、口頭の意見。

- (12) Loehr 1975, no 228 もこれと近く。
- (13) 林一九七九、五一六頁。圖6の右側縁の部分の人頭には後方に向つて植物の卷鬚狀の曲線をもつて構成された飾りが附くが、これと同様な紋様は日照兩城鎮發見の黑陶、石斧の刻紋に見出され(上引、圖11-12)また圖6の上下、左側縁の部分に刻まれた四足獸の背に附くのと同様な一種の羽紋も同地の黑陶の刻紋にある(上引、圖12、13)。
- (14) Dohrenwend 1975, Fig. 11, Fig. 30, 殷後期または西周早期と年代づけられてゐる(同五九頁)
- (15) 林一九八一、圖1b、圖16
- (16) 劉一九五八、二九一三〇頁
- (17) 幅廣い割に長さが短かい點がこれと近いものとして他にも一つブリティッシュ・ミュージアムの藏品がある(Reg. no. 1937 4-16 3)
- (18) Lauffer 1912, pp. 39-40
- (19) 安一九五五
- (20) 石毛一九六八
- (21) 石毛前引、上、一三一—四頁
- (22) 注(15)参照。
- (23) Loehr 1975, no. 210, 209
- (24) この器の存在についてはフォッグ美術館の Robert W. Bagley 氏の教示をえた。
- (25) Reg. no. 19. 60 この器で刻線紋が一方の端だけにしかないのは、反對側が折れて失はれ、その側が磨りなほされてゐるためである。
- (26) 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七五、三〇六頁
- (27) 同右、圖版八、1
- (28) これとよく似た器は Hansford 1948 Pl. 3, 16 にもある。
- (29) Dohrenwend 1971, p. 64
- (30) 例へば圖版6後引のブリティッシュ・ミュージアムの藏品。
- (31) 陳一九五七、七八頁、圖版一一、12

中國古代の石匱丁形玉器と骨鏹形玉器

- (32) 黃、張一九八〇、一一三—四頁
- (33) 短い側邊、及びそれにつづく峰のあたりは玉材に規制されて、あるべき形とは外れた形になってゐると思はれるので、この側三分の一の部分の形は考察の對象外とする。
- (34) 林一九七九、九頁
- (35) 劉一九五八、二九頁
- (36) 同右、三〇頁
- (37) 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、圖版五、8。割りこみの左右兩側で曲線がひどく違ふ。
- (38) 林一九六九、圖版一、故宮博物院一九七四、六
- (39) 石毛一九六八、上、一三六頁及第五圖。
- (40) Fong 1981, p. 76.
- (41) 他に同様な例として Salmons 1952, Pl. 26, 1; Willetts 1965, Pl. 29
- (42) 林一九七九、五一六頁
- (43) 馮、董一九七九、三一頁
- (44) 同右、三五頁
- (45) 林一九七二、一五九—一六二頁
- (46) 同右、一七一—二頁
- (47) 中國科學院考古研究所一九六五、圖版五、14
- (48) 報告書(戴一九七七)の實測圖は圖が小さいためもあって側飾の描き方が不完全である。寫眞は切り抜きがいい加減であるが、部分的に原形が残つてゐる。この圖は兩者の正しい部分を使つてなるべく正しく復原して描いてある。
- (49) Loehr 1975, no. 228
- (50) Loehr 1975, no. 219, 226, 227
- (51) これと近いものとして他にフリヤ美術館の藏品(16. 369)がある。
- (52) 江村一九七八、九二頁
- (53) 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六、圖版六、上

- (54) Loo 1950, Pl. 6, 5
- (55) 陝西省文物管理委员会一九六〇、圖版二、4、7
- (56) 曾一九八〇、二八一頁
- (57) 薄く挽き切られた玉器の存在に注目したのは最近のことなので、ただ未だ管見に觸れないだけであるのか、實際にないのかについては確言することができない。
- (58) 他に類例として東京國立博物館蔵のものがある（登録番號三一八九三）側飾は缺失してゐるが、本體の形から二里頭型と知られる。一面はやや中高であるに對し、その裏面は上下から挽き切られた際の切り口のずれの痕が残り、光澤がやや鈍い。
- (59) Loehr 1975, no. 223, 224, 225; Pelliot 1925, Pl. 7, 1
- (60) 石盾丁形玉器は形態によつて、また骨鏹形玉器は發見地によつて夫々型式を命名してあるので、思ひ違ひをしないやう注意しておく、石庖丁形玉器は神木縣からも發見されてをり、兩者は必ずしも製作・使用地域において截然と振り分けられるといふわけではないのである。
- (61) 『尙書大傳』に「古者圭必有冒、言下之必有冒、不敢專達也、天子執冒以朝諸侯、見則覆之、故冒圭者、天子與諸侯爲瑞也、諸侯執所受圭、以朝于天子、瑞也者屬也、無過行者復得其圭、以歸其國、有過行者留其圭。能改過者復之……」と。林一九六九、二九九—三〇二頁參照。
- (62) 近時良渚文化に屬することの知られるに至つた金剛山隅圓菱形の大きな目を持った人面、及び眉、鼻を平行する直線的な突帯に簡略化した小さな目を持った人面（林一九八一、圖5、6）を一つの琮に上下に重ねて表はした珍しい遺物があるが（Loo 1950, pl. 35, 2）、これについて解説に「これはもとの琮の半分である。切り口の變色は、この切り分けが何百年も昔に行はれたことを示してゐる」と記される。残念ながら未だ實物を見る機會をえないが、象徴的な玉器の切り分けが行はれたのは、この論文に引いた類に留まらなかったやうである。更に他の關係資料にも注意してまた別の機會に考察を加へたい。
- (63) 鄒一九八〇、一二九—一三三頁
- (64) 北京大學歷史系考古教研室商周組一九七九、六頁。鄒一九八〇、第三篇がその代表。又鄒前引、一〇四頁、注②參照
- (65) 鄒一九七九、注⑩所引論文（未見）
- (66) 楊一九八〇
- (67) 殷一九七八
- (68) 孫一九八〇
- (69) 鄒一九八〇、一〇四頁、注①參照
- (70) 同右、第四篇
- (71) 石一九八〇
- (72) 楊一九八〇、二〇頁
- (73) 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、二三三頁—四頁
- (74) 飯島一九七七—八一、(7)、三二頁。楊一九八〇、一八一—九頁。鄒一九八〇、一三一—二頁。
- (75) 一九八〇、第五篇
- (76) 同右、一五八頁の向ひの圖一
- (77) 同右、二七一—四頁。二五八頁の向ひの圖一
- (78) これらは筆者の命名。林一九八一、圖七一〇、一三一—七參照
- (79) 南京博物院一九八〇、四五頁。吳一九八〇、九二頁。南京博物院一九八〇a、九九頁。南京博物院一九八〇b、一〇—一三頁。
- (80) 注(77)最後のもの。
- (81) 劉一九五八、二九頁及圖四、10
- (82) 林一九八一
- (83) 林一九七九a、一五—八頁

圖版出所目錄

- 圖版1 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 13)
- 々 2 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16. 163. 1)

- 圖版3 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16, 167)
 〃 4 京都大學人文科學研究所 (以下京大人文研と略稱) 寫眞
 〃 5 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16, 160)
 〃 6 京大人文研寫眞 (Museum für Ostasiatische Kunst, Köln, inv. no. H 30, 1)
 〃 7 京大人文研寫眞
 〃 8 〃
 〃 9 〃
 〃 10 〃
 〃 11 メトロポリタン美術館寫眞
 〃 12 〃
 〃 13 サックラー・コレクション寫眞 (Reg. no. J-2)
 〃 14 京大人文研寫眞
 〃 15 〃
 〃 16 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943, 50, 115)
 〃 17 京大人文研寫眞

圖版出所目錄

- 圖1 郭一九四八、圖版六
 圖2 筆者圖
 圖3 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16, 162, 2)
 圖4 京大人文研寫眞
 圖5 〃
 圖6 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 18, 1)
 圖7 サックラー・コレクション寫眞 (Reg. no. J-6)
 圖8 劉一九五八、圖四、13
 圖9 Loo 1950, pl. 5, 4
 圖10 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 17, 62)

- 圖11 ブリティッシュ・ミュージアム寫眞 (Reg. no. 1937 4-16 4)
 圖12 フィールド・ミュージアム・オブ・ナチュラ・ヒストリ寫眞
 圖13 戴一九七七、圖版四、1
 圖14 京大人文研寫眞
 圖15 上、劉一九七二、圖三、下、同上を筆者改作
 圖16 (1) 中國社會科學院考古研究所山西工作隊一九八〇、圖四、2
 圖16 (2) 東下馮考古隊一九八〇、圖七、3
 圖17 (1) 李一九四八、挿圖二、1
 圖17 (2) 同、挿圖二、3
 圖17 (3) 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五八、圖一七
 圖17 (4) 同、圖一九
 圖17 (5) 河南省文化局文物工作隊一九六一、圖一、2
 圖17 (6) 河南省文化局文物工作隊一九五九、裏表紙裏、1
 圖17 (7) 河南省文化局文物工作隊一九六六、圖版一、16
 圖17 (8) 安陽地區文物管理委員會一九八〇、圖六、12
 圖18 (1) 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七四、圖四、9
 圖18 (2) 中國科學院考古研究所一九六一、圖三、6
 圖19 (1) 河南省博物館一九七三、圖一三、8
 圖19 (2) 黃河水庫考古工作隊河南分隊一九六〇、圖一〇、1、2、4、8
 圖20 (1) 李一九五二、圖版九、九一二
 圖20 (2) 河南省文化局文物工作隊一九六〇、圖版三、6、7
 圖21 (1) 山東省博物館、日照縣文化館東海峪發掘小組一九七六、圖一、11
 圖21 (2) 山東文物管理處一九六〇、圖二、11
 圖21 (3) 劉一九五八、圖四、2、8
 圖21 (4) 昌灘地區文物管理組、諸城縣博物館一九八〇、圖三四、12、13
 圖21 (5) 中國科學院考古研究所山東工作隊、曲阜縣文物管理委員會一九六

- 五、圖六、18
圖21、(8) 同、圖版二、6
圖21、(9) 中國科學院考古研究所一九六五、圖六、1
圖21、(10) 山東大學歷史系考古學專業一九八〇、圖二、9
圖21、(11) 山東省博物館、日照縣文化館一九七六、圖一、10
圖21、(12) 山東省博物館、山東文物管理處一五五九、圖4
圖22、(1) 尹、張一九六二、圖版八、7
圖22、(2) 浙江省文物管理委員會一九六〇、圖版五、3
圖22、(3) 浙江省文物管理委員會一九六〇、圖版一、3
圖22、(4) 蔣一九五八、圖版一、8
圖22、(5) 山東省博物館一九六三、圖二、4
圖23 Nott 1962, Pl. 13
圖24 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 60)
圖25 Pelliot 1925, Pl. 11, 2
圖26 京大人文研寫眞
圖27 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 29)
圖28 ブリティッシュ・ミュージアム寫眞 (Reg. no. 1945. 10-17. 144)
圖29 中國科學院考古研究所一九七五、圖版八、9、圖四、10
圖30 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 50)
圖31 濱田一九二五、圖版八、12
圖32 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 49)
圖33 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16. 375)
圖34 南京博物院等一九六三、圖一五
圖35 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六、圖版六、2中
圖36 a、b 湖北省博物館一九七六、圖版四、8、圖一六
圖37 a、b、c 鄭州市博物館一九六五、圖版四、1、2
圖38 a、b、c 梁、高一九六二、圖版一一九、6、5、1
圖39 a、b 梁、高一九六七、圖版三四、22、21
- 圖40 a、b 馬、周、張一九五五、圖版一八、4、5
圖41 石一九五四、圖版一七、1
圖42 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16. 161)
圖43 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 46)
圖44 Pelliot 1925, pl. 10. 2 (Fogg Art Museum, Reg. no. 1943. 50. 32)
圖45 Visser 1947, no. 91
圖46 京大人文研寫眞
圖47 ブリティッシュ・ミュージアム寫眞 (Reg. no. 1911. 4-7. 6)
圖48 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 52)
圖49 ナショナル・ミュージアム・オヴ・アメリカン・アート寫眞
圖50 同右
圖51 京大人文研寫眞
圖52 同右 (江村治樹氏撮)
圖53 Loo 1950, pl. 5. 3
圖54 サックラー・コレクション寫眞 (Reg. no. J-1085)
圖55 戴一九七七、圖版四、5、圖二、2より筆者製圖
圖56 京大人文研寫眞
圖57 同右
圖58 同右
圖59 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16. 491)
圖60 ♪ ♪ (Reg. no. 16. 492)
圖61 ミネアポリス美術館寫眞 (Acc. no. 50. 46. 310)
圖62 シカゴ美術館寫眞
圖63 京大人文研寫眞
圖64 フォッグ美術館寫眞 (Reg. no. 1943. 50. 59)
圖65 趙一九六六
圖66 京大人文研寫眞 (Museum für Ostasiatische Kunst, Köln, inv. no. H30, 7)

- 圖 67 シカゴ美術館寫眞
圖 68 フリア美術館寫眞 (Reg. no. 16. 493. 2)
圖 69 陶、王一九七二、圖六、19
圖 70 敖、王一九八〇、圖二、2
圖 71 京大人文研寫眞
圖 72 陝西省文物管理委員會一九六〇、圖版三、9
圖 73 會一九八〇、圖版一、8
圖 74 京大人文研寫眞
測圖 1-9 京大人文研考古資料中の原圖より筆者修正仕上げ。

引用文獻目錄

日本文・中國文

- 安志敏一九五五、「中國古代的石刀」『考古學報』一〇、二七一—五一頁
安陽地區文物管理委員會一九八〇、「河南湯陰白營龍山文化遺址」『考古』一
九八〇、三、一九三—二〇二
飯島武次一九七七—八、「殷前期の提言、(1) (2) (未完)」『古代文化』二
九、四、七。三〇、六、七、八、一一。三一、一、四、八。三二、一、
三。三三、二
石毛直道一九六八、「日本稻作の系譜—稻の收穫法—上、下」『史林』五一、
五、七五—一二二頁。五一、六、八九〇—九一二頁
殷璋璋一九七八、「三里頭文化探討」『考古』一九七八、一、一一—四
尹煥章、張正祥一九六二、「對江蘇太湖地區新石器文化的一些認識」『考古』
一九六二、三、一四七—一五七
殷濂非、羅長銘一九五八、「壽縣出土的『鄂君啓金節』」『文物參考資料』一
九五八、四、八一—一二頁
江村治樹一九七八、「侯馬盟書」『內田吟風博士頌壽記念論集』六五—一〇二
河南省博物館一九七三、「鄭州南關外商代遺址的發掘」『考古學報』一九七三、
一、六五—一九二

- 河南省文化局文物工作隊第一隊一九五七、「鄭州洛達廟商代遺址試掘簡報」
『文物參考資料』一九五七、一〇、四八—五一
河南省文化局文物工作隊一九五九、「河南偃師灰嘴遺址發掘簡報」『文物』一
九五九、一二、四一—四二、裏表紙裏
河南省文化局文物工作隊一九六〇、「河南新鄉潞王墳商代遺址發掘報告」『考
古學報』一九六〇、一、五一—六〇
河南省文化局文物工作隊一九六一、「河南滎陽河王新石器時代遺址」『考古』
一九六一、二、九四—九八
河南省文化局文物工作隊一九六六、「河南鄭州上街商代遺址發掘報告」『考
古』一九六六、一、一一—七
郭寶鈞一九四八、「古玉新銓」『中央研究院歷史語言研究所集刊』二〇、下、
一—四六
湖北省博物館一九七六、「一九六三年湖北黃陂盤龍城商代遺址的發掘」『文
物』一九七六、一、四九—五九頁
故宮博物院一九七四、「故宮博物院藏工藝品選」北京
吳汝祚一九八〇、「太湖地區的原始文化」『文物集刊』一、八八—九三
黃河水庫考古工作隊河南分隊一九六〇、「河南陝縣七里鋪商代遺址發掘」『考
古學報』一九六〇、一、二五—四九
黃宣佩、張明華一九八〇、「關於崧澤墓地文化的幾點認識」『文物集刊』一、
一〇九—一一五
敖天照、王有鵬一九八〇、「四川廣漢出土商代玉器」『文物』一九八〇、九、
七六
山東省博物館一九六三、「山東安邱峒峪、胡峪新石器時代遺址調查」『考古』
一九六三、一〇、五二—五三五
山東省博物館、日照縣文化館東海峪發掘小組一九七六、「一九七五年東海峪
遺址的發掘」『考古』一九七六、六、三七—三八二、三七七
山東省文物管理處、山東省博物館一九五九、「山東文物選集」普查部分、北
京

- 山東省文物管理處一九六〇、「山東日照兩城鎮遺址勘查紀要」『考古』一九六〇、九、一〇—一四
- 山東大學歷史系考古專業一九八〇、「山東泗水尹家城第一次試掘」『考古』一九八〇、一、一一—一七、三二
- 昌樂地區文物管理組、諸城縣博物館一九八〇、「山東諸城呈子遺址發掘報告」『考古學報』一九八〇、三、三三—三九
- 蔣繼初一九五八、「杭州老和山遺址一九五三年第一次的發掘」『考古學報』一九五八、二、五一—五
- 鄒衡一九七九、「關於探討夏文化的幾個問題」『文物』一九七九、三、六四—六九
- 鄒衡一九八〇、「夏商周考古學論文集」北京
- 石加一九八〇、「鄭亳說」商權『考古』一九八〇、三、二五—二五八
- 二八六
- 石興邦一九五四、「長安普渡村西周墓葬發掘記」『考古學報』八、一〇九—一六
- 浙江省文物管理委員會一九六〇、「吳興錢山漾遺址第一、二次發掘報告」『考古學報』一九六〇、二、七三—九一
- 浙江省文物管理委員會一九六〇a、「杭州水田畝遺址發掘報告」『考古學報』一九六〇、二、九三—一〇六
- 陝西省文物管理委員會一九六〇、「陝西岐山、扶風周墓清理記」『考古』一九六〇、八、八一—二
- 曾凡一九八〇、「關於福建史前文化遺存的探討」『考古學報』一九八〇、三、二六—二八四
- 孫華一九八〇、「關於二里頭文化」『考古』一九八〇、一、五二—五二五
- 戴應新一九七七、「陝西神木縣石峁龍山文化遺址調查」『考古』一九七七、三、一五四—一五七、一七二
- 中國科學院考古研究所一九六一、「一九五九年河南偃師二里頭試掘簡報」『考古』一九六一、二、八二—八五、八一
- 中國科學院考古研究所山東工作隊一九六五、「山東泗水、兗州考古調查簡報」『考古』一九六五、一、六一—二、三九
- 中國科學院考古研究所山東工作隊、曲阜縣文物管理委員會一九六五、「山東曲阜考古調查試掘簡報」『考古』一九六五、一二、五九九—六一三
- 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七四、「河南偃師二里頭早商宮殿遺址發掘簡報」『考古』一九七四、四、一三四—二四八
- 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七五、「河南偃師二里頭遺址三、八區發掘簡報」『考古』一九七五、五、三〇二—三〇九、二九四
- 中國科學院考古研究所二里頭工作隊一九七六、「偃師二里頭遺址新發現的銅器和玉器」『考古』一九七六、四、二五九—二六三
- 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、「河南偃師二里頭遺址發掘簡報」『考古』一九六五、五、二二五—二三四
- 中國社會科學院考古研究所山西工作隊一九八〇、「晉南二里頭文化遺址的調查與試掘」『考古』一九八〇、三、二〇三—二一〇、二七八
- 趙新來一九六六、「鄭州二里岡新發現的商代玉璋」『文物』一九六六、一、五八
- 陳左夫一九五七、「良渚古玉探討」『考古通訊』一九五七、二、七七—八〇
- 鄭州市博物館一九六五、「鄭州市銘功路西側的兩座商代墓」『考古』一九六五、一〇、五〇〇—五〇六
- 東下馮考古隊一九八〇、「山西夏縣東下馮遺址東區、中區發掘簡報」『考古』一九八〇、二、九七—一〇七
- 陶正剛、王克林一九七二、「侯馬東周盟誓遺址」『文物』一九七二、四、二七—三七
- 南京博物院一九八〇、「青蓮崗文化的經濟形態和社會發展段階」『文物集刊』一、三七—四六
- 南京博物院一九八〇a、「太湖地區的原始文化」『文物集刊』一、九三—一〇一
- 南京博物院一九八〇b、「江蘇吳縣草鞋山遺址」『文物資料叢刊』三、一一—二

四

南京博物院、南京市文物保管委員會、江蘇省文物管理委員會、江蘇省博物館
一九六三、『江蘇省出土文物選集』北京

馬得志、周永珍、張雲鵬一九五五、『一九五三年安陽大司空村發掘報告』『考古學報』九、二五一—九〇

濱田耕作一九二五、『有竹齋藏古玉譜』

林巳奈夫一九六九、『中國古代的祭玉、瑞玉』『東方學報』四〇、一六一—三二三頁

林巳奈夫一九七二、『中國殷周時代的武器』京都

林巳奈夫一九七九、『先殷式的玉器文化』『MUSEUM』三三四號、四—一六頁

林巳奈夫一九七九 a、『中國古代的酒壺』『考古學雜誌』六五、二—一—二二
林巳奈夫一九八一、『良渚文化の玉器若干をめぐって』『MUSEUM』三六〇號、二二—三三頁

馮漢驥、董恩正『記廣漢出土的玉器』『文物』一九七九、二、三二—三三七

北京大學歷史系考古教研室商周組一九七九、『商周考古』北京

楊育彬一九八〇、『談々夏代文化的問題—兼對《鄭州南城即湯都臺說》一文商榷』『河南文博通訊』一九八〇、四、一八一—二三

李景明一九四七、『豫東南部永城調查及造律臺黑孤堆曹橋三處小發掘』『中國考古學報』二、八八一—二〇

李濟一九五二、『殷虛有刃石器圖說』【中央研究院歷史語言研究所集刊】三、下、五二—六一九

劉敦愿一九五八、『日照兩城鎮龍山文化遺址調查』『考古學報』一九五八、一、二五—四二

劉敦愿一九七二、『記兩城鎮遺址發現的兩件石器』『考古』一九七二、四、五

六一七頁

中國古代の石庖丁形玉器と骨鏹形玉器

梁思永、高去尋一九六二、『侯家莊』第二本、一〇〇—一號大墓、臺北
梁思永、高去尋一九六七、『侯家莊』第四本、一〇〇三號大墓、臺北

歐文

Dohrenwend, Doris J., 1971: *Chinese Jades in the Royal Ontario Museum*, Toronto

Dohrenwend, Doris J. 1975: Jade Demonic Images from Early China, *Ars Orientalis* X, pp. 55-78.

Fong, Wen 1981: *The Great Bronze Age of China, an Exhibition from the People's Republic of China*, New York

Hansford, S. Howard 1948: *The Oriental Ceramic Society, Exhibition of Chinese Jades*, London

Lauter, B. 1912: *Jade, A Study in Chinese Archaeology and Religion*, Chicago

Loehr, Max 1975: *Ancient Chinese Jades from the Grenville L. Winthrop Collection in the Fogg Art Museum*, Harvard University, Chicago

Loe, C. T. 1950: *An Exhibition of Chinese Archaic Jades*, New York

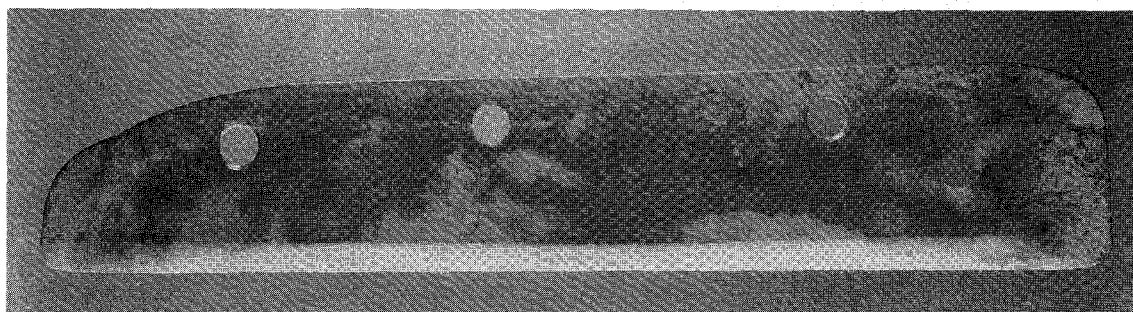
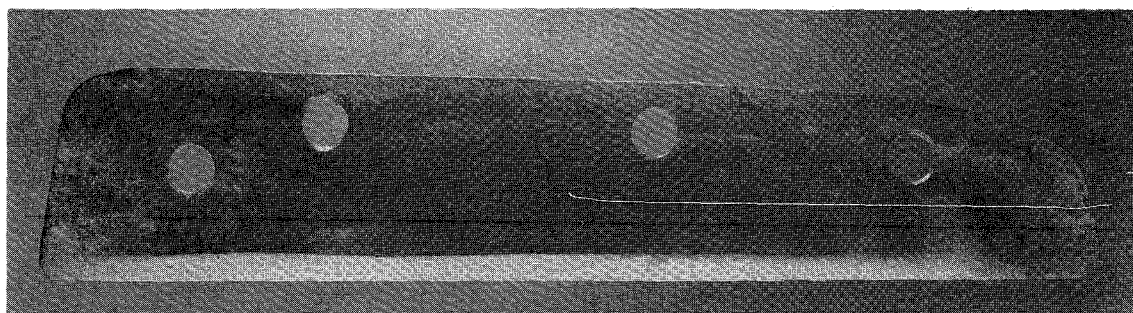
Nott, Stanley Charles 1962: *Chinese Jade through the Ages*, Rutland, Vermont and Tokyo

Pelliot, M. Paul 1925: *Jades archaïques de Chine appartenant à A. M. C. T. Loo*, Paris

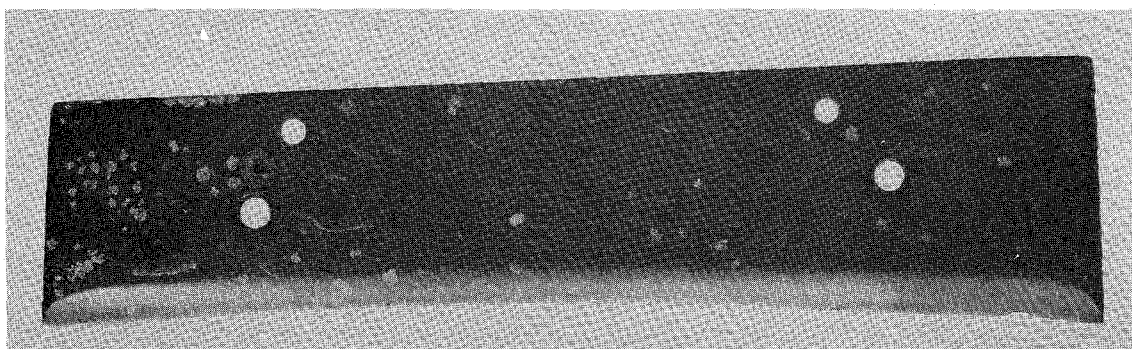
Salmony, A. 1952: *Archaic Chinese Jades from the Edvard and Louise B. Sonnenschein Collection*, Chicago

Visser, H. F. E. 1947: *Asiatic Art in Private Collections of Holland Belgium*, Amsterdam

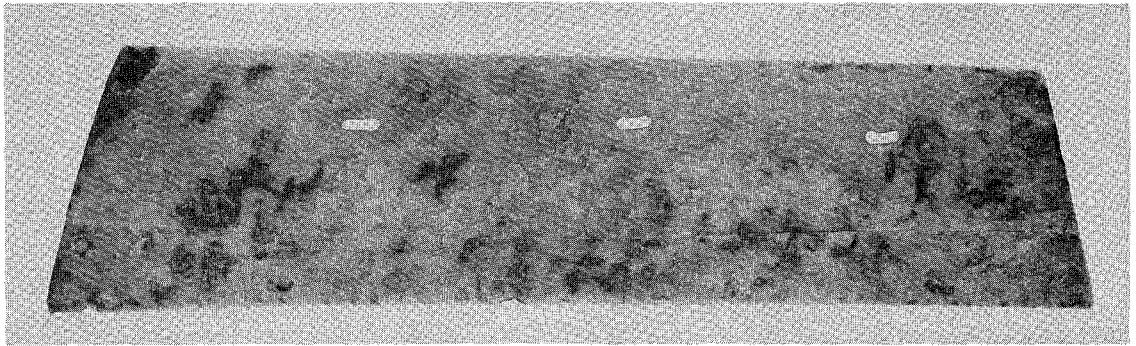
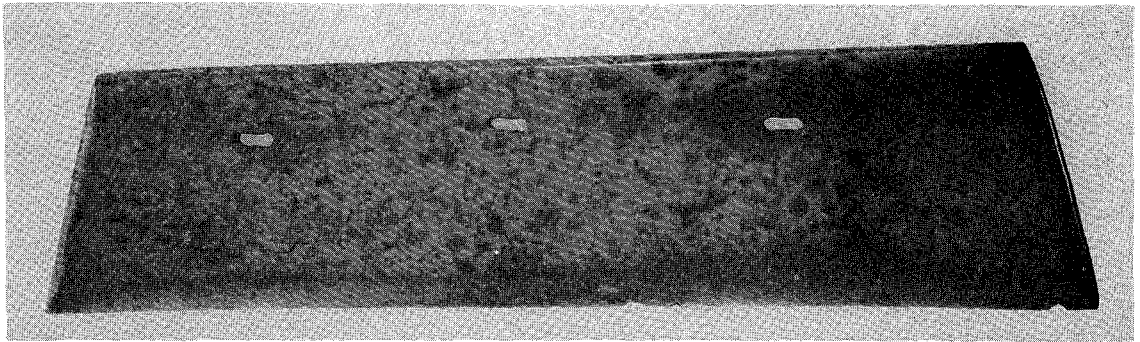
Willets, William 1965: *Foundation of Chinese Art from Neolithic Pottery to Modern Architecture*, London



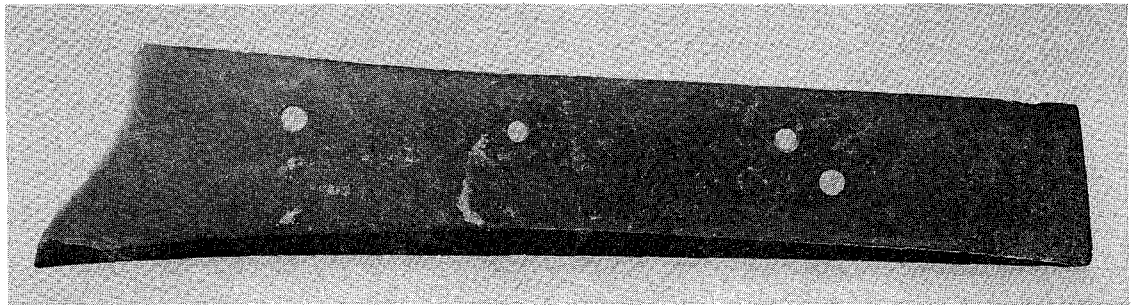
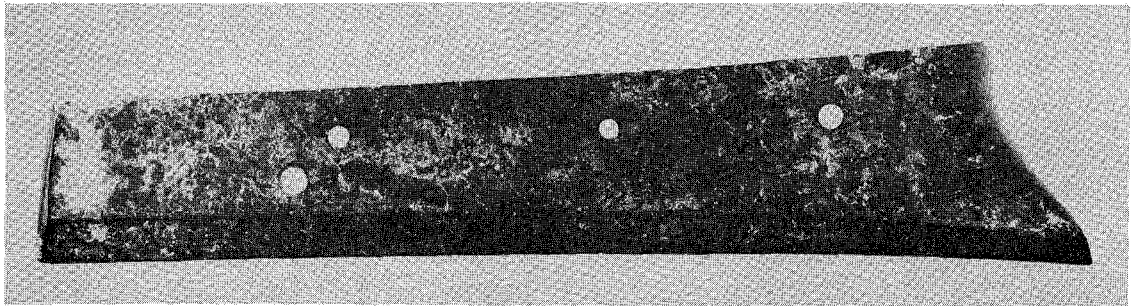
圖版1 二枚一組の石庖丁形玉器 不對稱孔細長型 上 長 36.5cm 下 長 37.0cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Winthrop



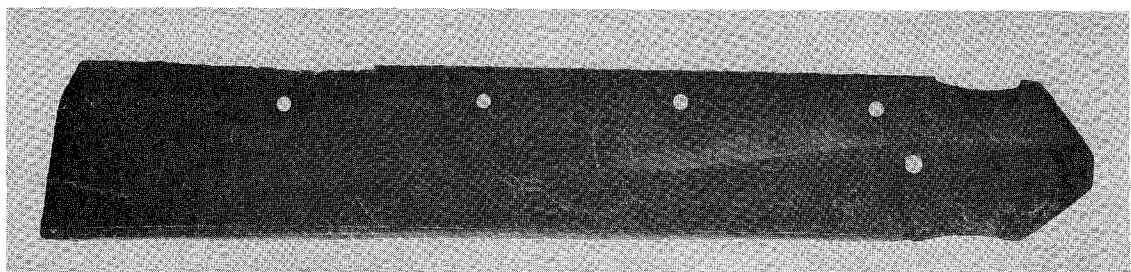
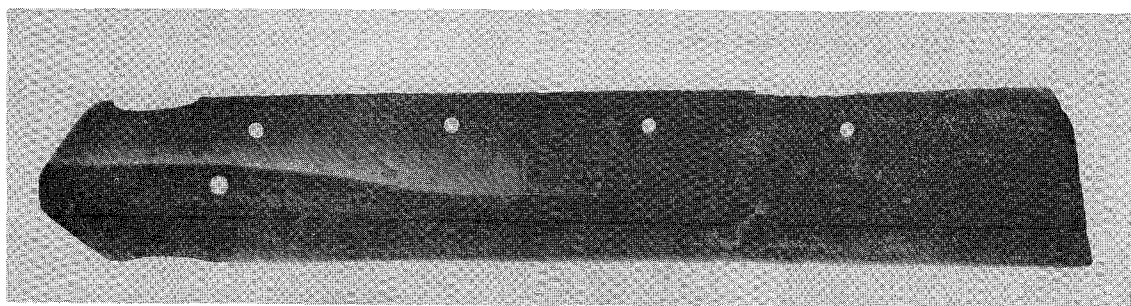
圖版2 二枚に挽き切られた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 35.6cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution



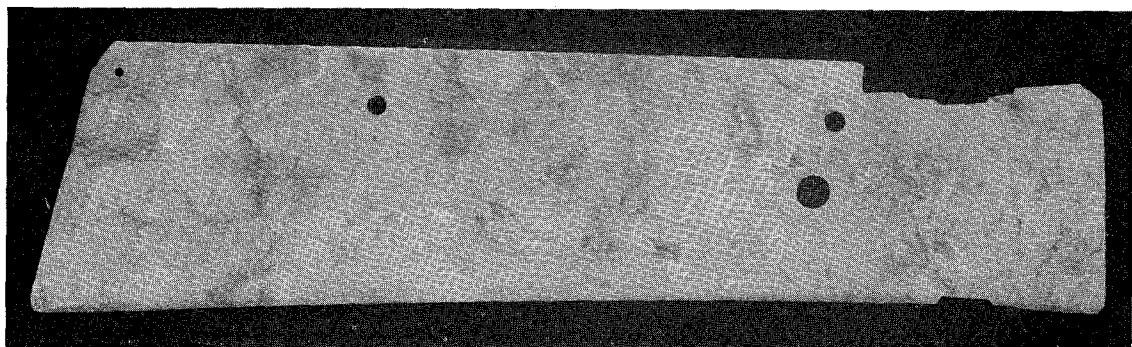
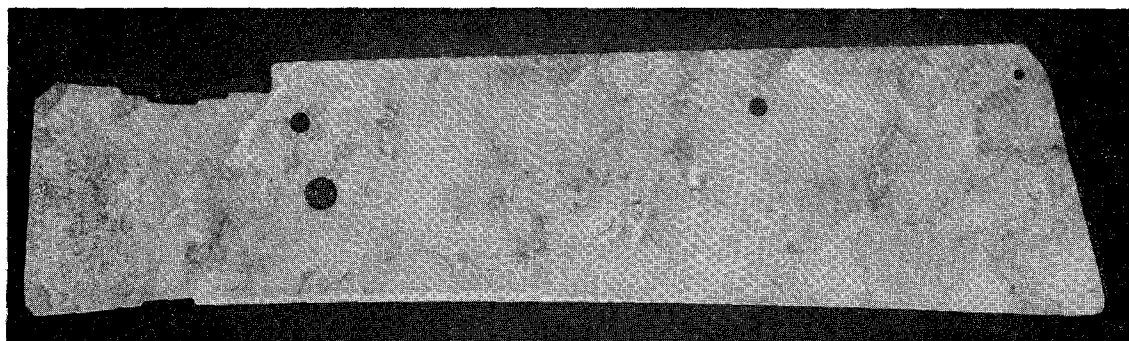
圖版 3 薄く挽き切られた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 28cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution



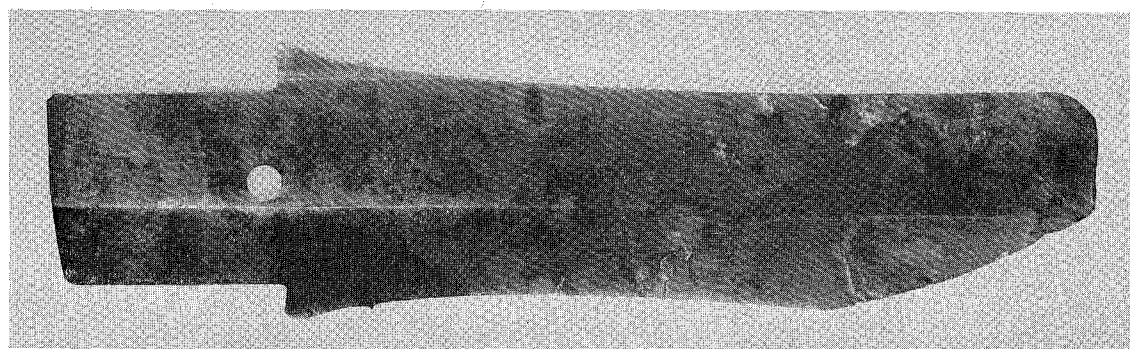
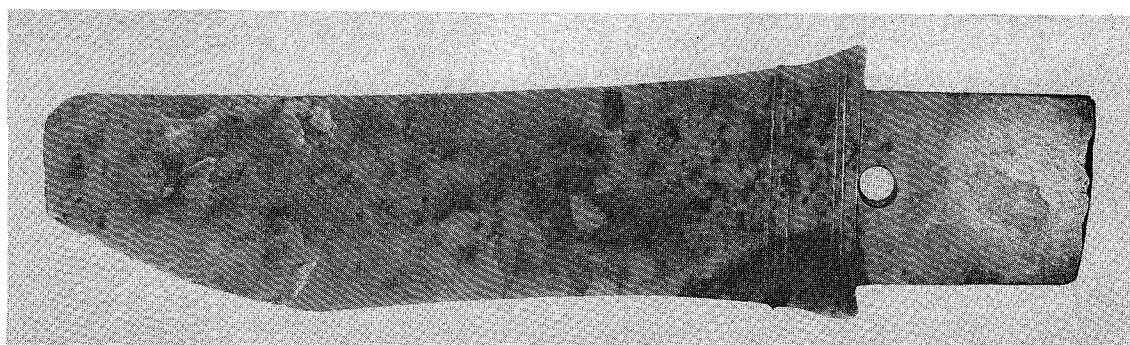
圖版 4 薄く挽き切られた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 29.5cm 白鶴美術館



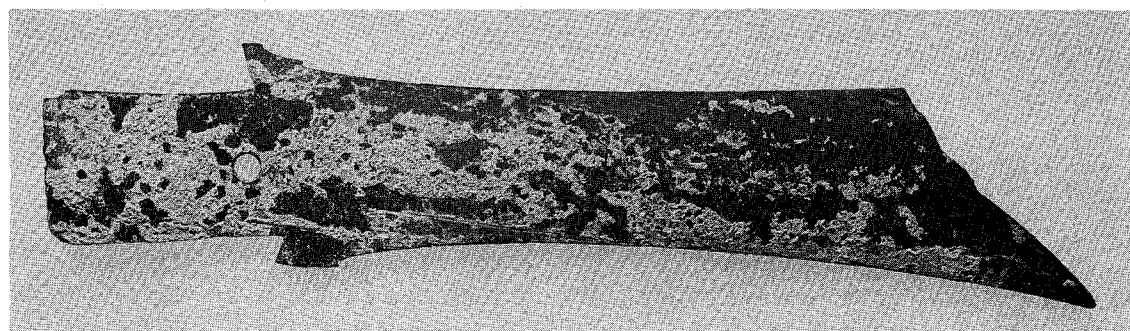
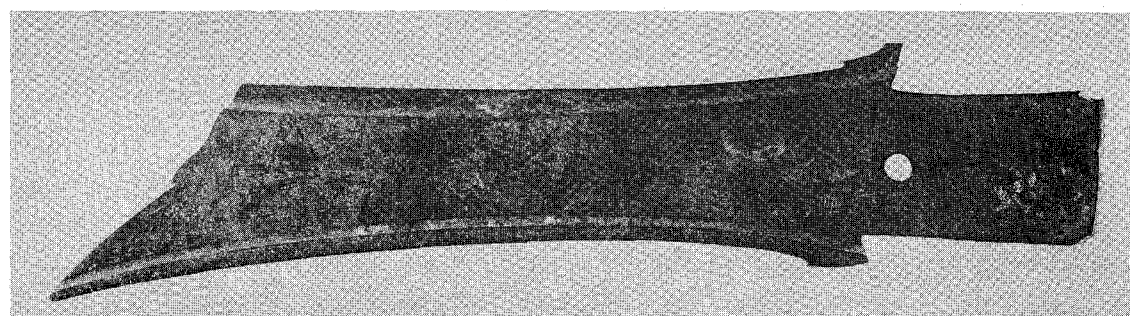
圖版 5 薄く挽き切られた石庖丁形玉器 不對稱細長型 長 49.2cm Courtesy of the Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution



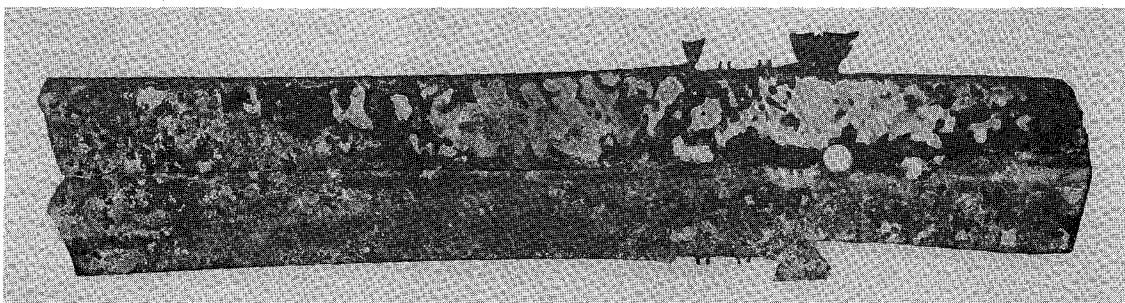
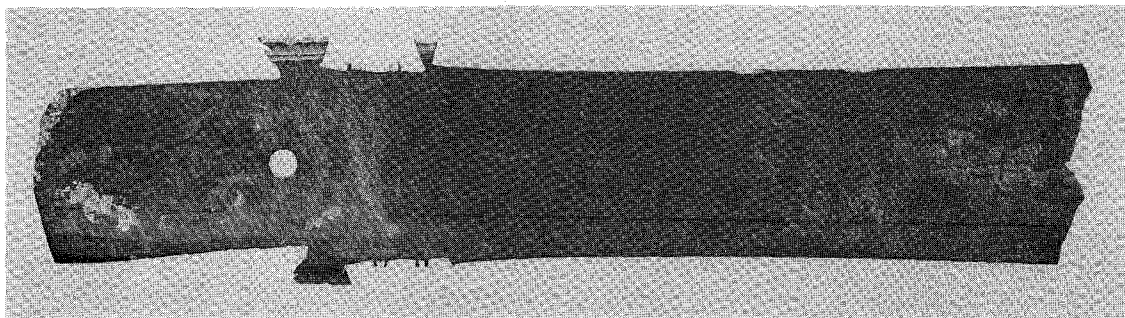
圖版 6 刻みを入れ、薄く挽き切られた石庖丁形玉器 不對稱太短型 長 34.5cm Museum für Ostasiatische Kunst



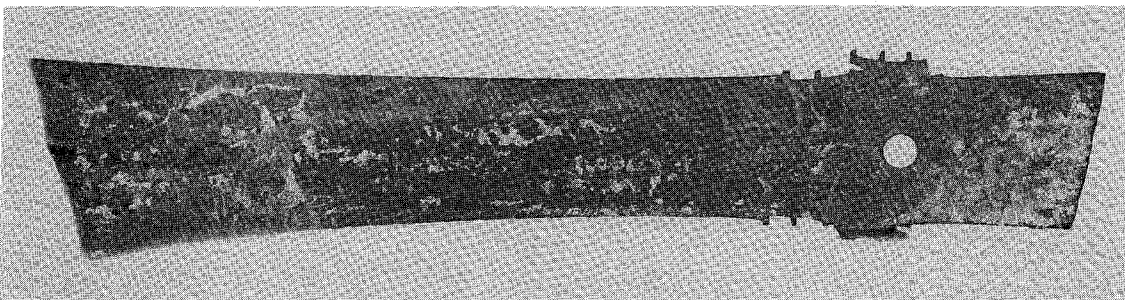
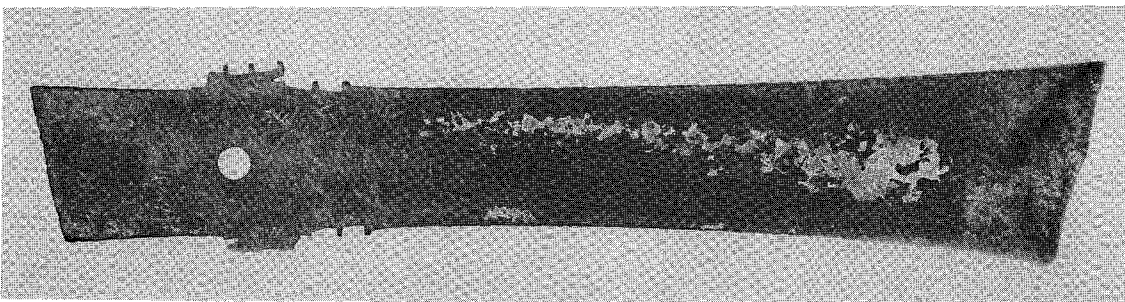
圖版 7 薄く挽き切られた骨鏃形玉器 長 28.2cm 出光美術館



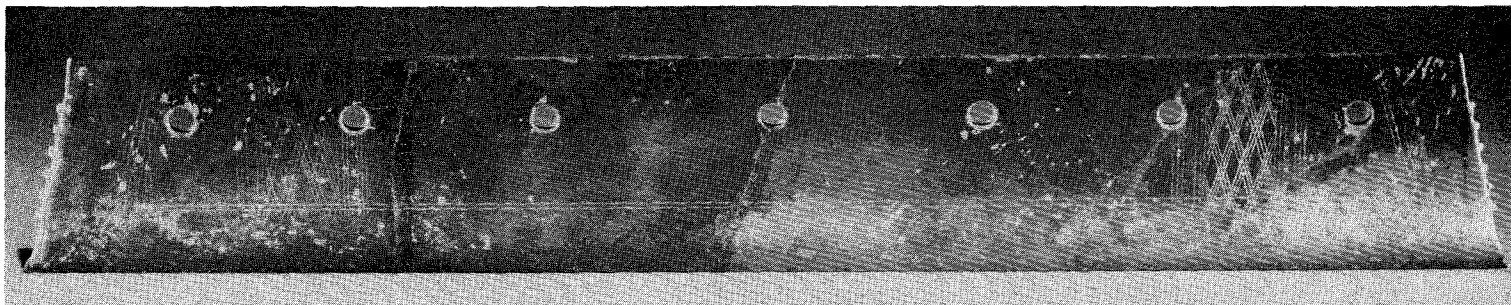
圖版 8 薄く挽き切られた骨鏃形玉器 長 31.2cm 白鶴美術館



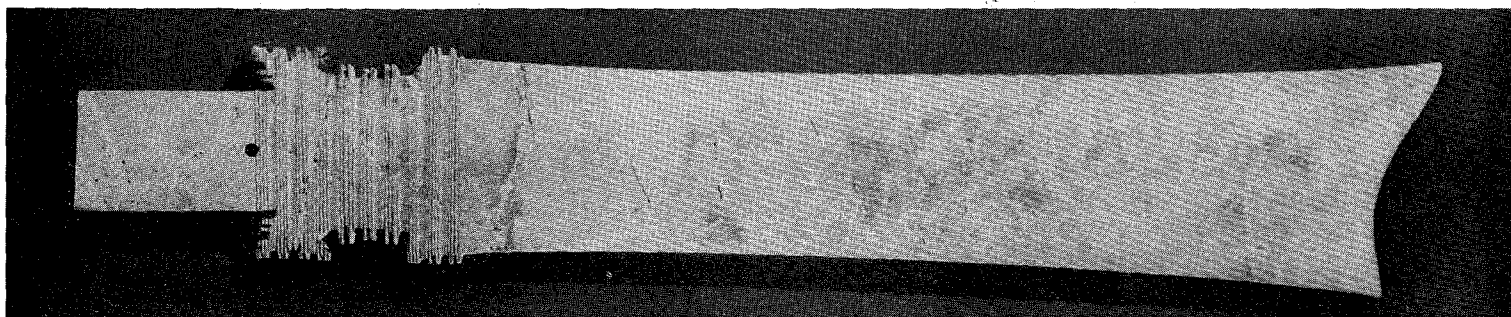
圖版9 薄く挽き切られた骨鏃形玉器 二里頭型 長 30.15cm 白鶴美術館



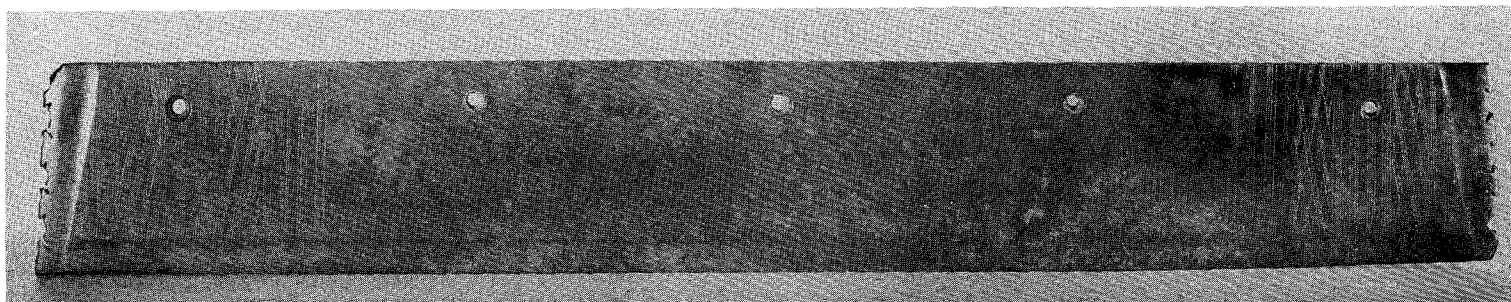
圖版10 薄く挽き切られた骨鏃形玉器 神木型 長 33.1cm 白鶴美術館



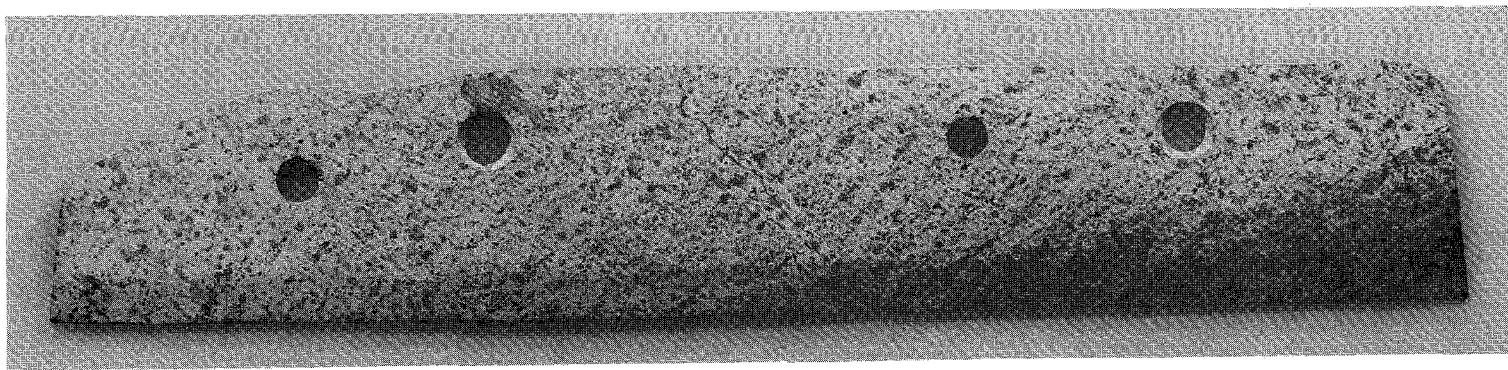
圖版11 石庖丁形玉器 近似對稱細長型 河南偃師二里頭出土 長 65.2cm Courtesy of the Cultural Relics Bureau, Beijing and the Metropolitan Museum of Art, New York



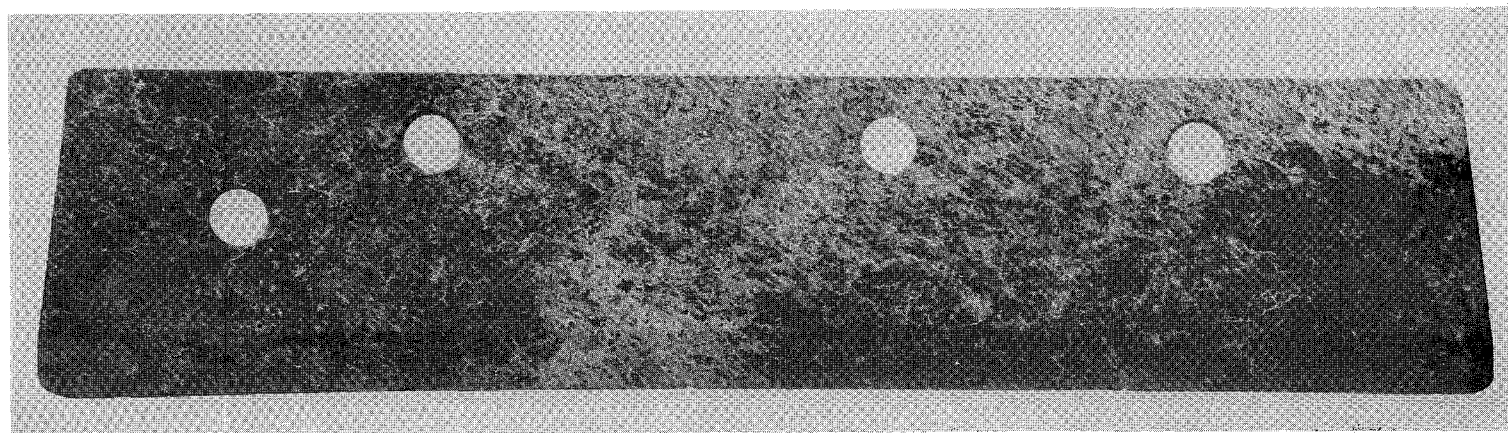
圖版12 骨鏟形玉器 河南偃師二里頭出土 長 48.1cm Courtesy of the Cultural Relics Bureau, Beijing and the Metropolitan Museum of Art, New York



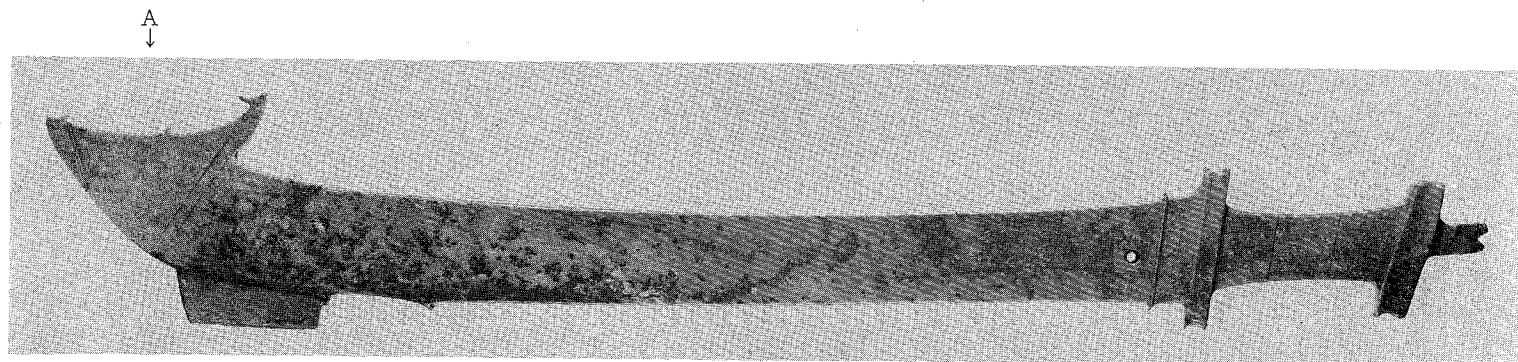
圖版13 石庖丁形玉器 近似對稱細長型 長 73.7cm Dr. Arthur M. Sachler Collection



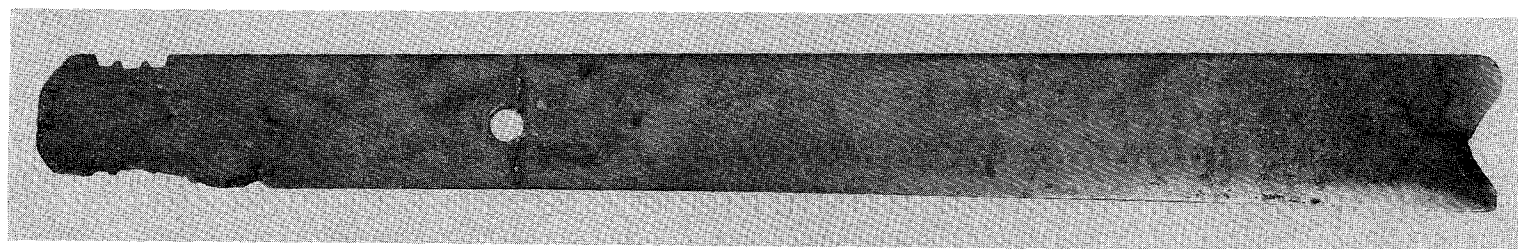
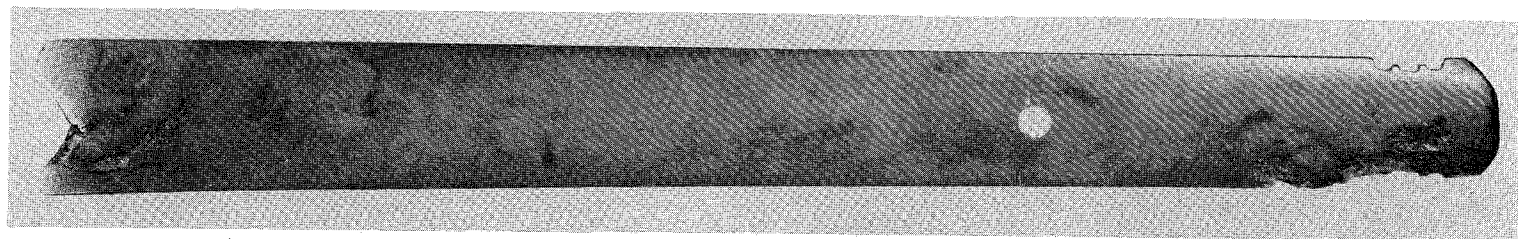
圖版14 石庖丁形玉器 不對稱孔細長型 長 40.5cm 出光美術館



圖版15 石庖丁形玉器 不對稱孔細長型 長 40.9cm 東京國立博物館



↑
B
圖版16 玉柄玉斧 長 56.2cm Courtesy of the Fogg Art Museum, Harvard University Bequest-Grenville L. Wintrop



圖版17 骨鏹型玉器 本體基部無境界型 長 41.5cm 出光美術館